

浜松城下町遺跡 2

Hamamatsu Castletown Site

2020 年 3 月

浜松市教育委員会

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2020



浜松城下町遺跡 2

Hamamatsu Castle Town Site

The 11th excavation report

Hamamatsu Municipal Board of Education

2020

浜松市教育委員会

例 言

- 1 本書は浜松城下町遺跡（11 次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国道 257 号の道路改良工事に先立ち実施した。発掘調査は浜松市（南土木整備事務所）の依頼により、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財が補助執行）が行い、実務は浜松市から委託を受けた株式会社アコードが担当した。調査にかかわる費用は、浜松市が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は、以下の通りである。
調査面積 380.7 m²
委託期間 令和元年（2019）5 月 23 日～令和 2 年（2020）3 月 19 日
（うち現地調査期間 令和元年 7 月 2 日～11 月 7 日）
- 4 調査は、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）、和田達也（同）指示のもと、西村匡広（株式会社アコード）が担当した。
- 5 調査で作成した図面の編集、出土遺物の整理作業や記録作業は、西村の指示のもと田村和久、田畑徹也、今田明子、吉井啓二（株式会社アコード）が行った。
- 6 本書の執筆は、第 1 章 1～3、第 3 章を鈴木が、第 2 章 1 を和田が担当し、ほかを西村が行った。現地における写真撮影及び遺物写真撮影は、西村が行った。本書の編集は、西村が行った。
- 7 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市地域遺産センターで保管している。
- 8 現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々や機関から様々なご指導、ご助言、ご支援を賜った。記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

藤澤良祐 堀内秀樹 笠原 隆

凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づく。図中の X・Y 座標は国土座標第Ⅷ系によるものであり、m 単位で表記している。また平面図の方位（北）は座標北を示している。
- 2 標高は東京湾平均海水面（T.P.）に基づいている。
- 3 本調査の調査区名はこれまでの調査に従い、ローマ数字を用いた呼称を採用した。
- 4 本遺跡の土層・遺構埋土及び遺物胎土の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2015 版（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 5 遺構番号については調査区ごとに 01 から開始し、二桁で表示した。
- 6 本書における遺構略記号は、以下のとおりである。
- 7 本書における挿図の縮尺は各図中に明示したが、遺構図は 1/40 を基本とした。遺物については 1/4 を基本とし、金属など小型品を 1/2、1/1 で掲載した。
- 8 遺物の断面の網掛けの使用例は、以下の通りである。

須恵器  (K =100%) 土師器・土師質土器  陶器  (K =40%)
磁器  (K =20%) 貿易陶磁器  (K =60%)

浜松城下町遺跡 2

目 次

例言・凡例

第1章 序 論	1
1 調査に至る経緯	1
2 遺跡周辺の環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3 浜松城下町遺跡の調査履歴	3
4 調査の方法と経過	5
第2章 調査成果	9
1 確認調査の成果	9
(1) 確認調査の概要	9
(2) 基本層序と遺構検出面	9
(3) 検出遺構と出土遺物	11
(4) 小 結	16
2 基本層序と遺構検出面	19
(1) 基本層序	19
(2) 遺構検出面	21
3 I 区の調査	22
(1) 概 要	22
(2) 遺 構	22
(3) 遺 物	29
(4) 小 結	33
4 II 区の調査	34
(1) 概 要	34
(2) 遺 構	34
(3) 遺 物	59
(4) 小 結	66
5 III 区の調査	68
(1) 概 要	68
(2) 遺 構	68
(3) 遺 物	69
(4) 小 結	70
6 IV 区の調査	71

(1) 概 要	71
(2) 遺 構	74
(3) 遺 物	75
(4) 小 結	77
遺構一覧表	78
出土遺物観察表	88
第3章 総 括	94
1 発掘調査の成果	94
2 今後の課題と展望	95

図 版

挿図目次

Fig.1 浜松城下町遺跡の位置	1
Fig.2 近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴	4
Fig.3 調査区配置図	6
Fig.4 調査地区割模式図	7
Fig.5 現地作業風景	8
Fig.6 整理作業風景	8
Fig.7 確認調査の調査区配置	10
Fig.8 7次調査詳細	12
Fig.9 8次調査詳細	13
Fig.10 7次調査出土遺物 (1)	14
Fig.11 7次調査出土遺物 (2)	15
Fig.12 8次調査出土遺物	16
Fig.13 調査区堆積状況模式図	19
Fig.14 II a 区地割境の状況	20
Fig.15 II a 区東壁地割境の状況	20
Fig.16 II a 区西壁地割境の状況	20
Fig.17 II a 区西壁地割境の状況	20
Fig.18 I 区遺構全体図	22
Fig.19 I 区壁面図	23
Fig.20 I 区遺構図 (1)	24
Fig.21 I 区 SE01 遺構図	25
Fig.22 I 区 SE02 遺構図	25
Fig.23 I 区 SK02 遺物出土状況図	26
Fig.24 I 区遺構図 (2)	27
Fig.25 I 区遺構図 (3)	28
Fig.26 I 区 SA01 遺構図	29
Fig.27 I 区出土遺物	30
Fig.28 I 区 SE02 上・中層出土遺物	31
Fig.29 I 区 SE02 下層出土遺物	32
Fig.30 II a・II b 区遺構全体図	35

Fig.31	Ⅱ a・Ⅱ b 区壁面図 (1)	36
Fig.32	Ⅱ a・Ⅱ b 区壁面図 (2)	37
Fig.33	Ⅱ c 区遺構全体図	38
Fig.34	Ⅱ c 区北部壁面図	39
Fig.35	Ⅱ c 区南部西壁面図	40
Fig.36	Ⅱ c 区南部南壁面図	41
Fig.37	Ⅱ d・Ⅱ e 区遺構全体図	42
Fig.38	Ⅱ d 区壁面図	43
Fig.39	Ⅱ e 区壁面図	44
Fig.40	Ⅱ b 区 SD01 遺構図	45
Fig.41	Ⅱ c 区南部遺構図 (1)	46
Fig.42	Ⅱ c 区南部西壁断面 地割境界	47
Fig.43	Ⅱ c 区南部東壁断面 地割境界	47
Fig.44	Ⅱ c 区北部 SE01 遺構図	47
Fig.45	Ⅱ c 区南部 SE02 遺構図	48
Fig.46	Ⅱ c 区北部 SE03 遺構図	49
Fig.47	Ⅱ b 区 SK09 遺構図	50
Fig.48	Ⅱ b 区 SK09 遺物出土状況図	50
Fig.49	Ⅱ c 区北部遺構図 (1)	50
Fig.50	Ⅱ a・Ⅱ b 区遺構図 (1)	52
Fig.51	Ⅱ c 区南部遺構図 (2)	53
Fig.52	Ⅱ c 区南部遺構図 (3)	54
Fig.53	Ⅱ e 区遺構図	55
Fig.54	Ⅱ d 区 SX02 遺構図	56
Fig.55	Ⅱ d 区 SX03 遺構図	57
Fig.56	Ⅱ a 区 SA01 遺構図	58
Fig.57	Ⅱ c 区南部 SA02 遺構図	59
Fig.58	Ⅱ a・Ⅱ b 区出土遺物	60
Fig.59	Ⅱ c 区北部出土遺物	61
Fig.60	Ⅱ c 区南部出土遺物 (1)	62
Fig.61	Ⅱ c 区南部出土遺物 (2)	64
Fig.62	Ⅱ d 区出土遺物	65
Fig.63	Ⅱ e 区出土遺物 (1)	65
Fig.64	Ⅱ e 区出土遺物 (2)	65
Fig.65	Ⅲ区遺構全体図	68
Fig.66	Ⅲ区壁面図	69
Fig.67	Ⅲ区遺構図	70
Fig.68	Ⅲ区出土遺物	70
Fig.69	Ⅳ区遺構全体図	71
Fig.70	Ⅳ区西壁面図	72
Fig.71	Ⅳ区北壁面図	73
Fig.72	Ⅳ区 SD02・SK02・SK05 遺構図	74
Fig.73	Ⅳ区 SK03・SK04 遺構図	74
Fig.74	Ⅳ区 SR01 遺構図	75
Fig.75	Ⅳ区出土遺物	76

表 目 次

Tab.1	確認調査出土遺物観察表（１）	17
Tab.2	確認調査出土遺物観察表（２）	18
Tab.3	I 区遺構一覧表（１）	78
Tab.4	I 区遺構一覧表（２）	79
Tab.5	III 区遺構一覧表	79
Tab.6	II 区遺構一覧表（１）	80
Tab.7	II 区遺構一覧表（２）	81
Tab.8	II 区遺構一覧表（３）	82
Tab.9	II 区遺構一覧表（４）	83
Tab.10	II 区遺構一覧表（５）	84
Tab.11	II 区遺構一覧表（６）	85
Tab.12	II 区遺構一覧表（７）	86
Tab.13	IV 区遺構一覧表	87
Tab.14	遺物観察表（１）	88
Tab.15	遺物観察表（２）	89
Tab.16	遺物観察表（３）	90
Tab.17	遺物観察表（４）	91
Tab.18	遺物観察表（５）	92
Tab.19	遺物観察表（６）	93
Tab.20	大窯段階における陶器の時期別組成	95

図 版

PL.1	1	Ⅱ a 区完掘全景（南西から）		2	Ⅱ a 区東壁断面（北西から）
PL.2	1	I 区完掘全景（東から）	PL.10	1	Ⅱ a 区Ⅴ層上面高杯出土状況（東から）
	2	I 区完掘全景（南から）		2	Ⅱ a 区 SP08 鉄滓出土状況（南から）
PL.3	1	I 区西壁断面（東から）		3	Ⅱ a 区 SP39 根石出土状況（西から）
	2	I 区北壁断面（南から）		4	Ⅱ a 区 SP47 断面（西から）
	3	I 区 SE01 断面（東から）		5	Ⅱ a 区 SP13・SP39 断面（東から）
PL.4	1	I 区 SE02 断面（北から）		6	Ⅱ a 区 SP48 断面（西から）
	2	I 区 SE02 中層遺物出土状況（北から）		7	Ⅱ a 区 SP55 断面（西から）
PL.5	1	I 区 SE02 完掘状況（北から）		8	Ⅱ a 区 SP45 断面（西から）
	2	I 区 SD01 完掘状況（西から）	PL.11	1	Ⅱ b 区完掘全景（北東から）
PL.6	1	I 区 SK02 遺物出土状況（北から）		2	Ⅱ b 区南壁断面（北から）
	2	I 区 SP15 根石出土状況（南から）	PL.12	1	Ⅱ b 区 SK09 検出状況（東から）
	3	I 区 SP09 断面（南から）		2	Ⅱ b 区 SK09 遺物出土状況（東から）
	4	I 区 SP20 断面（南から）	PL.13	1	Ⅱ b 区 SK09 断面（南東から）
	5	I 区 SP07 断面（南から）		2	Ⅱ b 区 SK09 遺物出土状況（南西から）
PL.7	1	Ⅱ a 区完掘全景（南から）		3	Ⅱ b 区 SP112 遺物出土状況（東から）
	2	Ⅱ a 区完掘全景（北から）		4	Ⅱ b 区 SD01 断面（北から）
PL.8	1	Ⅱ a 区完掘全景（北東から）		5	Ⅱ b 区 SP126 断面（西から）
	2	Ⅱ a 区柱列 SA01（南から）	PL.14	1	Ⅱ c 区北部完掘全景（南から）
PL.9	1	Ⅱ a 区西壁断面（北東から）		2	Ⅱ c 区北部東壁断面（西から）

	3	II c 区北部西壁断面（東から）		3	II d 区 SP105 断面（北から）
PL.15	1	II c 区北部 SE03 2 層上面遺物出土状況（西から）		4	II d 区 SP106 断面（西から）
	2	II c 区北部 SE03 5 層上面礫層検出状況（北から）	PL.26	1	II e 区完掘全景（東から）
PL.16	1	II c 区北部 SE01 完掘状況（南から）		2	II e 区南壁断面（北東から）
	2	II c 区北部 SE01 断面（南から）	PL.27	1	III 区完掘全景（東から）
	3	II c 区北部 SE01 底面遺物出土状況（西から）		2	III 区東壁断面（西から）
	4	II c 区北部 SE03 上層断面（北から）		3	III 区南壁断面（北から）
	5	II c 区北部 SE03 下層断面（北から）	PL.28	1	IV 区完掘全景（西から）
PL.17	1	II c 区南部完掘全景（北から）		2	IV 区西壁断面（東から）
	2	II c 区南部完掘全景（北西から）	PL.29	1	IV 区 III -4 層遺物出土状況（東から）
PL.18	1	II c 区南部完掘全景（南から）		2	IV 区 SK03・SK04 完掘状況（東から）
	2	II c 区南部南壁断面（北から）		3	IV 区 SK03・SK04 断面（東から）
	3	II c 区南部西壁断面（北東から）		4	IV 区 SR01 完掘状況（東から）
PL.19	1	II c 区南部 SD04・SD07・SD08 完掘状況（西から）	PL.30	1	城下町形成期の出土遺物
	2	II c 区南部 SD02 完掘状況（西から）		2	近世城下町の出土遺物
PL.20	1	II c 区南部 SD04A・SD04B・SD07 断面（西から）	PL.31		I 区出土遺物（1）
	2	II c 区南部 SD02 断面（西から）	PL.32		I 区出土遺物（2）
	3	II c 区南部 SE02 完掘状況（北から）	PL.33		I 区出土遺物（3）
PL.21	1	II c 区南部 SE02 上層断面（南から）	PL.34	1	II a 区出土遺物
	2	II c 区南部 SE02 下層断面（北から）		2	II b 区出土遺物
	3	II c 区南部 SE02 底面遺物出土状況（北から）	PL.35		II c 区北部出土遺物（1）
	4	II c 区南部 SP157 遺物出土状況（東から）	PL.36	1	II c 区北部出土遺物（2）
	5	II c 区南部 SP157 遺物出土状況（北東から）		2	II c 区南部出土遺物（1）
PL.22	1	II c 区南部 SP137 遺物出土状況（南から）	PL.37		II c 区南部出土遺物（2）
	2	II c 区南部 SP136 遺物出土状況（南から）	PL.38		II c 区南部出土遺物（3）・II d 区出土遺物
	3	II c 区南部 SP153 根石出土状況（北西から）	PL.39		II e 区出土遺物
	4	II c 区南部 SP180 根石出土状況（東から）	PL.40	1	III 区出土遺物
	5	II c 区南部 SP158 根石出土状況（北から）		2	IV 区出土遺物（1）
	6	II c 区南部 SP159 断面（東から）	PL.41		IV 区出土遺物（2）
	7	II c 区南部 SP188 断面（南から）			
	8	II c 区南部 SP181 断面（南から）			
PL.23	1	II d 区完掘全景（東から）			
	2	II d 区南壁断面（北西から）			
PL.24	1	II d 区 SX02 断面（南から）			
	2	II d 区 SX02 完掘状況（北から）			
PL.25	1	II d 区 SX03 断面（西から）			
	2	II d 区 SP98 断面（北から）			

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

浜松城下町遺跡は、浜松城の城下町及び東海道の宿場町の範囲を含む中近世の遺跡である。近年、当遺跡内における近世東海道の道筋である国道 257 号とその周辺道路について、交通集中に関わる課題が懸案となってきた。そうした中、この課題解決に向けて道路拡幅を主とした道路改良工事が計画された。そのため工事を主管する浜松市（土木部南土木整備事務所）と浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が協議を行い、まずは道路拡幅部分について遺構・遺物の残存状況を把握するための確認調査を行うことになった。

確認調査は平成 28（2016）年 8 月～9 月と、平成 29（2017）年 4 月・12 月に実施した。調査対象地の多くは近現代の掘削が深く及んでいたが、近世以前の遺構・遺物を確認できた部分において記録保存を目的とした本発掘調査を行うこととなった。

本発掘調査は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課）が調査主体となり、現地における実務は株式会社アコードに委託した。現地調査の期間は、令和元（2019）年 7 月 2 日～11 月 7 日である。調査区は 9 区に分かれており、調査面積合計は 380.7 m²である。

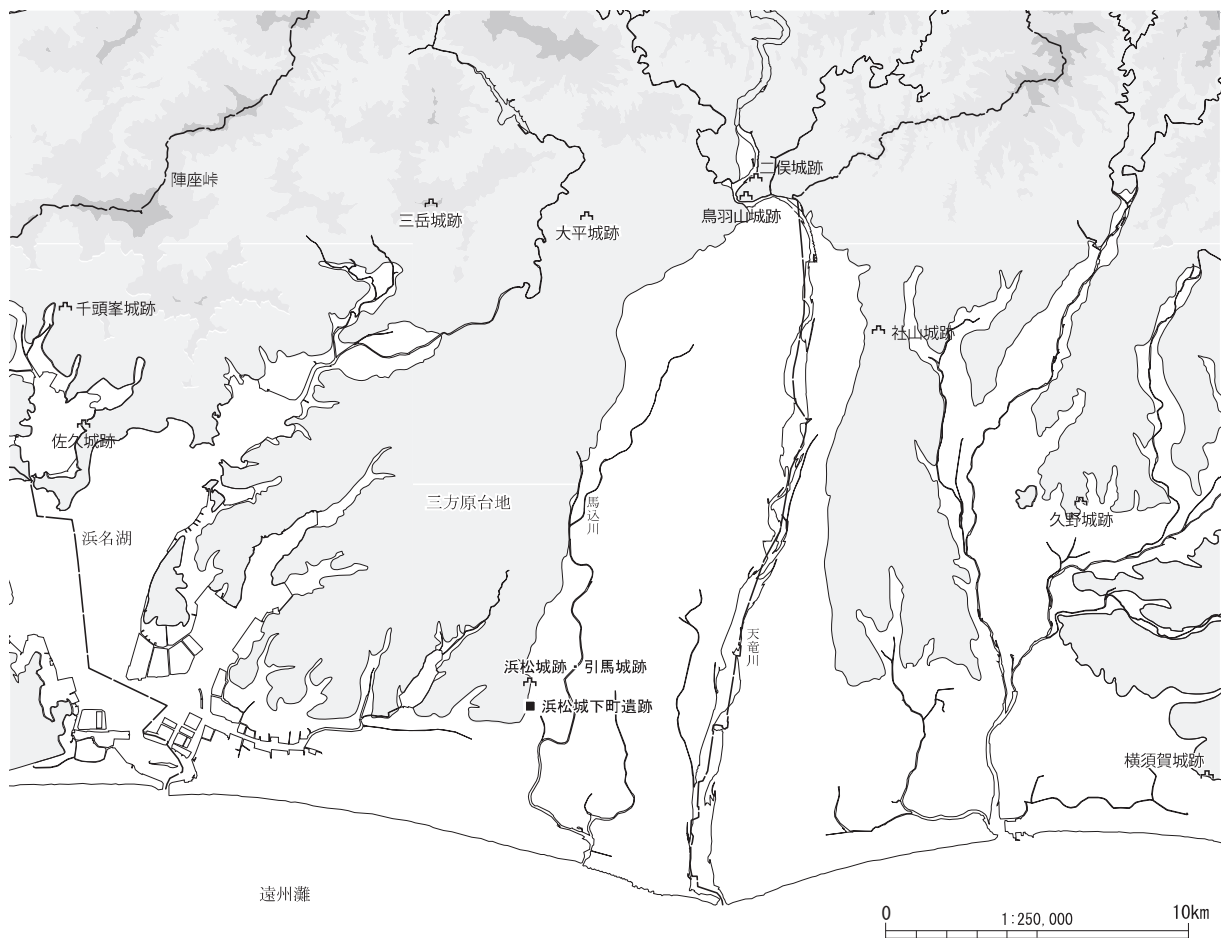


Fig.1 浜松城下町遺跡の位置

2 遺跡周辺の環境

(1) 地理的環境

浜松城下町遺跡は、浜松城跡を中心とした三方原台地東縁部の丘陵から平野にかけて広く展開しており、遺跡の範囲は東西 1.8 km、南北 1.5 km に及ぶ。市の中心部に位置することから、市街地化の進行によって遺跡の残存状況は良好とはいえない。城下町の景観もほとんど失われているが、地形や道筋、水路、地割等には近世城下町の絵図から変わらない部分も残されており、往時の様子を垣間見ることができる。

(2) 歴史的環境

原始・古代 浜松城跡及び浜松城下町遺跡周辺において、原始・古代の集落は確認できていないが、これまでの発掘調査で古墳時代後期～奈良時代の遺物が少量ながら出土していることから、小規模な集落が展開していた蓋然性は高い。また、当遺跡周辺の三方原台地縁辺部には、かつて後期古墳や横穴墓が展開していたことが知られており、浜松城内古墳（所在地不明）からは、馬具等が出土したとされる（静岡県 1930）ほか、作左山横穴では、須恵器・鉄器が出土している（向坂 1976）。

中世 鎌倉時代には、浜松城下町の原形ともいえる引馬宿が形成された。建治 3（1277）年の『十六夜日記』には「こよいはひくまのしゅくといふところにとゞまる、このところおほかたの名は、はま松とぞいひし」とある。また、万里集九は文明 17（1485）年に『梅花無尽蔵』で、「引馬、市富、屋千区」と繁栄していた様子を記している。引馬宿の具体的な位置は明らかではないが、江戸時代中期の『曳馬拾遺』には、野口村、八幡村、早馬、元黙など「元はま松」という所はかつて引馬の駅といった、とあり、当遺跡の北東部、現在の野口町や八幡町周辺に推定されている。これらの地域には、近世城下町の区画と異なる地割がみられる（太田 1996）。当遺跡での発掘調査においても、少量ながらも広範に山茶碗や陶器が出土しており、人々の暮らしが営まれていたことがわかる。

浜松城の前身である引馬城跡は、引馬宿推定地西側の小丘陵に立地する。16 世紀前葉成立の『宗長手記』によれば、吉良氏被官の巨見新左衛門尉によって築かれ、15 世紀代には整備されたと考えられる。永正 14（1517）年には、大河内氏から今川氏親が引馬城を奪い、飯尾氏を城主に任じた。引馬城周辺には「椿屋敷」「蛇屋敷」などの地名がみられ、家臣の屋敷地の存在が想定される。

なお、引馬城跡における表面採集や発掘調査で出土したかわらけ等の遺物も、15 世紀後半～16 世紀代に位置付けられ（和田 2016）、文献資料の年代を裏付けているが、引馬城跡以外の浜松城域においても同時期の遺構・遺物は確認されており、徳川家康による城域拡充の以前から、浜松城域も引馬城の一部として使われていた可能性が想定される（井口ほか 2016）。

元亀元（1570）年には、徳川家康が引馬城に入城して浜松城と改称したとされる。『家忠日記』には、天正年間に幾度も浜松城の普請を行ったことが記されており、武田方との攻防に備えて城の拡充を図った様子がうかがえる。また、天正年間には、城周辺の寺社が移転している記録が多く残されており、城下の再編が行われたことも想定される。

天正 18（1590）年には、豊臣方の堀尾吉晴が浜松城へ入城する。この段階で、高石垣や瓦葺建物等の整備が行われたとされ（加藤 1994）、城の姿は大きく変貌し、現在見られる浜松城の姿に近づいた。

近世 慶長 5（1600）年、堀尾吉晴が出雲へと移り、浜松城は徳川方の譜代大名が治めるようになると再び城の姿は大きく変貌する。それまでの東正面から南正面の城となり、二の丸、三の丸の

整備も進められた。城下町も、東海道の移設に伴い大きく改変された（太田 1996）。17 世紀前半以降の城下町の様相は、絵図等の史料からうかがい知ることができる。『遠江浜松城下絵図』からは、今回の調査対象地付近は、城下町の東海道筋の町人地にあたり、番所や本陣があったことがわかる。

近現代 明治 6（1873）年の廃城令によって、浜松城の建造物は解体され、土地は払い下げられた。城下町の景観は維持されたが、太平洋戦争時の空襲によりその多くが焼失した。戦後、街区の一部は残されているものの、大規模開発や区画整理等によって、往時の景観はほとんど失われている。

3 浜松城下町遺跡の調査履歴

調査の端緒 従来、浜松城下町遺跡は、「浜松宿」「旧引間宿推定地」という 2 つの遺跡として登録されており、いずれも市街地化により遺跡はほとんど残っていないと考えられてきた。そうした中で 2013 年以降、水道工事等への立会調査を行う中で、僅かながら遺物を包含する層が確認されるようになり、2015 年の 1 次調査へとつながった。その後 2016 年には 2 つの遺跡を統合・改称し、これまで範囲外だった部分も含めた「浜松城下町遺跡」として取り扱うこととなった。

1・2 次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（1 次・2015 年）と本発掘調査（2 次・2015 年）である。戦国時代～江戸時代の遺構・遺物が確認されており、周辺に展開している「蛇屋敷」「椿屋敷」など武家の屋敷地に関わる可能性が指摘されている（井口 2018）。

3・5 次調査 国道 257 号拡幅工事に伴う確認調査（3 次・2015 年）と本発掘調査（5 次・2016 年）である。城下町の南端部における調査で、近世城下町に伴う遺構・遺物とともに 16 世紀後半の遺構・遺物も認められ、城下町の形成期を示す可能性があるものとして重要である。また、奈良時代・鎌倉時代の遺物も一定量確認されていることも注目される（和田ほか 2017）。

4 次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（2016 年）である。鎌倉時代と江戸時代の遺物が少量出土したが、湿地状の土層堆積であり、遺構は確認されなかった。

6 次調査 集合住宅建設に先立つ確認調査（2016 年）である。近現代の掘削が地下 2 m 以上に及んでおり、遺構・遺物は確認されなかった。

7・8・11 次調査 国道 257 号線拡幅工事に伴う確認調査（7 次・2016 年、8 次・2017 年）と本発掘調査（11 次・2019 年＝今回報告）である。いずれも詳細は次章にて報告する。

9 次調査 下水道工事に先立つ確認調査（2018 年）である。遺跡範囲の北東端に位置しており、遺構・遺物は確認されなかった。

10 次調査 県道 68 号線（植松和地線）拡幅工事に伴う確認調査（2019 年）である。一部で鎌倉時代と戦国時代を主体とする遺構・遺物を確認しており、今後本発掘調査を実施予定である。

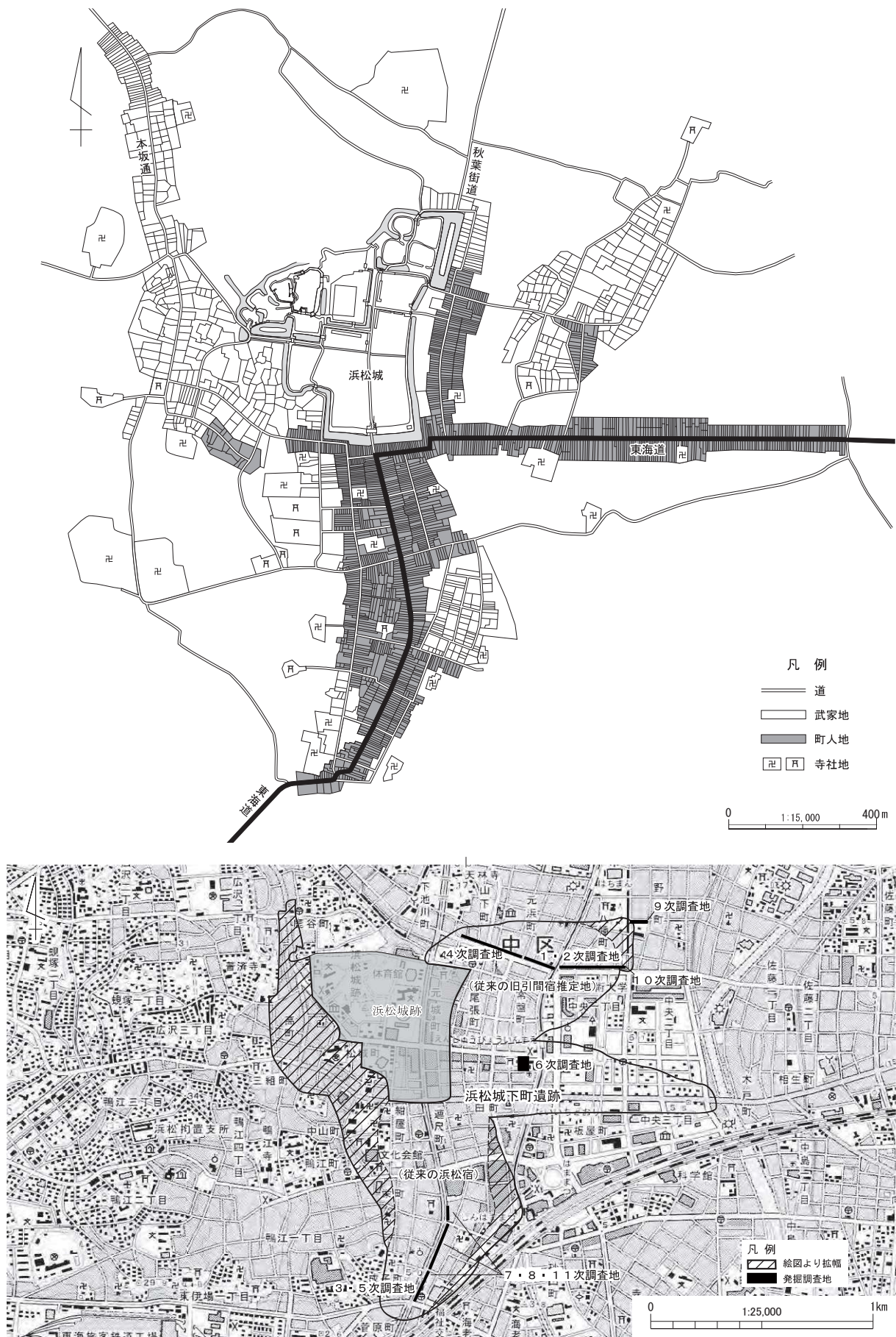


Fig.2 近世城下町の構造と浜松城下町遺跡の調査履歴

4 調査の方法と経過

調査はまず表土及び盛土、攪乱層などをバックホウを用いて取り除き、その後は人力で掘り下げて基盤層上で遺構検出を行った。調査区の設定に関しては、既設の水道管やガス管などが調査範囲内に走っており、事前にその位置を確認できたものについては、破損することのないようあらかじめ調査範囲から除外した。一方掘削中に新たにみつかった管については撤去可能かどうか確認をとった上で対応した。調査範囲が道路あるいは住宅に隣接するため、必要に応じて控えをとり安全確保に努めた。

遺構の調査は先述のとおり基盤層上で遺構検出を行い、遺構配置図を作成した。遺構の掘削は小穴（ピット）や土坑については、基本的に長軸に対し半截して断面写真や断面図をとった上で完掘作業をすすめた。完掘した遺構は完掘状況の写真撮影を行い、平面図を作成した。大型の土坑や不整形の遺構については十字ベルトを設定して調査を行ったものもある。溝については土層観察用のベルトを設定して掘削した。井戸など深さのある遺構については、可能な限り半截して断面写真撮影及び断面測量を行ったが、安全に掘削することが困難な深さに達したものについては、埋め戻しの際に人力やバックホウを用いて遺構周辺を掘削して安全を確保できた状態で調査を実施した。

遺物の取り上げは層ごとに行った。遺構から出土した遺物は、遺構名ならびに層名を記載して取り上げた。遺存状況の良好なものについては、出土状況写真撮影及び出土状況図を作成したのちに、取り上げ番号を付与して取り上げた。

図面の作成はトータルステーションと電子平板を用いたデジタル測量を基本とし、デジタルカメラと編集ソフトを用いた写真測量も併用した。

写真撮影は6×7判カメラ（リバーサルフィルム）と、35ミリカメラ（モノクロフィルム）、フルサイズデジタルカメラ（3635万画素）を使用した。リバーサルフィルムはスリーブ現像、モノクロフィルムはベタ焼現像を行った。デジタルデータはJPEGデータを作成した。フィルム写真はアルバムに収納し、写真台帳を作成した。

浜松城下町遺跡はこれまで10次にわたる発掘調査が行われており、周知のとおり広範囲にわたることが確認されている。今回の調査にあたっては、遺跡及び遺構の位置や遺物の出土地点を厳密に把握するために地区割り（グリッド）の設定を行った。これまでの調査においては採用されていなかったが、今後も継続的に調査されることを念頭に置き、活用されるよう配慮した。

遺跡の位置は平面直角座標の第Ⅷ系（世界測地系）を使用して表示した。Fig.4に示すとおり、遺跡全体を網羅できるよう1,000×1,000 mで区画される大グリッドを設定した。これにアラビア数字で1.2.3～6までの番号を付し、そのグリッドを10等分して南北方向に北からA.B.C～Jまで、東西方向は西からA.B.C～Jまでの記号を付し、中グリッドとした。さらにそれを20等分して100×100 mで区画されるグリッドを設定した。これを小グリッドとし、これにも南北が北から南へ1.2.3～20まで付した。東西方向は西から東へのa.b.c～tまで付した。これにより最小単位5×5 mのグリッドができあがる。

遺構の測量、遺物の取り上げはこのグリッド単位で行い、遺物の取り上げは北西角の調査杭を使用した。グリッド名の記載は「5HCp15」というように遺物カードおよび平面図に記載した。

調査は開始当初Ⅰ～Ⅳ区の4ヶ所で実施する予定であった。しかしながら先述のとおり既設の水道管やガス管などが調査範囲内に走っていることが判明し、Ⅱ区については6ヶ所に分割して調査することとなり、都合9地区に調査区が及んだことから、計画よりもやや遅延気味に進んだ。調査

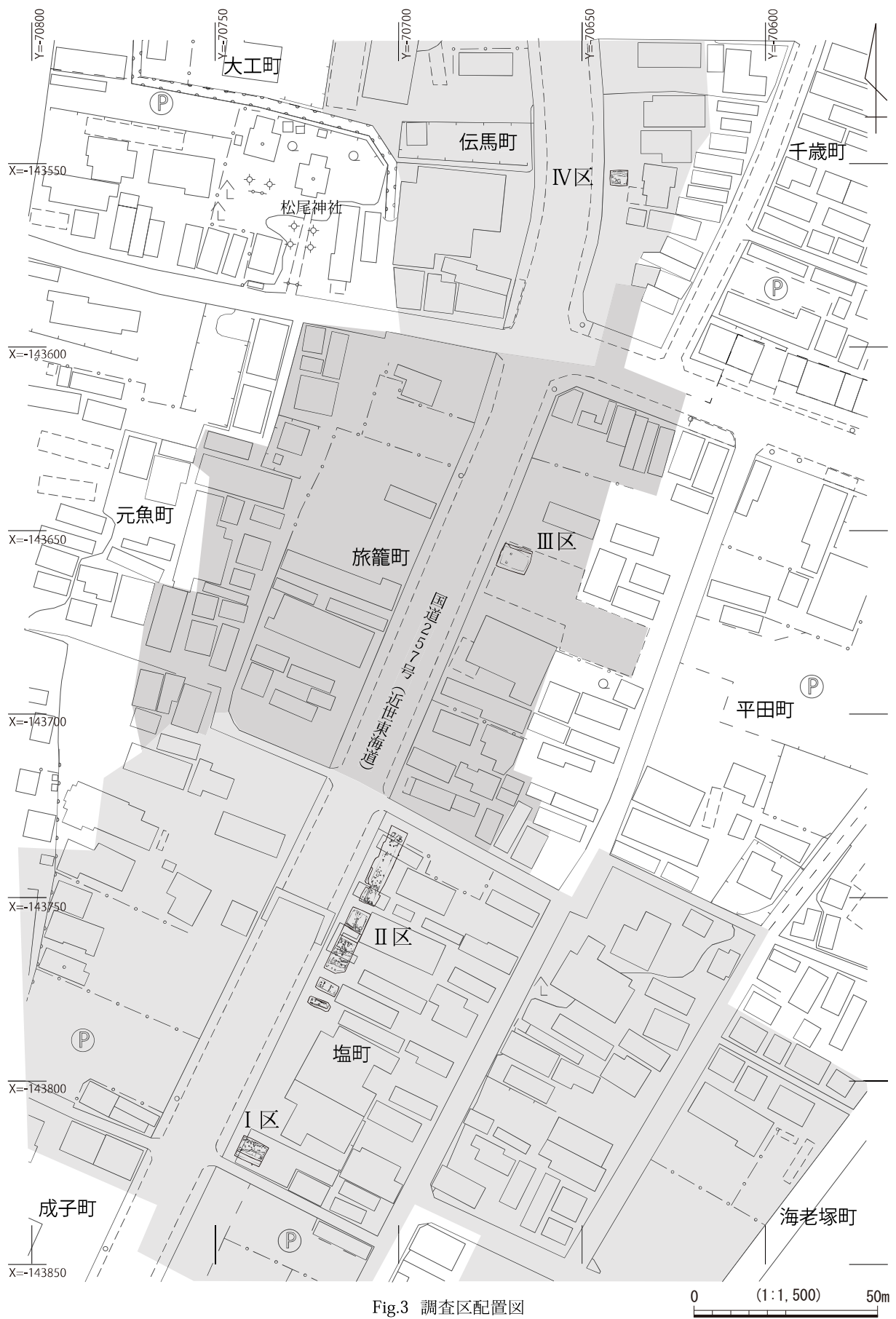


Fig.3 調査区配置図

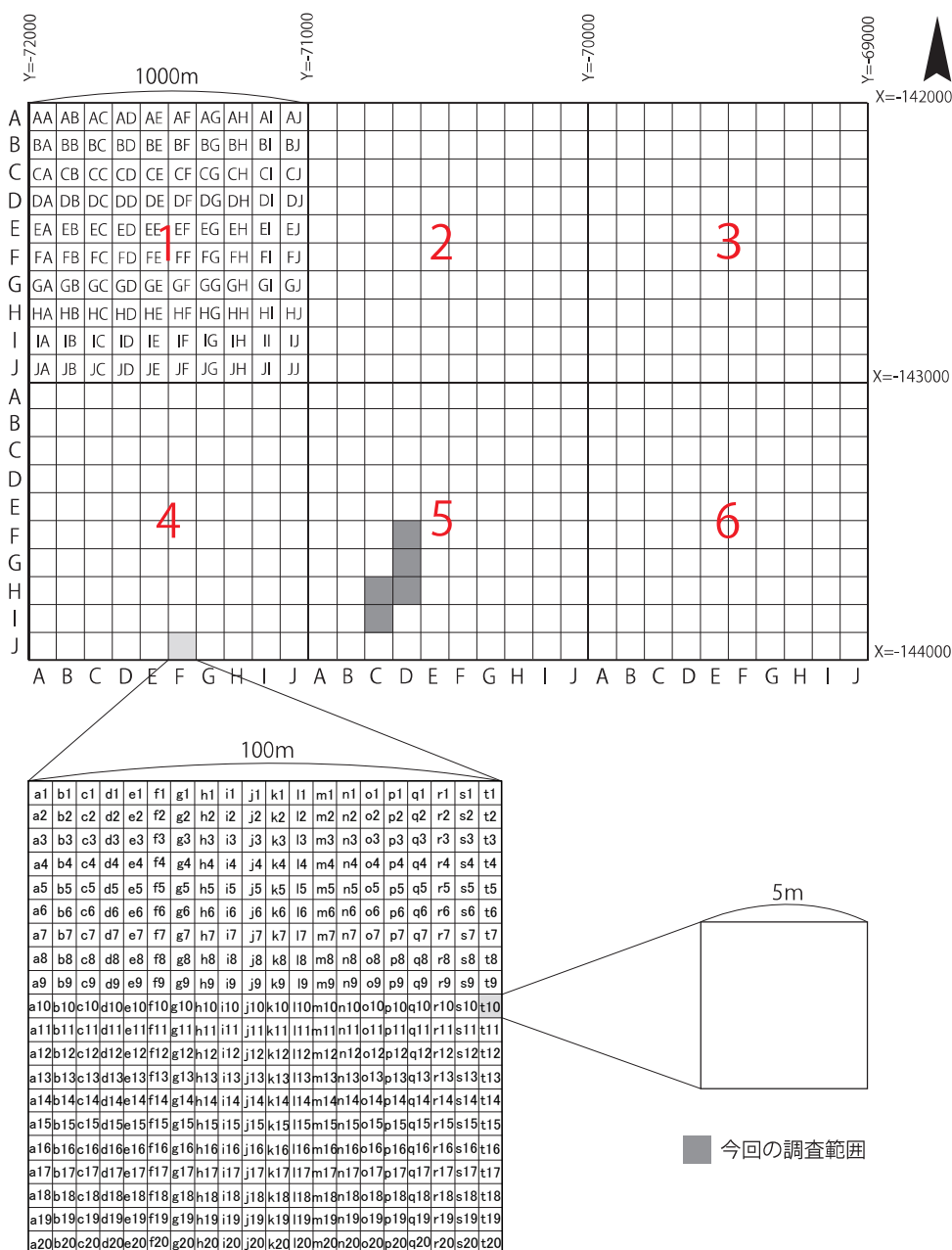


Fig.4 調査地区割模式図

の順序はⅢ区から着手し、引き続きⅡ区の調査を行った。Ⅱ区は北からa・b・c北部・c南部・d・eに分割したが、a→e→d→b→c北部→c南部という順に調査した。その後Ⅰ区、最後にⅣ区を調査した。調査は7月2日から着手し、最終的に11月7日にすべての調査が完了した。調査と並行して遺物洗浄を行い、それ以降の作業は現場事務所撤収後に行った。

整理作業は出土遺物の登録台帳作成から着手した。遺物注記は、登録台帳に基づいて登録ナンバーを注記マシンと面相筆を用いて行った。復元は残存状態の良い遺物を抽出して行い、素材は石膏を用いた。実測は手測りで行い、デジタル実測も併用した。実測図のトレースはデジタルトレースを行った。遺物写真撮影はデジタルカメラを使用してスタジオで撮影した。集合写真はデジタルカメラに加え、6×7判フィルムカメラによる撮影も行った。遺構・遺物図面の編集はデジタル編集を行い、報告書作成もデジタル編集で行った。その後報告書の執筆作業を行い、令和2年3月10日に報告書を刊行するに至った。3月16日に成果品の納品及び検査を行い本業務を完了させた。



Fig.5 現地作業風景



Fig.6 整理作業風景

第2章 調査成果

1 確認調査の成果

(1) 確認調査の概要

浜松城下町遺跡 11 次調査に先立つ確認調査は、平成 28 年から平成 29 年にかけて、調査対象地の環境が整った地点から着手し、断続的に 4 度に分けて実施した。7 次調査は、平成 28 年 8 月 29 日から 9 月 1 日にかけてと、平成 29 年 2 月 8 日に実施した確認調査である。8 次調査は、平成 29 年 4 月 10 日と 12 月 13 日に実施した確認調査である。調査溝の番号は 7 次調査の調査溝は北から南へと連番を付し（調査溝 1 ～ 25）、8 次調査の調査溝は 7 次調査からの連番とし、北から南へと付した（調査溝 26 ～ 29）。7 次調査の対象面積は約 1,800 m²あり、このうち調査面積は約 68 m²、8 次調査の対象面積は約 410 m²あり、このうち調査面積は約 16 m²である。

(2) 基本層序と遺構検出面

基本層序の概要 確認調査では、29 箇所の調査溝を設定し調査を行った結果、土層の堆積状況の傾向を明らかにすることができた。土層の堆積時期や特徴に基づき、大きく 5 つの層位に整理した。Ⅰ層：現地表面とⅡ層の間の土層および、現代の面から行われた攪乱、Ⅱ層：焼土層（昭和前期か）、Ⅲ層：近代の包含層、Ⅳ層：近世～古代の包含層、Ⅴ層：基盤層（黄褐色粘土）である。以下、確認調査により明らかになった各層の特徴と課題について整理する。

Ⅰ 層 Ⅰ層は、現地表面から近代の焼土層（戦災焼土層）上面の間で認識できる土層である。舗装や碎石敷きの地表面、Ⅱ層上面の三和土、整地土等である。なお、戦後から今回の調査前までに行われた建物の建築や解体工事の影響を受けていると判断できる締まりのない濁色層は攪乱と表記した。

Ⅱ 層 Ⅱ層は、太平洋戦争の空襲により形成された戦災焼土層である。焼土を主体としているが、炭化物や溶融したガラス、レンガ、生活雑貨類などを含む土層である。浜松城下町遺跡において広域に確認でき、層序から時期の推定を行う上で定点になる特徴的な土層といえる。Ⅱ層の検出高は、対象地の北側が標高約 6.0 m、南側では標高約 4.5 m である。Ⅱ層形成時には現在の地形と同様に北側が高く、南側が低い状況であったと捉えられる。

Ⅲ 層 Ⅲ層は、近世から近代にかけて堆積・造成された土層である。単一土層もしくは 2 層に細分することができる部分が主体だが、調査溝 6 などのように、3・4 層に細分できる部分もある。褐色系の粘質土や粘土が主体だが、黄色砂礫や灰色系粘土もみられる。Ⅲ層中における近世の遺物出土量が多いことから、Ⅲ層のいずれかの段階で近世の生活面が存在する可能性がある。

Ⅳ 層 Ⅳ層は、古代から近世にかけて形成された土層である。褐色系の粘土や粘質土を主体とするが、Ⅳ層の中・上位において灰黄色粗砂（調査溝 26：Ⅳ-7 層）のように整地層と捉えられる土層が認識できる地点もあった。地点によってはⅣ層中において生活面を認識できる可能性があり、注意を払う必要がある。

Ⅴ 層 Ⅴ層は、基盤層である。上位基盤層は黄褐色粘土、下位基盤層は黄色礫土である。下位基盤層のうち、埋没河川の底部では、灰色に変色している。下位基盤層は、標高 3.8 m 以下の部分でみられる。基盤層の上面では、古代から近世にかけての時期と捉えられる遺構が検出できる。

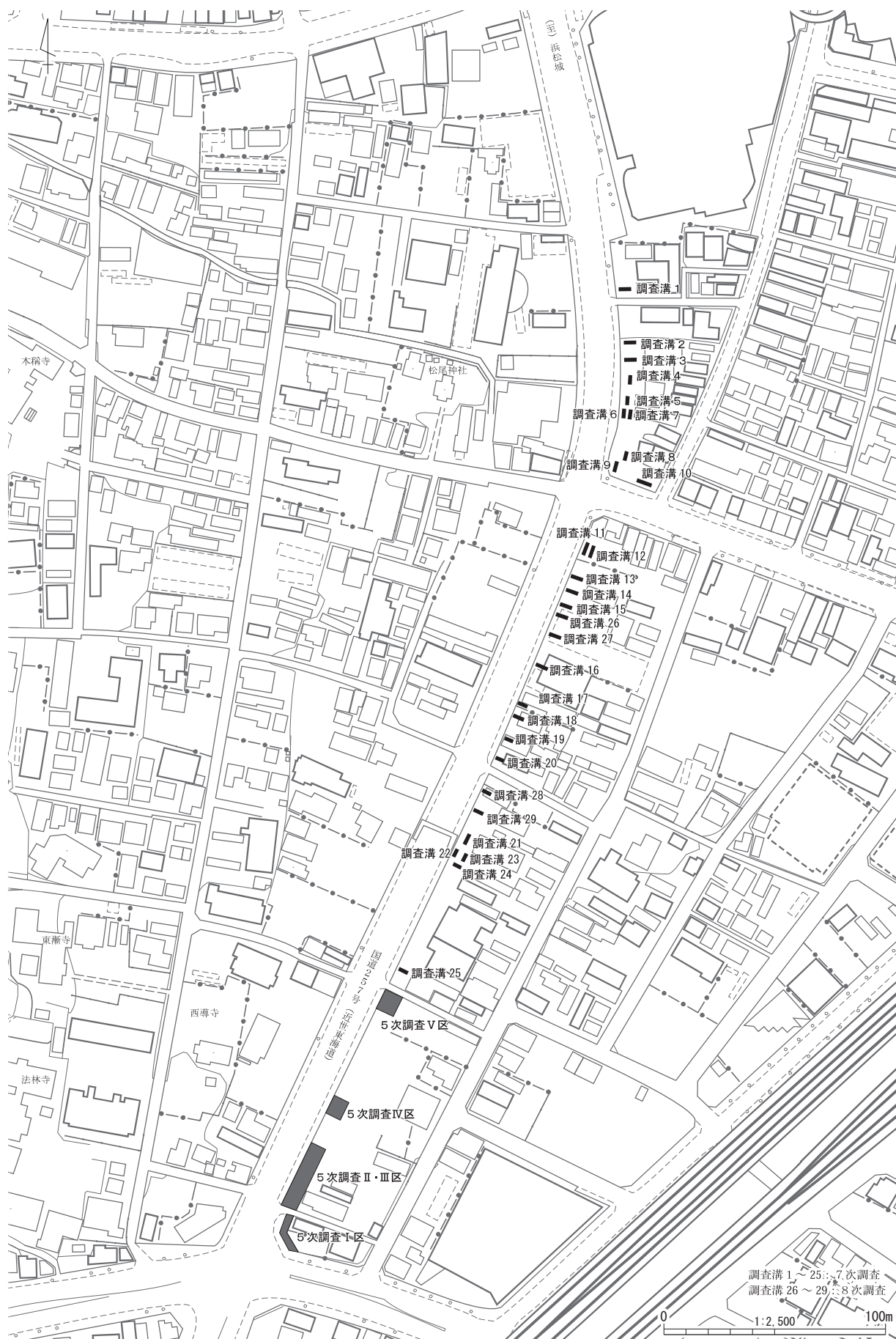


Fig.7 確認調査の調査区配置

(3) 検出遺構と出土遺物

調査溝毎に調査成果を記載する。ただし、調査溝が近接し、調査成果が類似するものについてはまとめて記載した。検出した遺構は、井戸や小穴、土坑、溝と捉えられるものである。遺構の調査は原則、平面検出に留めた。出土遺物は、城下町に関わる中世後半から近世にかけての時期の土師質土器や陶磁器が主体であるが、古代や中世前半の須恵器や土師器、山茶碗も一定量認められた。出土遺物の取り上げは出土層位を把握しながら行った。Ⅲ層やⅣ層、攪乱土中から出土したものが多。図化は、出土層位が明らかなものを中心に行ったが、調査地点の特徴を示す遺物については攪乱中や表面採集の資料も図化した。なお、掲載遺物が出土した調査溝や層位、時期、寸法、産地等の詳細は、観察表に示した (Tab.1・2)。7次調査の出土遺物のうち陶磁器類について、藤澤良祐氏 (愛知学院大学) や堀内秀樹氏 (東京大学埋蔵文化財調査室) にご教示をいただいた。

調査溝 1 調査溝 1 は、対象地の最も北側に設定した調査溝である。碎石の下層は、攪乱が現地地表下 2 m 以上におよび、基盤層が確認できなかった。また、出土遺物はみられなかった。

調査溝 2・3 調査溝 2・3 において、遺構は確認できなかった。調査溝 2・3 とともにⅠ層直下においてⅢ層が確認でき、少なくともⅡ層以上の土層は現代に削平されたと捉えられる。出土遺物は、調査溝 2 のⅢ層から、17 世紀前半のものと捉えられる陶器が出土した。また、調査溝 3 のⅢ層中から 17 世紀前半の天目茶碗 (4)、Ⅳ層中から 16 世紀後葉の志戸呂産の播鉢 (5) が出土した。

調査溝 4 調査溝 4 では、Ⅰ層の直下でⅢ層を確認でき、調査溝 2・3 と同様に、少なくともⅡ層以上の土層が現代に削平されたと捉えられる。基盤層上面では、小穴もしくは土坑とみられる 2 つの遺構を検出した。基盤層の上面には、近世の陶器や内耳鍋を含むⅣ層の堆積が確認できた。基盤層上面で検出した遺構は近世以前のものと捉えられる。なお、出土遺物はいずれも小片であったため図化できなかった。

調査溝 5・6 調査溝 5・6 は対象地において最も北側でⅡ層を検出した調査溝である。Ⅰ層からⅤ層まで安定した堆積が確認できたが、遺構は認められなかった。いっぽうで、遺物が比較的豊富に出土した。調査溝 5 のⅢ層中からは、ロクロかわらけ (6) や、18 世紀後半から 19 世紀前半の陶器 (7・8)、17 世紀前半の播鉢 (9) が出土した。調査溝 6 のⅣ層中から山茶碗や中世陶器の片口鉢、16 世紀前半の皿類が出土した。また、Ⅲ層中からは、18 世紀後半から 19 世紀前半の陶器や肥前磁器が出土した。

調査溝 7 調査溝 7 は、Ⅲ層上面まで攪乱がみられた。また、遺構は確認できず、遺物も出土しなかった。

調査溝 8～10 調査溝 8 から調査溝 10 では、Ⅱ層より下層の土層堆積状況が周辺の調査溝の土層堆積状況と大きく異なっていた。灰黄色砂 (d 層) や灰色砂と灰色粘土の互層 (f 層) が基盤層直上にみられることや、基盤層の検出標高が周辺の調査溝に比べ低いことから埋没河川の可能性が高い。近世の浜松城下を記録した絵図を参照すると松尾神社の南側から東西に河川が描かれており、調査溝 8～10 で検出した埋没河川が絵図に記された河川にあたると捉えられる。川底部の堆積と捉えられる調査溝 9 の d 層中からは、8 世紀の土師器 (19) や須恵器 (20) 等が出土した。いっぽう、かつての河川の埋め立てに用いられた土砂と捉えられる b 層やⅡ層からは 18 世紀後半から 19 世紀の遺物が数多く出土した。近代の造成に伴い、出土地点に混入したと捉えられる。近代に、浜松市街地に展開した堀や河川の埋め立てが進められて市街地が整備されたことを示す事例として注目できる。

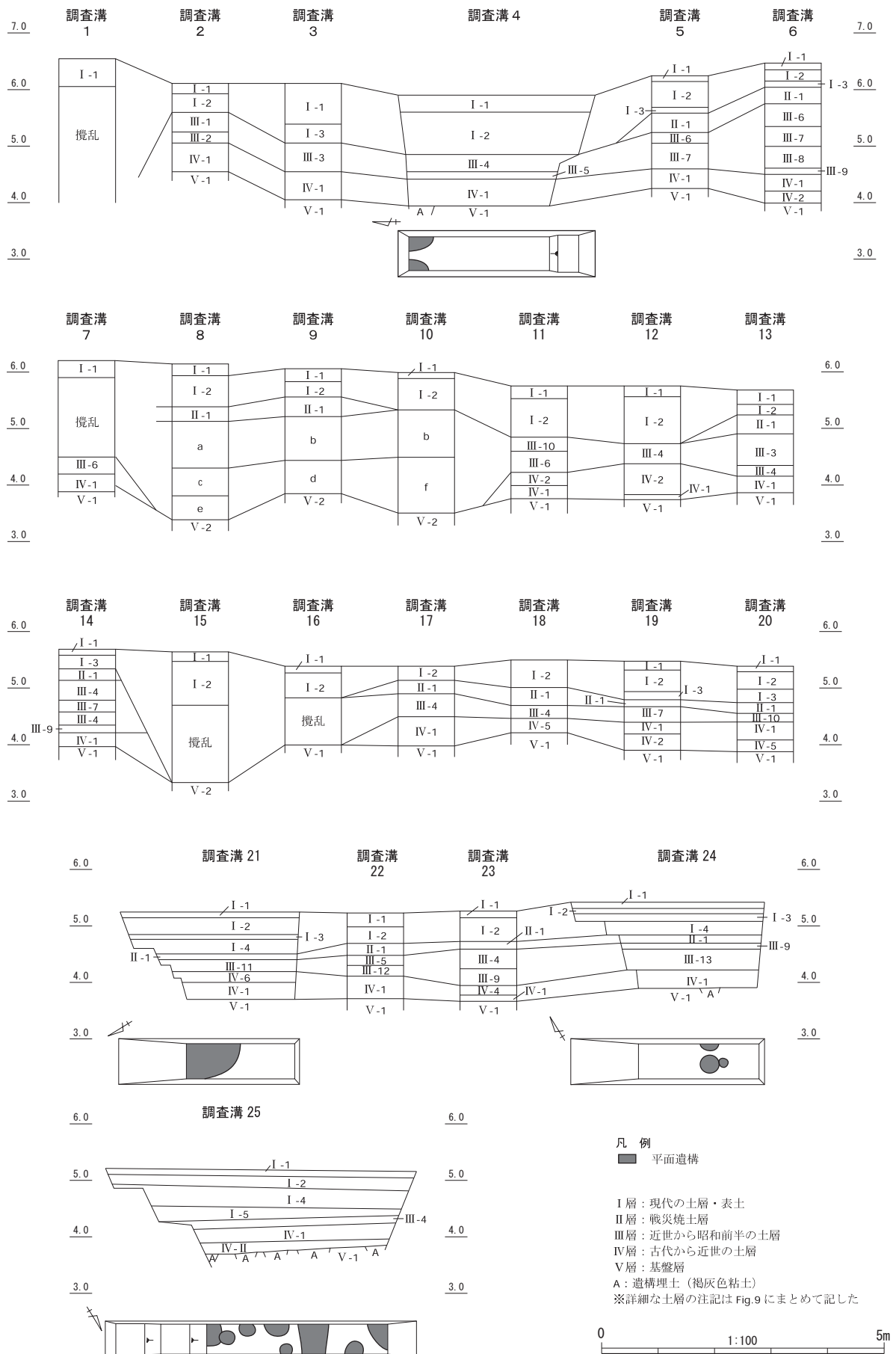


Fig.8 7次調査詳細

調査溝 11～14 調査溝 11～14 では遺構を検出できなかったが、いずれの調査溝のⅢ・Ⅳ層中からも近世前半を中心とした時期の遺物が出土した。調査溝 11・12 では掘削時に土層の色調の変化が認識しがたく、Ⅲ・Ⅳ層から出土した遺物をまとめて取り上げた。調査溝 14 のⅢ層中からは、陶器類が出土した。調査溝 11～14 において出土した遺物はいずれも 16 世紀後葉から 18 世紀を中心とした時期の遺物である。

調査溝 15・16 調査溝 15・16 では、基盤層の直上まで攪乱が及んでいる。調査溝 15 の攪乱土中からは、16 世紀後葉から 17 世紀前葉の景德鎮産の皿・碗や、17 世紀後半の瀬戸美濃産の水盤等が出土した。攪乱土中ではあるが貿易陶磁器や水盤といった他の調査地点では稀な遺物がまとまって出土した点が特筆できる。基盤層の検出遺構が周辺の調査溝に比べて低く、遺構を検出できなかったことから、後世の攪乱により遺構が消滅した可能性がある。

調査溝 17 調査溝 17 では、遺構は確認できなかった。Ⅲ・Ⅳ層中からロクロかわらけ (50) や内耳鍋 (51)、砥石 (53) が出土した。地表面では山茶碗 (49) や馬の目皿を採集 (52) した。

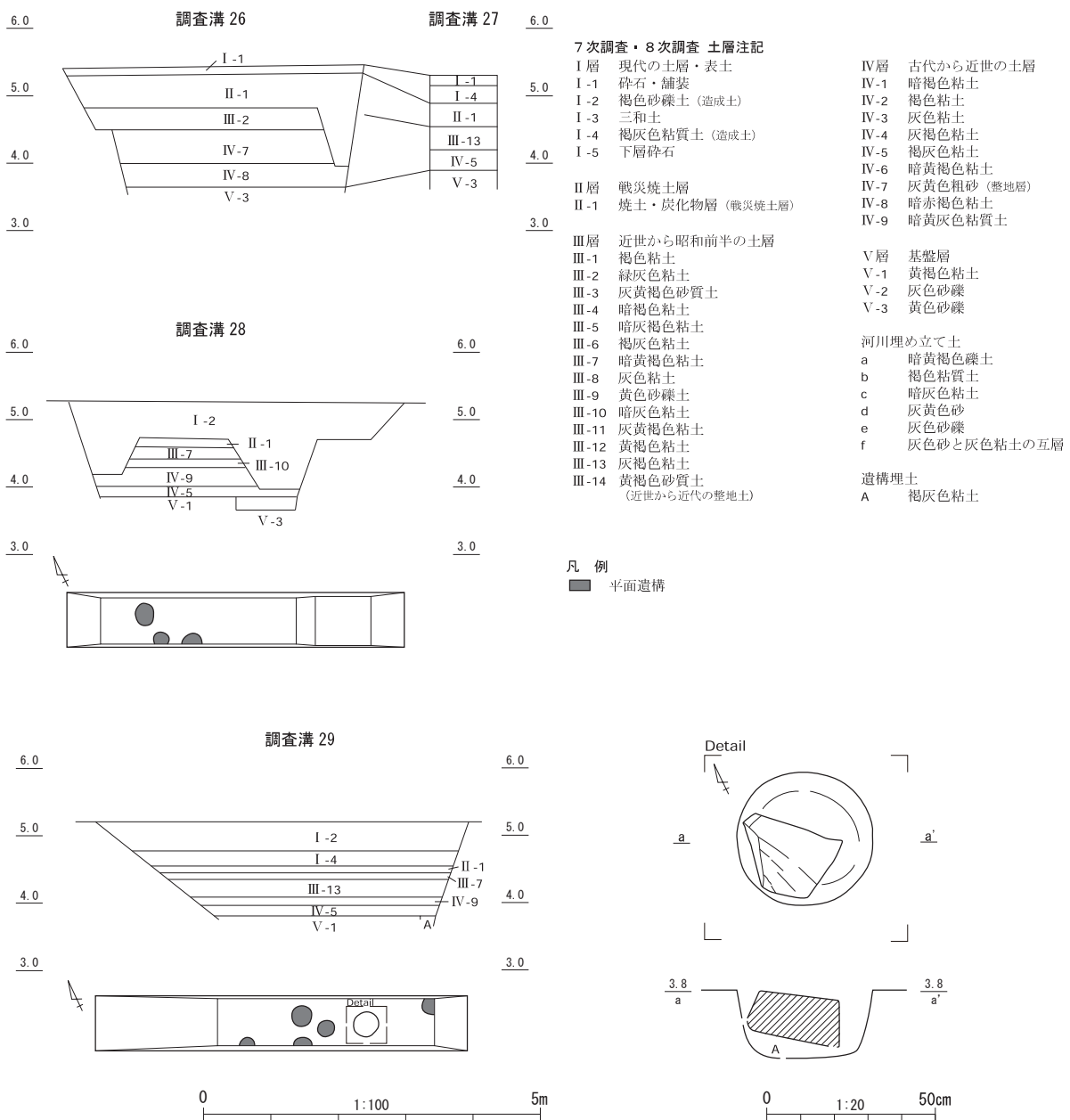


Fig.9 8次調査詳細

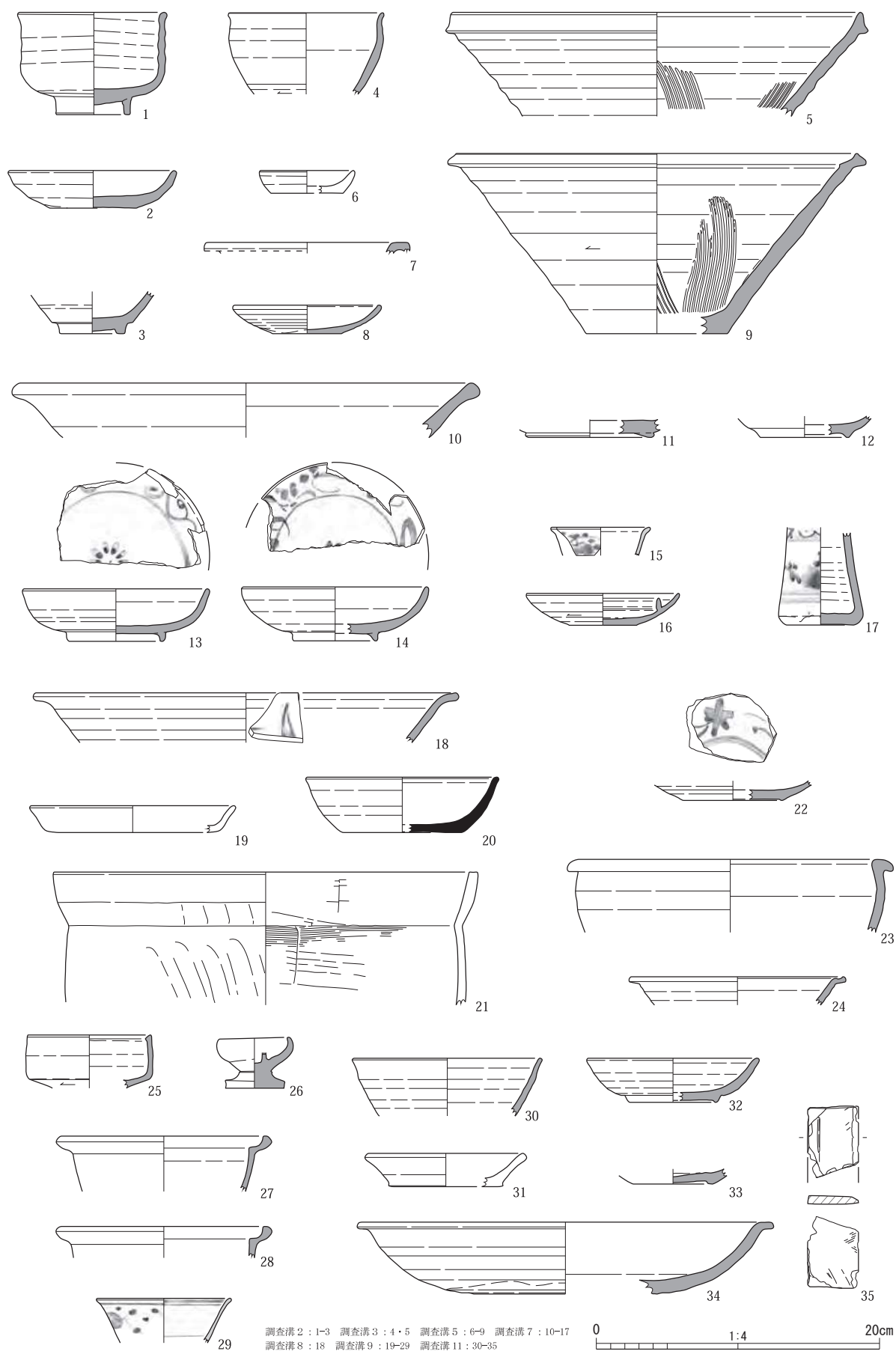


Fig.10 7次調査出土遺物 (1)

調査溝 18～20 調査溝 18～20 では、遺構を検出できなかった。出土遺物は、調査溝 19 で内禿皿（54）、調査溝 20 で美濃産の灯明油皿（55）が出土した。

調査溝 21～24 調査溝 20～23 では、遺構や遺物が確認できた。調査溝 21 では基盤層に直径 2 m ほどに復元できる大型遺構（井戸か）を検出した。調査溝 24 では小穴が 2 基確認できた。これらの遺構は基盤層直上での検出であり、近世以前のもつと捉えられる。調査溝 21 を中心として、天目茶碗をはじめとした戦国時代から近世にかけての時期のものと捉えられる陶器やかかわらが豊富に出土した。

調査溝 25 調査溝 25 は、5 次調査区の北端と道路を挟んで隣接する。基盤層上面において小穴や土坑、溝を検出した。また、近世の陶磁器がⅢ・Ⅳ層中から出土した。

調査溝 26 調査溝 26 では、遺構は検出できなかったが、16 世紀後半以降の遺物を豊富に含む

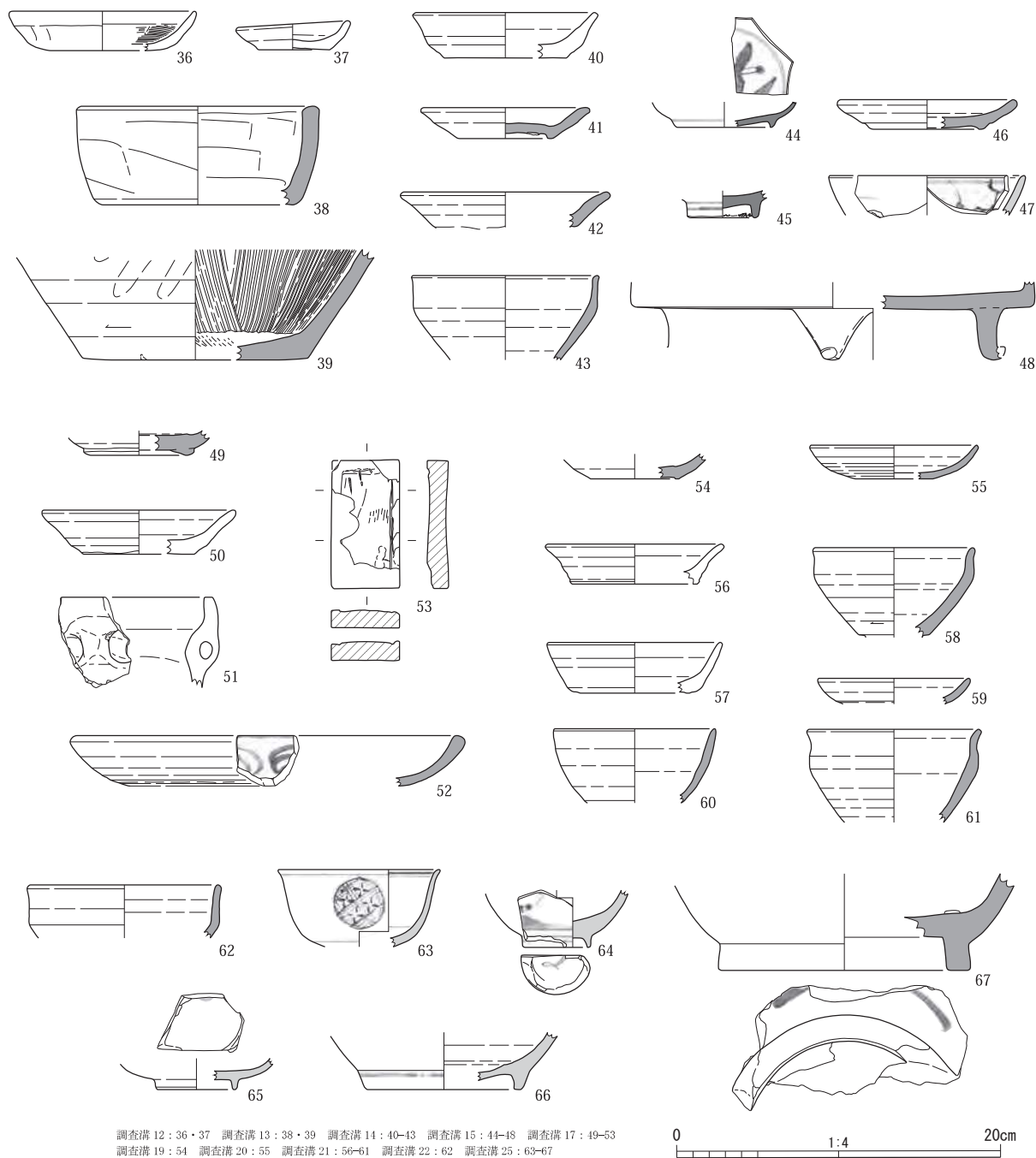


Fig.11 7 次調査出土遺物（2）

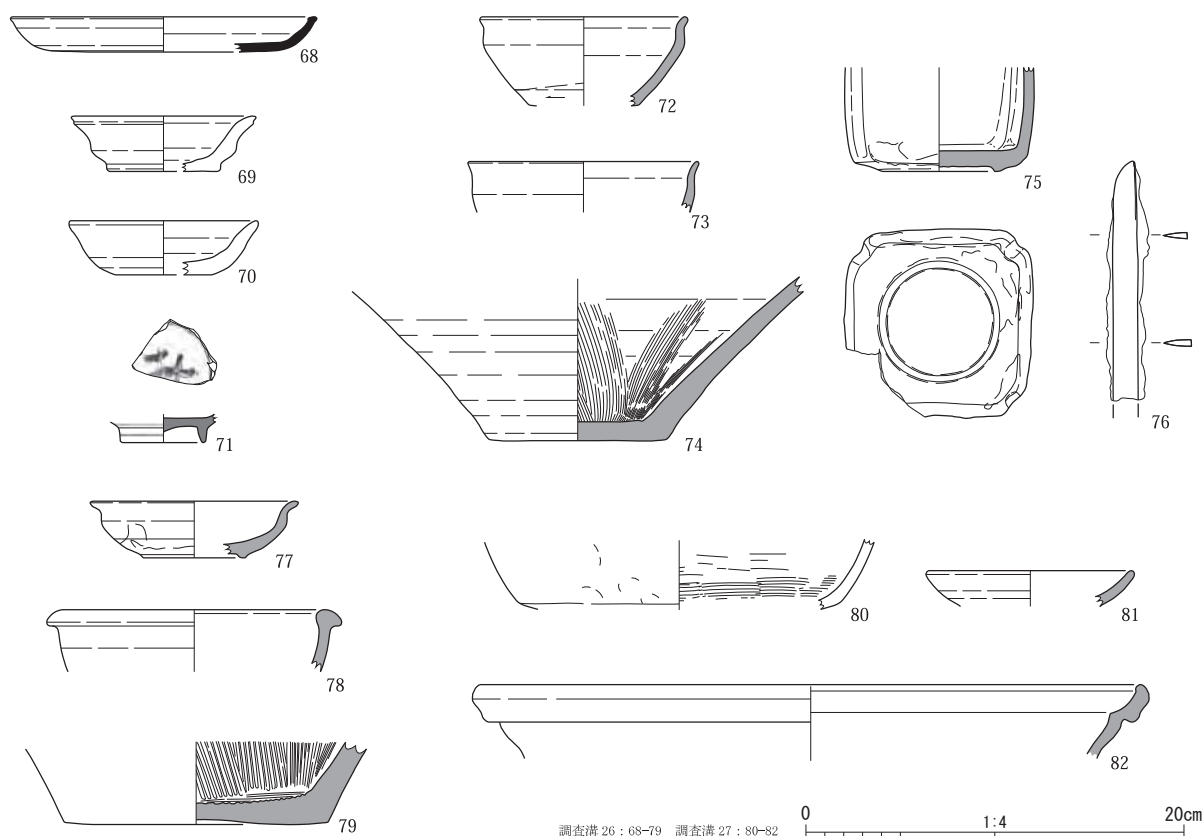


Fig.12 8次調査出土遺物

Ⅲ層の直下で灰黄色砂粗砂（Ⅳ-7層）を検出した。灰黄色粗砂の上面は硬化しており、近世の生活面である可能性が高い。また、Ⅳ-7層の下層には古代の須恵器を含む有機質の暗赤褐色粘土がみられ、さらに下層で基盤層（黄褐色砂礫）を検出した。以上のことからⅣ-7層は、土砂の搬入を伴う整地が行われたことを示す土層と捉えられる。整地が行われた時期は、Ⅲ・Ⅳ層の出土遺物から、16世紀後半以降と捉えられる。

調査溝 27 調査溝 27 では、遺構は検出できなかったが、Ⅲ・Ⅳ層から土師質土器の鍋（80）や初山産の皿（81）、瀬戸・美濃産の播鉢（82）が出土した。

調査溝 28・29 調査溝 28 で 3 基、調査溝 29 で 6 基の小穴を検出した。いずれの小穴も、基盤層（黄褐色粘土）の上面で検出し、埋土は褐灰色粘土であった。このうち 1 基の小穴を調査した。この小穴からは、上面が平坦な長軸 25cm 程度の珪質石が据え置かれた状態で出土した。礎石の可能性がある。検出した珪質岩は、出土状況を記録したのち、出土時の状態を保ったまま埋め戻した。出土遺物は調査溝 28 のⅣ-5 層中から内耳鍋の小片が出土したのみであった。小片のため図化できなかったが、中世の遺物と捉えられる。

（4）小 結

対象地には、古代・中世の遺跡と近世を中心にした城下町にかかわる遺構が残存している部分があることが明らかになった。城下町の形成時期は出土遺物から 16 世紀代に遡る可能性が追認できた。また、調査溝 26 のように近世を中心とした時期に造成を伴う大規模な生活面の更新が行われた可能性がうかがえる調査地点も見られた。浜松城下町の整備から現在の浜松市の中心市街地の形成にいたるまでの変遷過程を示す情報が埋もれていると捉えられる。

Tab.1 確認調査出土遺物観察表（1）

Fig.	番号	調査区	層位等	種別	細別	産地等	残存	反転・合成	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	断面色調	備考
15	1	2	Ⅲ層	陶器	腰折碗	瀬戸美濃	90		10.2	7.2	5.2	灰白	登窯1
15	2	2	Ⅲ層	陶器	志野皿	瀬戸美濃	60		11.6	2.6	6.1	にぶい橙	登窯1
15	3	2	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	30	反			4.6	淡黄	登窯2
15	4	3	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	10	反・合	10.7			灰白	登窯2
15	5	3	Ⅳ層	陶器	播鉢	志戸呂	10	反	28.6			橙	大窯4
15	6	5	Ⅲ層	土師質土器	かわらけ		50	反	6.6	1.6	5.1	浅黄橙	ロクロ成形
15	7	5	Ⅲ層	陶器	植木鉢	瀬戸	10	反	14.5			灰白	登窯8
15	8	5	Ⅲ層	陶器	灯明油皿	瀬戸美濃	60	反	10.2	20.0	4.8	浅黄橙	登窯9・10
15	9	5	Ⅲ層	陶器	播鉢	瀬戸	20	反	28.2	12.7	10.0	灰白	登窯2
15	10	6	Ⅳ層	山茶碗	片口鉢	尾張	10	反	32.0			灰	尾張6
15	11	6	Ⅳ層	山茶碗	有台碗	湖西渥美	10	反			8.6	灰	
15	12	6	Ⅳ層	陶器	皿類	瀬戸美濃	10	反			6.1	にぶい黄橙	大窯1・2 丸皿・端反皿
15	13	6	Ⅲ層	陶器	染付皿	瀬戸美濃	30	反	13.0	3.7	6.6	灰白	登窯9
15	14	6	Ⅲ層	陶器	染付皿	瀬戸美濃	40	反	12.9	3.8	5.8	灰白	登窯9
15	15	6	Ⅲ層	陶器	小坏	肥前	10	反	6.8			灰白	18世紀後半
15	16	6	Ⅲ層	陶器	灯明受皿	瀬戸美濃	30	反	10.6	2.2	4.8	灰	登窯10
15	17	6	Ⅲ層	陶器	灰落とし	瀬戸	40				4.8	灰白	登窯9
15	18	8	a-e層	陶器	鉄絵皿	美濃	10	反	30.0			灰黄	登窯5・6
15	19	9	d層	土師器	皿		10	反	14.6	1.9	11.0	にぶい橙	内・外面赤彩
15	20	9	d層	須恵器	無台碗	湖西	50	反	13.4	3.9	8.0	灰	8世紀後葉
15	21	9	d層	土師質土器	内耳鍋		10	反	30.0			灰白	
15	22	9	b層	陶器	鉄絵皿	瀬戸美濃	10	反				浅黄橙	登窯1
15	23	9	b層	陶器	練鉢	瀬戸	10	反	22.8			灰白	登窯8
15	24	9	Ⅱ層	陶器	折縁皿	瀬戸美濃	10	反	15.0			灰白	大窯4前半
15	25	9	Ⅱ層	陶器	筒形香炉	美濃	20	反	8.6			灰白	登窯7
15	26	9	Ⅱ層	陶器	ひょうそく	瀬戸	90		5.0	3.6	4.2	浅黄橙	登窯9
15	27	9	Ⅱ層	陶器	鍋	伊賀/信楽	10	反	14.0			灰白	19世紀
15	28	9	Ⅱ層	陶器	鍋	伊賀/信楽	10	反	14.0			灰白	19世紀
15	29	9	Ⅱ層	磁器	端反碗	瀬戸	10	反	9.4			灰白	登窯10
15	30	11	Ⅳ層	陶器	丸碗	志戸呂	10	反	13.0			褐灰	17世紀
15	31	11	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	10.8	2.3	8.0	浅黄橙	
15	32	11	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	志野丸皿	瀬戸	40	反	12.2	3.1	6.2	灰白	登窯1
15	33	11	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	内壳皿	瀬戸	20	反			5.6	灰白	大窯3後半
15	34	11	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	大皿	志戸呂	20	反	29.4			にぶい赤褐	
15	35	11	Ⅲ・Ⅳ層	石製品	砥石		50		3.6		0.6	灰黄	17g
16	36	12	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.4	2.4	7.0	灰白	手づくね成形
16	37	12	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		90		6.8	1.6	4.4	浅黄橙	ロクロ成形
16	38	13	Ⅱ層	瓦質土器	火鉢		20	反	14.4	6.1	15.0	オリーブ黒	
16	39	13	Ⅲ-3層	陶器	播鉢	瀬戸	10	反			14.0	浅黄橙	登窯5～7
16	40	14	Ⅲ層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.0	2.8	7.6	灰白	ロクロ成形
16	41	14	Ⅲ層	陶器	内壳椀皿	瀬戸	30	反	10.0	1.9	6.0	淡黄	大窯3後半～4
16	42	14	Ⅲ層	陶器	端反皿	瀬戸	20	反	12.6			灰白	登窯3・4
16	43	14	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸	20	反	11.4			淡黄	登窯3・4
16	44	15	攪乱	磁器	皿	景德鎮	20	反			5.8	灰白	16世紀後葉
16	45	15	攪乱	磁器	碗	景德鎮	20				4.1	灰白	17世紀前葉
16	46	15	攪乱	陶器	志野丸皿	瀬戸	30	反	10.6	1.8	6.8	淡黄	登窯3・4
16	47	15	攪乱	磁器	皿	肥前	10	反	12.0			灰白	18世紀末～19世紀前葉
16	48	15	攪乱	陶器	水盤	瀬戸美濃	20	反			24.4	灰白	登窯3・4
16	49	17	表面採集	山茶碗	有台碗	湖西渥美	20	反			6.0	淡黄	
16	50	17	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	11.6	2.7	6.8	にぶい黄橙	ロクロ成形

Tab.2 確認調査出土遺物観察表（2）

Fig.	番号	調査溝	層位等	種別	細別	産地等	残存	反転・合成	口径・幅 (cm)	器高・長さ (cm)	底径・厚さ (cm)	断面 色調	備考
16	51	17	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	内耳鍋		20					淡黄	
16	52	17	表面採集	陶器	馬目皿	瀬戸美濃	10	反	23.4			にぶい黄橙	登窯10・11
16	53	17	Ⅲ・Ⅳ層	石製品	砥石		90		4.2	7.9	1.3	灰黄	75.6g
16	54	19	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	内禿皿	瀬戸美濃	20	反			5.6	淡黄	大窯3後半
16	55	20	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	灯明油皿	美濃	20	反	10.2	2.1	4.8	灰黄	登窯9・10
16	56	21	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	10.8	2.5	7.8	淡黄	ロクロ成形
16	57	21	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		10	反	10.6	3.1	6.8	にぶい橙	ロクロ成形
16	58	21	Ⅳ層	陶器	天目茶碗	瀬戸	30	反	10.4			灰黄	登窯3
16	59	21	Ⅳ層	陶器	丸皿/内禿皿	初山	10	反	9.2			灰	大窯3後半
16	60	21	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	天目茶碗	志戸呂	30	反	9.8			赤褐	16世紀末～17世紀前葉
16	61	21	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	天目茶碗	初山	30	反	9.8			灰	大窯3後半
16	62	22	Ⅳ層	陶器	天目茶碗	瀬戸美濃	10	反	11.6			淡黄	登窯2
16	63	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	端反碗	瀬戸	30	反	9.8			灰白	登窯11
16	64	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	碗	肥前	30	反			4.0	灰白	
16	65	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	皿	瀬戸	20	反			4.8	白	近代か
16	66	25	Ⅲ・Ⅳ層	磁器	碗	肥前	20	反			9.4	灰白	19世紀
16	67	25	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	手水鉢	瀬戸	20	反			15.2	淡黄	登窯10・11
17	68	26	Ⅳ層	須恵器	皿	湖西	10	反	16.0	1.9	11.9	黄灰	8世紀
17	69	26	Ⅳ層	土師質土器	かわらけ		20	反	9.4	2.9	6.0	浅黄橙	ロクロ成形
17	70	26	Ⅲ層	土師質土器	かわらけ		30	反	9.8	2.8	5.2	浅黄橙	ロクロ成形
17	71	26	Ⅲ層	磁器	碗	景德鎮	10	反			4.6	白	16世紀後葉
17	72	26	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	初山	30	反	10.6			褐灰	大窯3後半
17	73	26	Ⅲ層	陶器	天目茶碗	瀬戸	10	反	12.0			灰白	登窯1・2
17	74	26	Ⅲ層	陶器	播鉢	志戸呂	10	反			9.6	橙	16世紀後葉～17世紀前葉
17	75	26	Ⅲ層	陶器	向付	瀬戸	60	合	10.0	6.3		灰白	
17	76	26	Ⅲ層	鉄製品	刀子		70		1.2	12.6	0.3		
17	77	26	Ⅱ層	陶器	端反皿	初山	20	反	10.6	3.0	5.5	褐灰	大窯3後半～大窯4
17	78	26	Ⅱ層	陶器	練鉢	瀬戸美濃	20	反	13.8			灰白	登窯8・9
17	79	26	Ⅱ層	陶器	播鉢	不明	10	反			14.0	灰白	
17	80	27	Ⅲ・Ⅳ層	土師質土器	内耳鍋		10	反				浅黄橙	
17	81	27	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	皿類	初山	10	反	10.6			褐灰	大窯3後半、丸皿・内禿皿
17	82	27	Ⅲ・Ⅳ層	陶器	播鉢	瀬戸美濃	10	反	35.0			にぶい黄橙	登窯5・6

凡 例

- 「残存」 全体における残存している割合を%（10%きざみ）で示す
- 「反」 反転して図化したもの
- 「合」 合成して図化したもの
- 「色調」 『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠している
- 「備考」 瀬戸美濃産陶磁器の福年は、
藤澤 良祐2007「総論」『愛知県史 別編 窯業 2 中・近世 瀬戸系』に従った
なお、段階等の名称は以下のように略して表記した
大窯第○段階 → 大窯○
登窯第○小期 → 登窯○

2 基本層序と遺構検出面

(1) 基本層序

調査地は市街化が進んでおり旧地形をほとんど留めていない。調査地の西側に近世東海道を踏襲した国道 257 号が走っており、住宅が道路に面して密集する。近代以降に市街化が進み、造成が繰り返されてきた。このため近世以前の堆積については残存状況が悪く、これまでの調査でも層序の年代については判然としなかった。このようなことから層序の年代把握が今回の調査の主眼の一つとして挙げられ、ひいては城下町形成期及び近世城下町の層位的な把握についても議論できる成果を提示できるよう努めた。

基本層序としてはそれぞれの調査区で細部においては異なるものの、基本的な堆積はほぼ共通している。以下に Fig.13 の模式図を示しながら基本層序を説明することとする。

まず表土としては碎石層が布設されており、その直下に近現代の盛土・造成土（Ⅰ層）が認められる。この層には瓦やレンガ、コンクリートなど既設建物の建築部材として使用されたものや、使用を停止した水道管などもこの層に含まれる。これらの盛土層を掘り込む攪乱が各所で認められ、深いものは基盤層よりも深く掘り込まれたものもあった。これらの攪乱には瓦やレンガ、コンクリートなどのほか、焼土や炭化物を多量に含むものもあり、後述する昭和の浜松空襲による焼土層に起因するものと考えられる。

盛土以下の堆積は細部においては異なるものの、厚さ 5 ～ 10cm 程度の層が何層かにわたって認められた。この層にはこぶし大の礫を含む層や、焼土や炭化物を多く含む層も認められた。また近代の陶磁器類や瓦なども多量に含まれていた。この焼土層は昭和 19・20 年に米軍により行われた浜松空襲によるものとみられ、各調査区で認められた。Ⅰ層から以下に述べるⅢ層までの層をⅡ層とする。Fig.13 ではⅠ・Ⅱ層を一括して図示している。

この層の下には、基盤層に含まれる礫を多量に含む層（黄褐色礫混細粒砂層）を使用した整地土（Ⅲ層）が認められた。この層は各調査区で確認できるものの、全域にわたって存在する調査区（Ⅱb区・Ⅱc区・Ⅱd区・Ⅱe区）もあるが、部分的に認められる調査区（Ⅰ区・Ⅱa区・Ⅲ区）もあり、整地が全域ではなく、細かな区割りごとになされた可能性を示唆するものである。なお、Ⅱc区南部ではこの整地土に被熱層があり、それぞれに高低差が認められることから、整地された時期が一時期ではない可能性も考えられる。このⅢ層の上面にはⅡ層が直接認められ、本来は生活面が存在していたものとみられるが、削平を受けているため認められなかった。

Ⅲ層は先述のような特徴を持つ層であるが、層の厚さは 10 ～ 20cm で、この下には同じような礫を含む層や、基盤層である黄褐色土を含む灰色シルト層などが認められた。これらの層を薄く重ねたところも認められたが、これは人為的な堆積と理解でき、一連の整地土の可能性が高く、Ⅲ層の

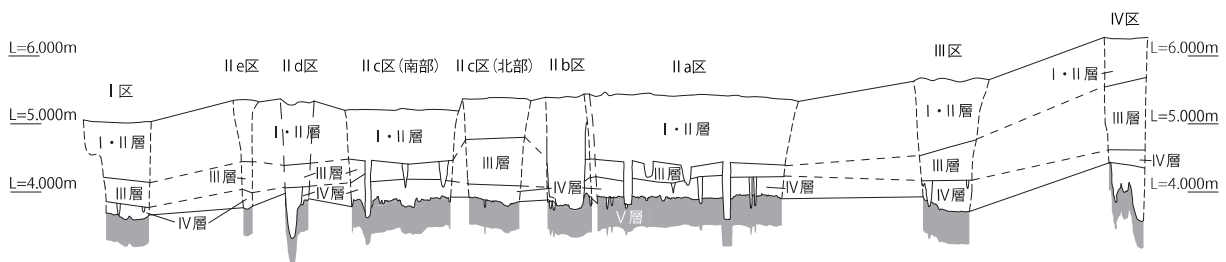


Fig.13 調査区堆積状況模式図

一部であると考えられる。以上のことから、Ⅲ層の性格としては細部においては異なるものの、整地土である可能性が高いと考えられる。

Ⅲ層は、遺構・遺物が全体的に希薄であることにより重機で掘削を行ったため、層毎の掘り下げを行っておらず、出土遺物を詳細に確認することができなかったが、近世の陶磁器類を若干含むため、近世以降の年代を想定しておきたい。Ⅱ層とⅢ層を明確に区別するのは困難で、ここでは先述の黄褐色礫混細粒砂層を用いた層の有無を指標として区別しているが、Ⅱ層とⅢ層の識別と詳細な年代については今後の調査において検証が必要と考えられる。

Ⅳ層はやや粘性を帯びた褐色からにぶい黄褐色を呈するシルト層で、調査区によって層の厚さは削平により一定ではないが、10～40cmと比較的厚く堆積する。各調査区の壁面から出土した遺物を詳細に検討すると、近世以降の遺物を含まず、13世紀代の山茶碗や湖西・渥美産の陶器など古相を



Fig.14 Ⅱ a 区地割境の状況



Fig.15 Ⅱ a 区東壁地割境の状況



Fig.16 Ⅱ a 区西壁地割境の状況



Fig.17 Ⅱ a 区西壁地割境の状況

示す遺物も含まれるが、瀬戸美濃産や初山、志戸呂産の陶器類などが主体をなすため、大窯期に形成された自然堆積層であると考えられる。調査において検出できた遺構は、Ⅳ層の上面から掘り込まれる遺構群と、Ⅳ層の直下すなわち基盤層上で検出できる遺構群に大別できる。前者については城下町形成期あるいは近世城下町にかかわる大窯期から登窯期、後者については13世紀代を中心とした鎌倉時代の年代を想定できる。

調査地の現地表面はⅣ区が6.2mと最も高位置にあり、最南端のⅠ区が5.1mで、比高差が1.1mをはかる。Ⅰ区とⅣ区の距離が約300mで、Ⅳ区からⅠ区に向けてゆるやかに下降している。

調査地の基盤層（Ⅴ層）は基本的に礫を含む黄褐色～明黄褐色を呈する粘土質シルト層で、Ⅰ区からⅡ区においては共通する基盤層が認められた。今回調査した範囲のうち最北部に位置するⅣ区は、河川堆積に起因するとみられる同色の極細粒砂を基盤とする。Ⅲ区においても基盤層にやや礫

を多く含むことが明らかで、北へいくにつれ礫の含有量が増加するようである。基盤層の標高はⅠ区で3.65 m、そこからⅢ区までは3.7～3.9 mとほぼ平坦である。これに対してⅣ区では4.25 mとなり、北から南へ下降するようで、かつて成子坂と呼ばれた地形を反映しているものと考えられる。調査できた遺構の中には基盤層上面からの深さが2 m以上に及ぶ井戸もみられたが、基本的に湧水は認められなかった。調査中も降雨による滞水は認められたが、水はけがよく比較的安定した地盤であると考えられる。

堆積状況を観察する中で、興味深い様相を示す状況が認められた。Fig.14～17に示すように、Ⅱa区の中央部において、ある掘り込みを境としてこれの南北で堆積が異なることが判明した。この掘り込みの南側には基盤層と類似する黄褐色礫混細粒砂層を用いた整地土が認められたが、北側には存在しない。この掘り込みを境として堆積状況が変化することから、町割りを行うにあたり地割境界を示すものと考えられ興味深い。この地割境界はⅡ層中の堆積であり、近代のものと考えられるが、これが近世にまで遡るかどうかは不明であるものの、地割の踏襲がなされた事例として提示しておく。なお、この地割境界の位置には現在、土地の境界を示すフェンスが設置されている。

同様の地割の踏襲は後述するⅡc区南部でも認められた。本章で詳しく述べるが、Ⅱc区南部では同じく地割境界を示す堆積と、基盤層と類似する黄褐色礫混細粒砂層を用いた整地土がやはり認められ、Ⅱa区と同様のあり方が認められた。さらにこの位置の直下の基盤層上で鎌倉時代まで遡る溝状の遺構が東西方向に存在しており、この地域の土地利用の中で、早い段階で地割境界が意識されていたことを示すものと考えられる。

(2) 遺構検出面

前項でも説明したとおり、層位的には遺構面としては複数認められるが、各層特にⅢ層における遺構・遺物が全体的に希薄であるため、今回の調査においては基盤層上で遺構検出作業を行った。このため、異なる層から掘り込まれた遺構が混在することになるが、調査の中で検出した遺構の掘り込み面が鍵層であるⅣ層の上面からか、あるいはその直下からかということが、調査時における課題であった。

調査の中で井戸や土坑など遺物が多く出土した遺構もあるが、検出できた遺構のうち多くを占めるのが小穴であり、小穴からは年代の判明する遺物が出土したものはほとんどなかった。このため検出できた小穴については、出土遺物から年代を明らかにすることは困難であった。一方、調査区壁面でⅣ層を掘り込む遺構が存在し、その遺構埋土の特徴を認識した上で、ほかの遺構との比較し、Ⅳ層上面から掘り込まれる遺構か、あるいはⅣ層下面から掘り込まれる遺構かの識別ができるよう努めたが、必ずしも全ての遺構で達成できたわけではない。今後周辺を調査する際は、Ⅳ層上面が遺構検出面の一つとなりうる可能性が考えられ、検証する必要がある。

3 I 区の調査

(1) 概 要

今回の調査範囲の最南端で、5次調査V区の北側に位置する。調査当初、調査区の中央部やや南に下水道管が横断しており、それを挟んで調査区が分断されると考えていた。ところが表土掘削を進める中で、確認していた下水道管より南側に別の水道管が横断することが発覚した。このため下水道管よりも南側を調査することが困難となり、この南側の調査を断念することとなった。この結果、最終的に調査区は東西約 7.4 m、南北約 6.0 m、面積 45.1 m²を測る。

他の調査区と同じようにⅢ層まで重機を用いて掘削し、その後人力で調査を行い、基盤層上で遺構検出を行った。検出した遺構は、小穴が最も多く 39 基、土坑 3 基、溝 2 条、井戸 2 基、柱列 1 条、その他 3 基となった。

(2) 遺 構

i) 溝

SD01 (Fig. 20) 調査区中央部から東に検出した東西方向の溝で、西側は徐々に浅くなり消滅する。調査区内で東西に 4.2 m 検出でき、幅が西端で 0.25 m、溝の東側は後述する SE01 に切られるが 0.87 m をはかる。溝の深さは 0.06 m を測り、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は均一な堆積で、基盤層の黄褐色粘土質シルト層を若干含む。この遺構の北 2 m の位置に SD02 が平行して認められるが、遺構の幅や断面形など様相は異なる。出土遺物は少ないものの、ともに湖西・渥美産とみられる甕 (3) が出土している。登窯期に属する SE01 に切られることから少なくとも江戸時代以前の遺構であり、大窯 3 段階の井戸 SE02 と近接するが、立地的にみて同時期に存在する可能性が低いことからすると、

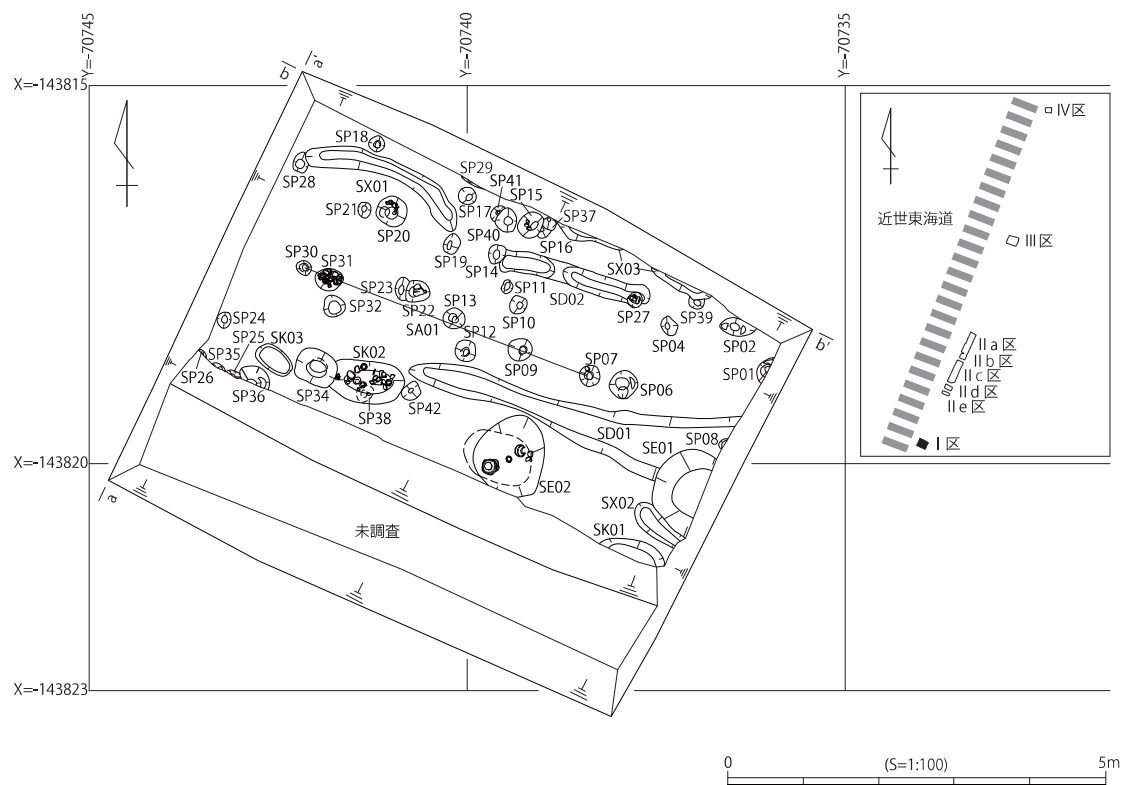
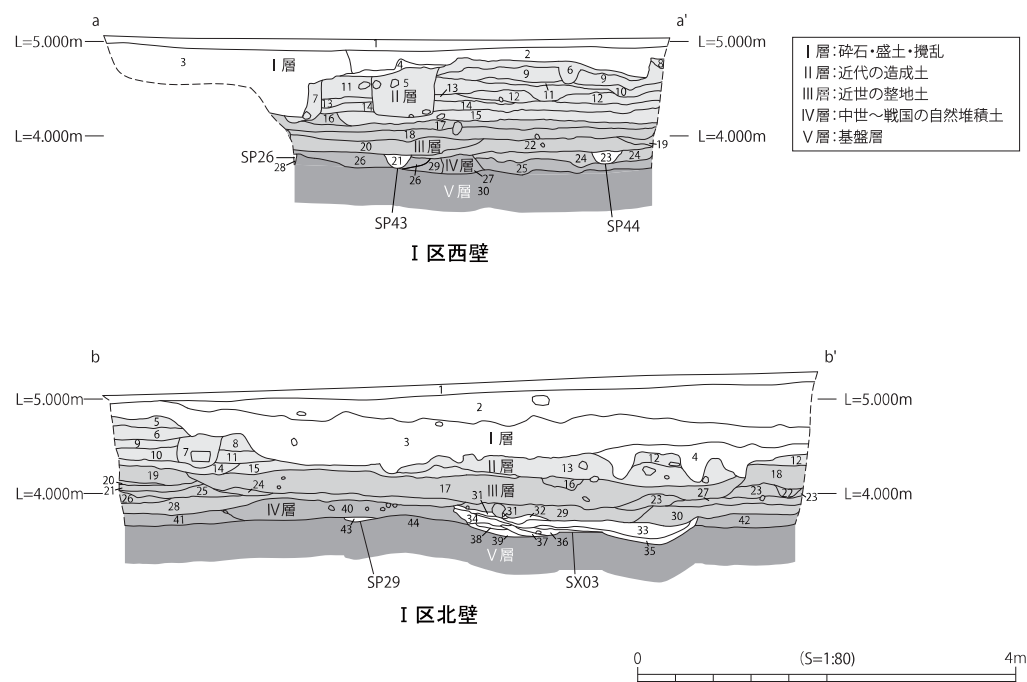


Fig.18 I 区 遺構全体図



- 1～4 碎石・盛土・攪乱 (I 層)
 5 褐色極細粒砂 (φ 10cm以下の礫を多量含む。II層)
 6 灰黄褐色極細粒砂と黄褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
 7 黄褐色極細粒砂 (φ 5cm以下の礫を多量含む。II 層)
 8 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。II 層)
 9 灰黄褐色粘土質シルト (炭化物を多量含む。II 層)
 10 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (φ 2cm以下の礫を少量含む。II 層)
 11 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。II 層)
 12 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
 13 褐色粘土質シルト (炭化物・焼土を少量含む。II 層)
 14 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。炭化物が層をなす。II 層)
 15 明黄褐色細粒砂 (φ 10cm以下の礫を多量含む。整地土。II層)
 16 にぶい黄褐色粘土質シルト (φ 2cm以下の礫を少量含む。III層)
 17 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III層)
 18 褐色粘土質シルト (φ 10cm以下の礫を少量含む。炭化物を多量含む。III層)
 19 褐色シルト質粘土 (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 5cm以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。III層)
 20 にぶい黄褐色粘土質シルト (III層)
 21 黄褐色粘土質シルト (褐色粘土質シルトを含む。SP43)
 22 褐色シルト質粘土 (φ 5cm以下の礫を少量含む。III層)
 23 にぶい黄褐色粘土質シルト (SP44)
 24 にぶい黄褐色シルト質粘土 (黄褐色シルト質粘土を含む。III層)
 25 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 10cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。IV層)
 26 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 10cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。IV層)
 27 にぶい黄褐色シルト質粘土 (黄褐色粘土質シルトを含む。IV層)
 28 暗褐色粘土質シルト (SP26)
 29 黄褐色粘土質シルト (褐色粘土質シルトを含む。IV層)
 30 黄褐色粘土質シルト (基盤層。V層)

I 区西壁土層注記

- 1～4 碎石・盛土・攪乱 (I 層)
 5 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。II 層)
 6 灰黄褐色粘土質シルト (炭化物を多量含む。II 層)
 7 にぶい黄褐色粘土質シルト (炭化物を多量含む。コンクリートブロックを含む。攪乱。II 層)
 8 にぶい黄褐色粘土質シルト (φ 2cm以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。II 層)
 9 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (φ 2cm以下の礫を少量含む。II 層)
 10 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
 11 にぶい黄褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。II 層)
 12 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色極細粒砂を含む。II 層)
 13 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 10cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。II 層)
 14 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。炭化物が層をなす。II 層)
 15 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色極細粒砂を含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。II 層)
 16 褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (III層)
 17 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 5cm以下の礫をやや多量含む。炭化物を多量含む。III層)
 18 灰黄褐色粘土質シルト (φ 20cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。瓦を少量含む。III層)
 19 明黄褐色細粒砂 (φ 10cm以下の礫を多量含む。整地土。III層)
 20 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III層)
 21 褐色粘土質シルト (φ 10cm以下の礫を少量含む。炭化物を多量含む。III層)
 22 にぶい黄褐色粘土質シルト (III層)
 23 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 20cm以下の礫を少量含む。φ 10cmの礫を1個含む。III層)
 24 にぶい黄褐色粘土質シルト (炭化物・焼土を多量含む。III層)
 25 灰黄褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。III層)
 26 にぶい黄褐色粘土質シルト (III層)
 27 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。III層)
 28 にぶい黄褐色シルト質粘土 (黄褐色シルト質粘土を含む。III層)
 29 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 3cm以下の礫を少量含む。φ 15cmの礫を1個含む。炭化物を少量含む。III層)
 30 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。III層)
 31 にぶい黄褐色粘土質シルトと灰黄褐色粘土質シルトの混合土 (SX03)
 32 灰黄褐色中粒砂 (SX03)
 33 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物・焼土を少量含む。SX03)
 34～36 灰黄褐色中粒砂 (SX03)
 37・38 褐色粘土質シルト (SX03)
 39 にぶい黄褐色粘土質シルト (SX03)
 40 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 10cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。IV層)
 41 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。φ 10cm以下の礫を多量含む。炭化物を多量含む。IV層)
 42 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。IV層)
 43 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (SP29)
 44 黄褐色粘土質シルト (基盤層。V層)

I 区北壁土層注記

Fig.19 I 区 壁面図

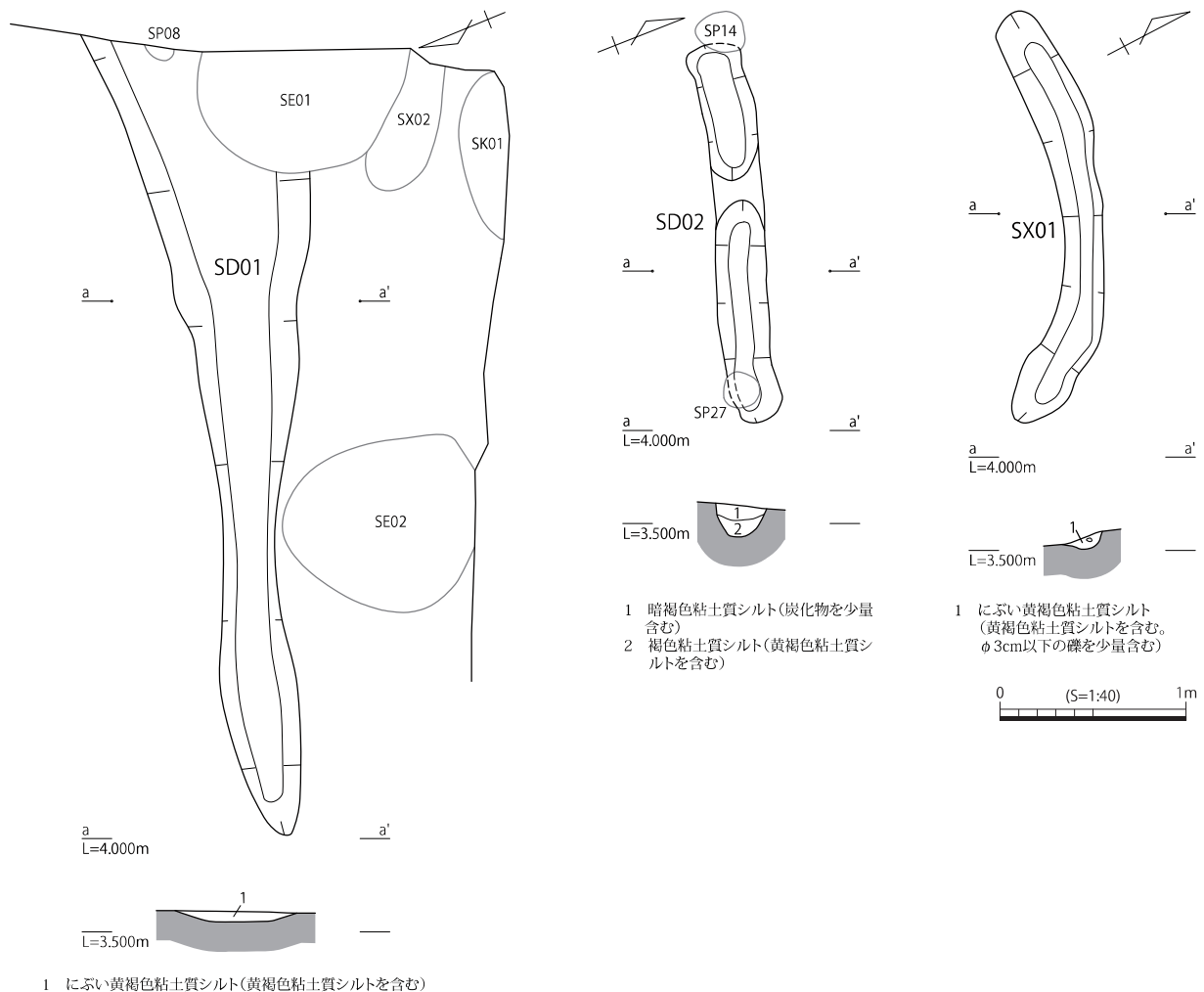


Fig.20 I区 遺構図(1)

13世紀代にまで遡る可能性も考えられよう。

SD02 (Fig. 20) SD01の北2mの位置に平行する溝状の遺構であるが、長さが2.05mと短く遺構の底面は西側が高く、東側が低くなり約15cmの段差をもつ。幅は0.26mで、深さは西側で0.03m、東側で0.18mを測る。遺構の断面形は西側が浅い皿状、東側はU字形を呈し、複数の遺構を同一遺構として調査した可能性も考えられる。一方、遺構の西端と東端に小穴が認められ、溝が切られているがこれらが有機的な関係をもつとすれば、布掘り建物の掘り方である可能性も考えられる。出土遺物はSD01と同様少ないものの、湖西・渥美産とみられるの甕(4)が出土している。

ii) 井戸

SE01 (Fig. 21) 調査区東壁際中央部で検出した井戸である。遺構のおよそ半分が調査区外にあり、遺構底面までの調査ができなかった。遺構は平面形が円形あるいは楕円形を呈するものと考えられ、南北1.12m、東西は0.66m以上を測る。SD01とSX02を切る。遺構は素掘りで、検出面から1.5mまで掘り下げたが、壁際ということもあり調査できる範囲も非常に狭いことから、安全を考慮しそれ以下の掘削を断念した。断面図に示すとおり、上層には基盤層に起因する黄褐色シルトブロックを含む灰色シルト層が堆積し、中層以下は灰色粘土～粘土質シルトが堆積する。機能時あるいは使用停止直後の状況は不明ながら、中層の状況からは徐々に埋没していき、最終的には人為的に埋め戻されたものと考えられる。上層から瀬戸美濃産の火鉢(1)や、図示していないが染付など江戸時

代後期にまで降る遺物が出土している。井戸の機能していた時期は不明であるが、埋没は江戸時代後期と考えられる。

SE02 (Fig. 22) 調査区中央部南壁際、SD01の南に位置する井戸である。遺構の平面形は不整円形を呈し、南北1.30 m、東西0.94 mを測る。素掘りの井戸で、検出面から1.65 mまで掘り下げたが、掘り下げるに従い狭くなり、人力で掘削することが困難になった。また重機が進入することもできなかったため、安全を考慮し底面までの掘削は断念した。遺構の断面形はやや内側にすぼまるようになるが、検出面から0.75 mの位置で、遺構の西側がオーバーハングすることが明らかとなった。井戸掘削時は垂直に掘削されたものと考えられるが、ある段階で基盤層が浸食された結果このような状況になったと推測される。

堆積状況は断面図に示すとおりで、基本的にはレンズ状の堆積が認められ、上層から中層、下層にいくに従い包含する礫が次第に大きくなる。下層に含まれる礫は直径15 cm程の大きな礫が多量に認められた。なお、掘削可能な深さまで掘り下げを行ったが、湧水は認められなかった。

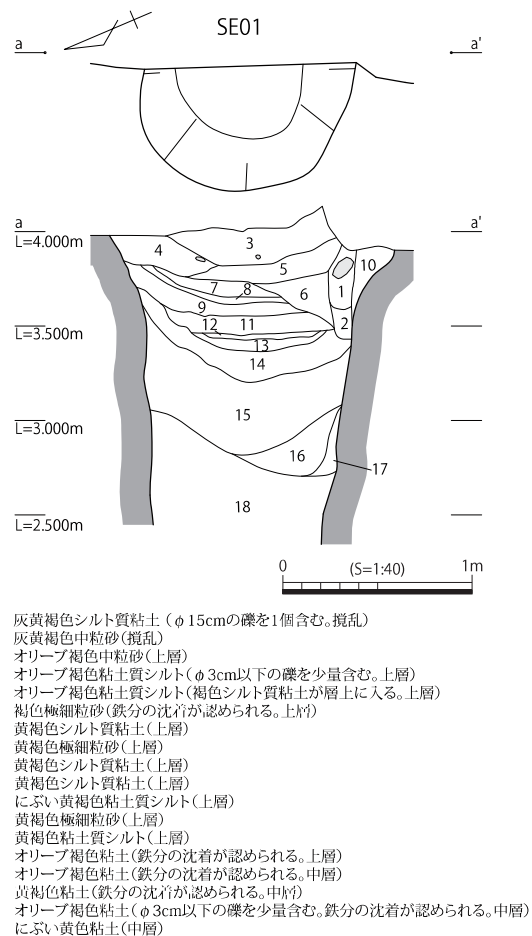


Fig.21 I区 SE01 遺構図

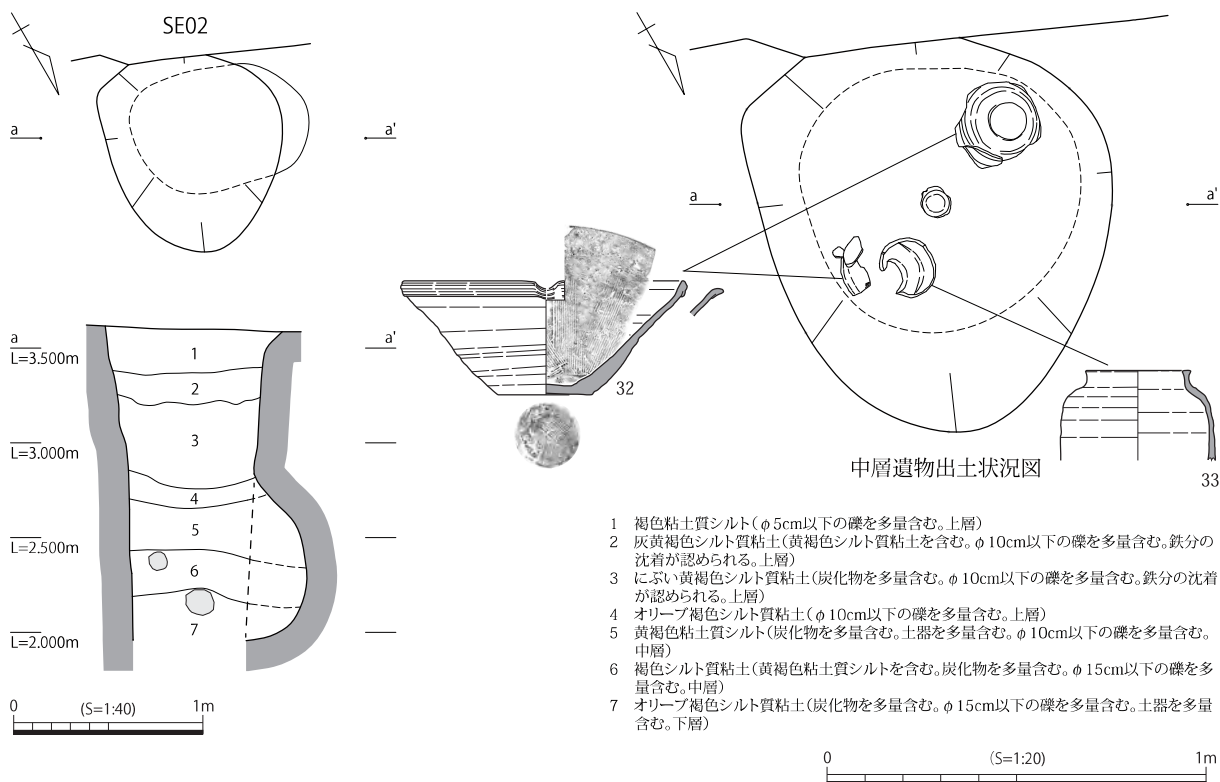


Fig.22 I区 SE02 遺構図

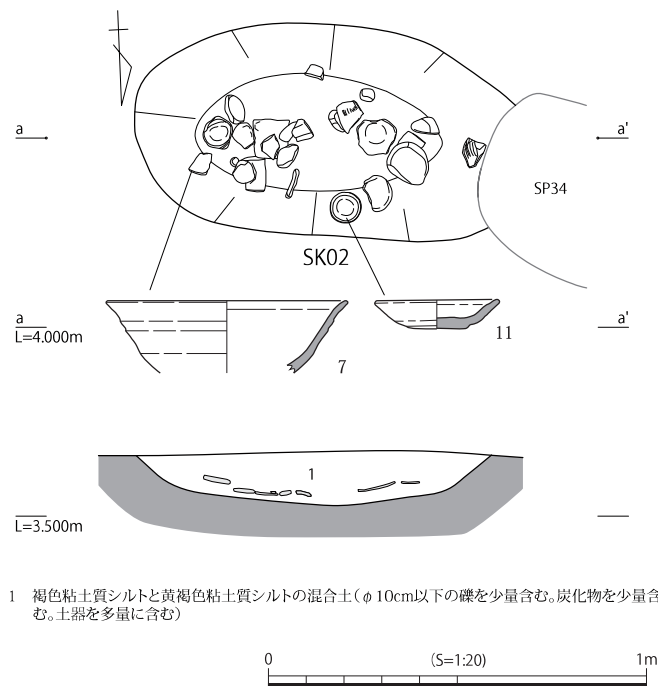


Fig.23 I 区 SK02 遺物出土状況図

iii) 土坑

SK02 (Fig. 23) 調査区南部 SD01 の西側で検出した土坑である。遺構の西側は SP34 に切られる。遺構は平面形が楕円形を呈し、東西 1.00 m、南北 0.55 m、遺構の底面は平坦で断面形が浅い皿状を呈し、検出面からの深さ 0.14 m を測る。遺構埋土は、褐色粘土質シルトと基盤層に起因する黄褐色粘土質シルトが斑状に認められ、こぶし大礫とともに破片化した遺物がまとまって出土した。遺物の出土状況からは、破損した遺物を礫とともに廃棄した状況を示している。

出土遺物は戦国時代から江戸時代の遺物を含まず、山茶碗や湖西・渥美産の甕など、13 世紀代に属するものが認められたため、遺構の年代は 7 型式の山茶碗から 13 世紀中葉と考えられる。

iv) 小穴

SP06 (Fig. 24) 調査区東部中央で検出した円形の小穴で、SD01 の北 0.2 m に位置する。小穴の中央部に柱痕跡と考えられる層が認められた。断面観察によると底面では小穴中央に位置するが、検出面では遺構の南壁に傾斜する。当初から傾斜をもつものかどうかは不明である。土圧により傾いた可能性も考えられる。柱痕跡は基底部で計測し、直径 8cm を測る。遺構の底面は平坦で、断面形は箱形を呈する。遺構から遺物は出土しなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP09 (Fig. 24) 調査区中央に位置する円形の小穴で、SD01 の北 0.3 m に位置する。小穴の中央に直径 8cm の柱痕跡が認められる。遺構の底面は平坦で、断面形は U 字形を呈する。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP12 (Fig. 24) 調査区中央に位置する円形の小穴で、SD01 の北に近接する。小穴の中央に柱痕跡が認められるが、遺構底面から 20cm ほど置土してから柱を据えている可能性がある。柱痕跡は直径 6cm を測る。遺構の底面は平坦で、断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP15 (Fig. 25) 調査区中央北壁際で検出した楕円形小穴で、SD02 の北 0.2 m に位置する。SP16・SP37 を切る。小穴の東寄りに柱痕跡が認められるが、小穴検出時には確認できなかった。このため

各層から多くの遺物が出土したが、なかでも検出面から 1.15 m 下げた中層で Fig.22 に示すように瀬戸美濃産や初山産の播鉢や、初山産の壺などがまとまって出土した。出土遺物は瀬戸美濃産の播鉢、瀬戸美濃産の天目碗・折縁皿、初山あるいは志戸呂産の皿類・播鉢・壺など、常滑産の甕、山茶碗の碗、土師器のかわらけや内耳鍋が認められる。上層からは陶器類が目立ち、下層からはかわらけや内耳鍋が多く出土した。常滑産の甕や山茶碗の碗は混入とみられる。出土状況からは破損したものを廃棄したものと考えられ、井戸としての機能停止後は廃棄土坑として利用された可能性が高い。出土遺物は大窯 3～4 期に属するものが大半を占める。なお遺構の周囲には小穴などは認められず、伴う遺構は不明である。

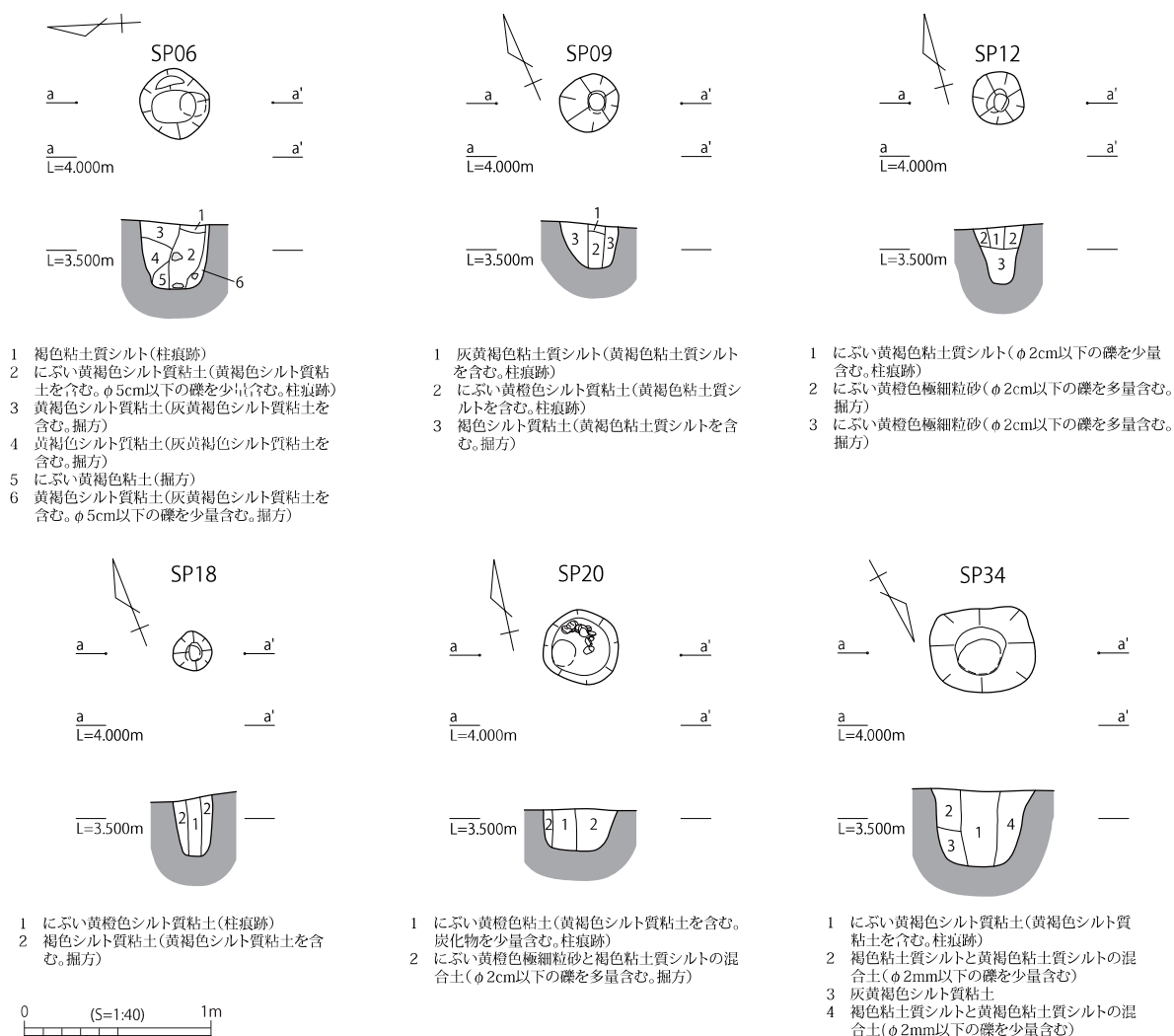


Fig.24 I 区 遺構図(2)

柱の直径は不明であるが、柱痕跡の南西部に周囲を取り巻くように、根固めとみられるこぶし大礫が3個認められた。その内径から計測すると柱の直径は10cmを測る。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP18 (Fig. 24) 調査区北西部で検出した小穴で、SX01の北に近接する。小穴の中央に直径7cmの柱痕跡が認められる。遺構の底面は平坦で、断面形はU字形を呈する。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP20 (Fig. 24) 調査区北西部のSX01の南0.1mに位置する円形の小穴である。小穴の西寄りに柱痕跡が認められる。柱の直径は13cmとやや大きく、柱痕跡の北辺に沿って周囲を取り巻くように直径2cm大の小礫が認められた。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP22・SP23 (Fig. 25) 調査区中央西寄りで検出した小穴で、SP22がSP23を切る。SP22は不整形円形を呈し、遺構底面で遺構の北寄りに隅丸三角形の石を据える。礫の上面が平坦であり、根石の可能性が高い。SP23は楕円形を呈し、南北方向に長軸をもつ。SP23からは遺物が出土しなかった、SP22からは少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP27 (Fig. 25) 調査区北東部で検出した小穴でSD02の東端に位置し、SD02を切る。平面形は円

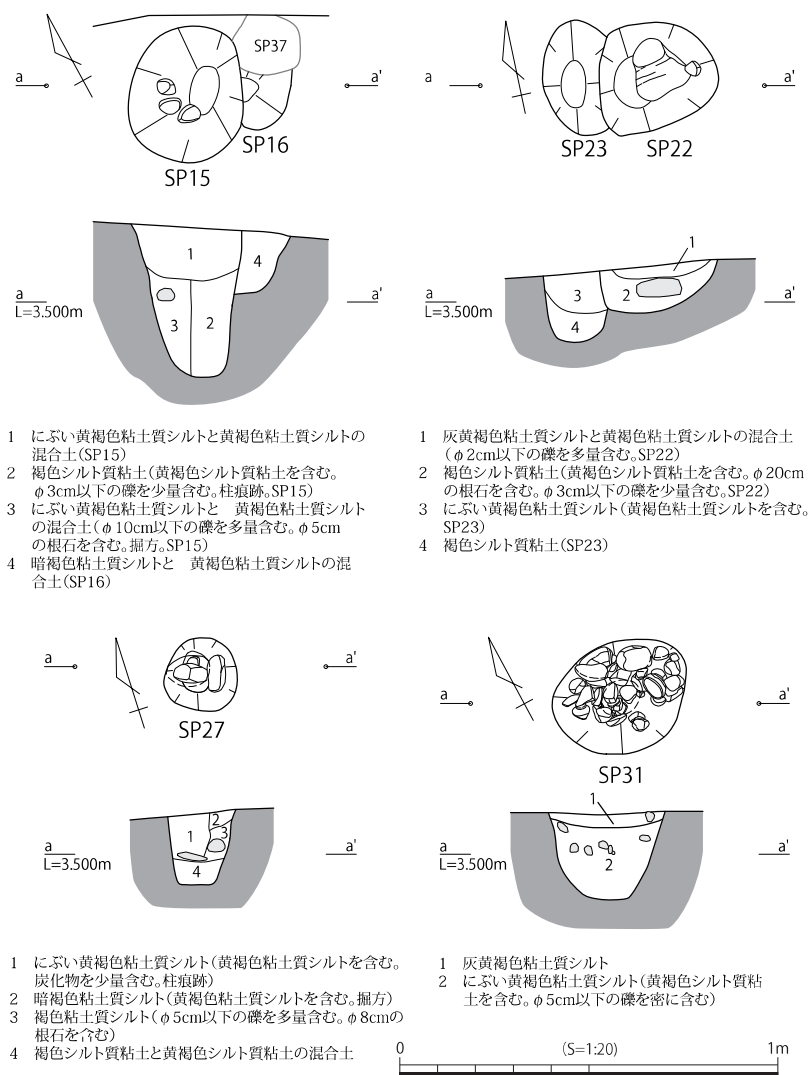


Fig.25 I 区 遺構図 (3)

穴の中央に柱痕跡が認められた。柱の直径は 14cm を測り、ほかの小穴で検出した柱の直径とくらべ大きい。遺構の平面形が隅丸長方形を呈し、規模も大きいことからほかの小穴とは様相を異にする。これと同様な小穴は調査区内では認められず、組み合わせる遺構も不明である。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

v) その他の遺構

SX01 (Fig. 20) 調査区北西部で検出した遺構で、平面形が弧状を呈する。先述の SD02 の西側 0.5 m に位置する。遺構は東西に長軸をもち、中央部で北側へ弓なりになる。遺構の西端で SP28 を切る。遺構の断面形は U 字形を呈し、遺構の底面はほぼ平坦である。堅穴建物の周壁溝のような形状である。遺構から遺物が出土していないため、遺構の詳細な年代は不明である。埋土の特徴からは先述した SD01 の埋土と類似するため、同時期の遺構である可能性も考えられる。

SA01 (Fig. 26) 調査区中央部で検出した柱列である。東西方向に 2 間 (SP07・SP13・SP30) 認められた。柱列は SD01・SD02 にほぼ主軸を揃え、W-21°-N となる。構成する 3 基の小穴は円形を呈し、中央にいずれも柱痕跡が認められる。遺構の規模は遺構一覧表に示すとおりで、柱痕跡から柱の直径はいずれも 8cm をはかる。柱間寸法は SP30 - SP13 間は 2.04 m、SP13 - SP07 間が 1.98 m を測り、およそ 2 m 等間となる。小穴の底面高は不揃いである。これと組み合わせる遺構が、調査区内でみつか

形を呈し、断面形は箱形を呈する。遺構底面は平坦で、10cm ほど置土した上に根石を配する。断面で柱痕跡が認められ、その周囲に根固めと考えられる礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため年代は不明である。

SP31 (Fig. 25) 調査区西部で検出した小穴で、平面形が東西に長軸をもつ楕円形を呈する。遺構からはこぶし大礫が密に含まれる。遺構の断面形は U 字形を呈する。遺構の上部が削平されている可能性があるため詳細は不明であるが、礫は柱の下部構造の根固めの可能性が考えられる。遺構から少量の遺物が出土したが、年代の判明する遺物は認められず、遺構の詳細な年代は不明である。

SP34 (Fig. 24) SK02 の東側で検出したやや大型の小穴で、SK02 を切る。遺構は隅丸長方形を呈し東西に長軸をもつ。小

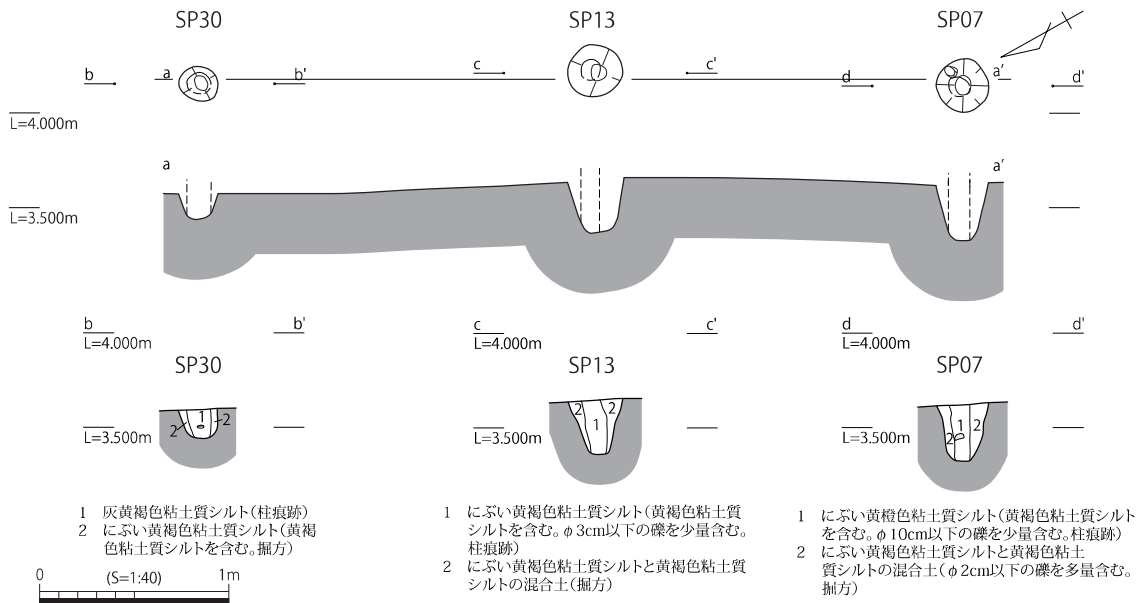


Fig.26 I区 SA01 遺構図

らなかったため、建物かどうかは不明である。それぞれの小穴から遺物が出土しているが、年代の判明する遺物は認められなかったため、遺構の年代は不明である。

(3) 遺物 (Fig. 27 ~ 29)

1・2はSE01出土遺物である。1は瀬戸美濃産の火鉢で江戸後期に属する。2は瀬戸美濃産の挿鉢体部で、大窯2～3段階の所産。

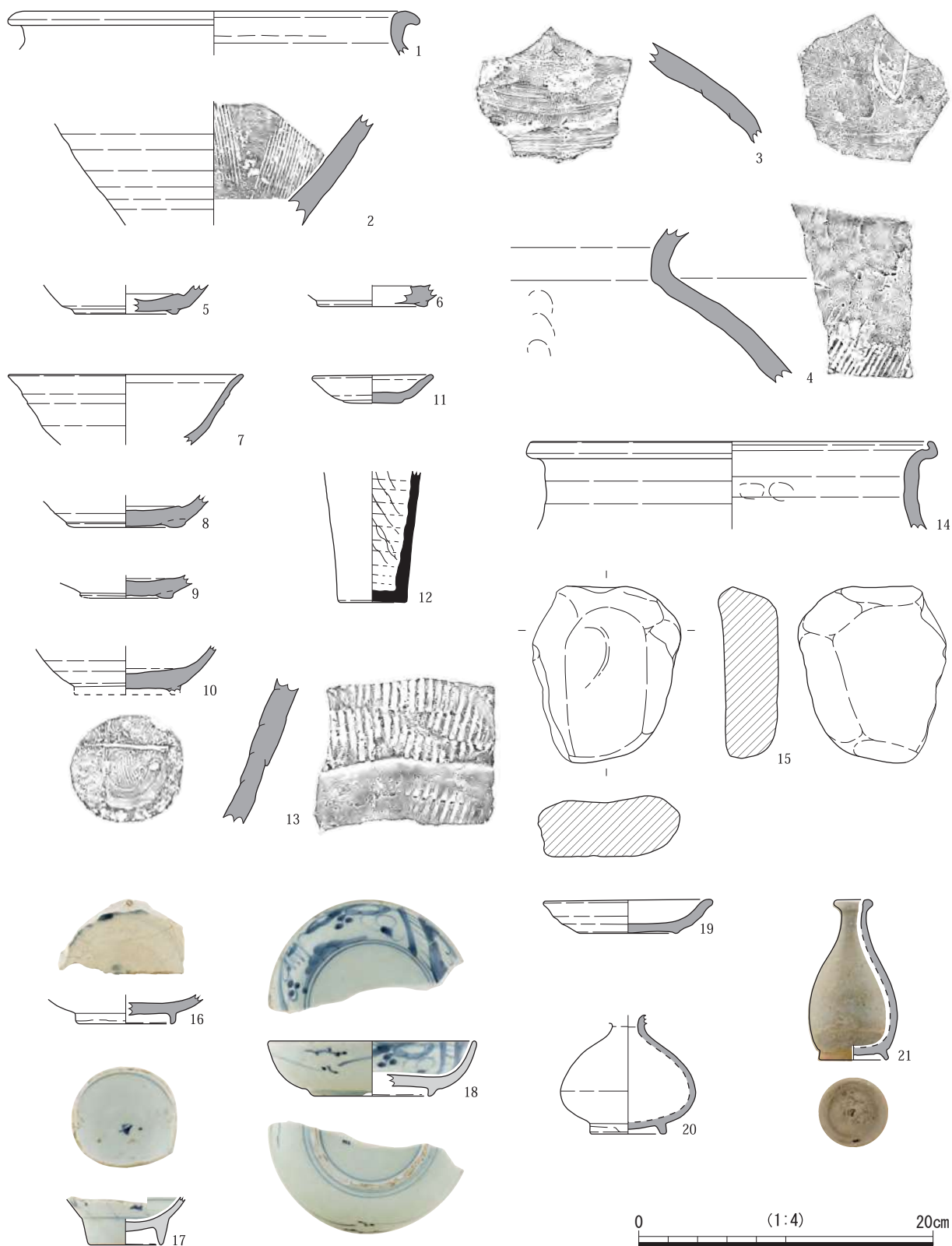
3はSD01出土の渥美産甕肩部の破片である。器壁が厚いことから大型の甕であると考えられる。外面に「U」字状の線刻が認められる。13世紀代の年代が考えられる。

4はSD02出土の渥美産甕の破片である。頸部は「く」の字状に外反する。外面に縦位の平行タタキが認められる。器壁が厚いことから大型の甕であると考えられる。13世紀代の年代が考えられる。

5・6はSP31出土の山茶碗の碗底部である。小片であるが肉厚の底部に低い高台を貼り付ける。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。

7～15はSK02出土遺物である。7～11は山茶碗である。7は碗の口縁部から体部の破片。8～10は碗底部で、肉厚の底部に低い高台を貼り付ける。10は高台が剥離するが、底部裏面に線刻が認められる。11は完形の小皿である。口径8.0cmを測る。口縁部内外面に自然釉がかかる。底部外面と見込部は摩耗のため平滑である。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。12は須恵器壺Gの底部から体部である。9世紀代の所産。13は渥美産の大型甕体部の破片で、外面に縦位の平行タタキが顕著である。14は常滑産の壺口縁部で、直立気味の頸部から口縁部は外反し、端部を上方へつまみ上げる。4型式13世紀初頭の所産。15は砂岩製の砥石である。

16～21はⅡ層出土遺物である。16は江戸後期に属する瀬戸美濃産の陶器皿である。見込部に五弁花印判と圏線が認められる。17は肥前産磁器の広東碗である。見込部に手書きの文様、圏線が認められる。外面には草花文が認められる。18は19世紀代の肥前産磁器皿である。内外面に草花文が認められる。19は瀬戸美濃産の志野丸皿である。完形で内面に煤が付着し、灯明皿として使用されたものと考えられる。口径11.2cm。大窯2段階後半に属する。20は産地不明陶器の小瓶である。頸



1・2 : SE01、3 : SD01、4 : SD02、5・6 : SP31、7 ~ 15 : SK02、16 ~ 21 : II層

Fig.27 I区 出土遺物

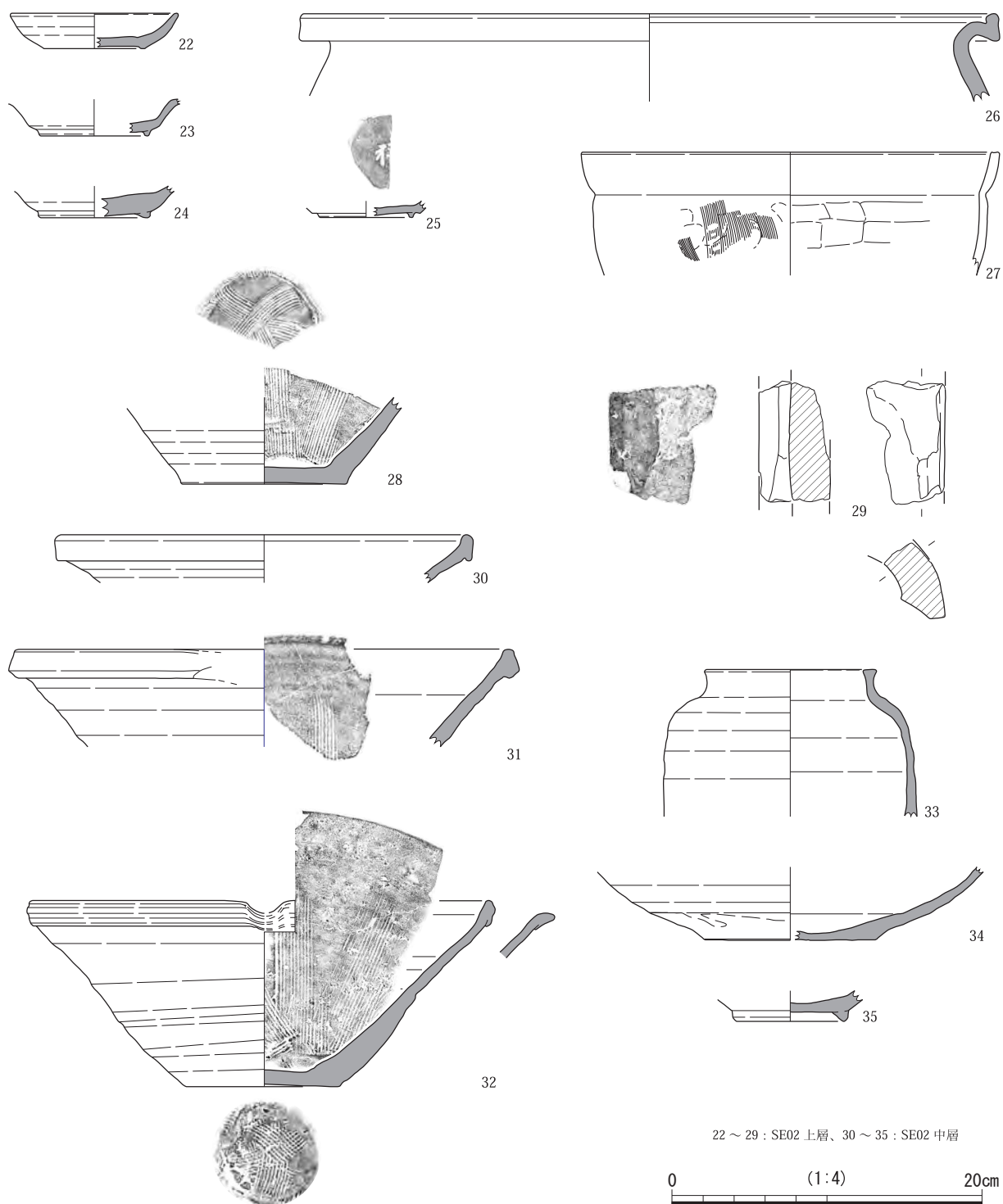


Fig.28 I 区 SE02 上・中層出土遺物

部から底部まで完存する。21は瀬戸美濃産陶器の小瓶で、底部裏面に墨痕が認められる。墨書の可能性があるが判読できない。20・21ともに江戸後期の所産。

22～29はSE02上層、30～35はSE02中層、36～50はSE02下層出土である。22は初山産の内禿皿で、胎土が褐灰色を呈する。口径10.6cm。大窯3段階後半に属する。23・25は小片で、瀬戸美濃産の折縁皿である。23は口縁部を欠くが、断面三角形の低い高台を貼り付ける。25は平坦な見込部に「福」と判読できる線刻が認められる。大窯4段階前半に属する。24は山茶碗の碗底部である。

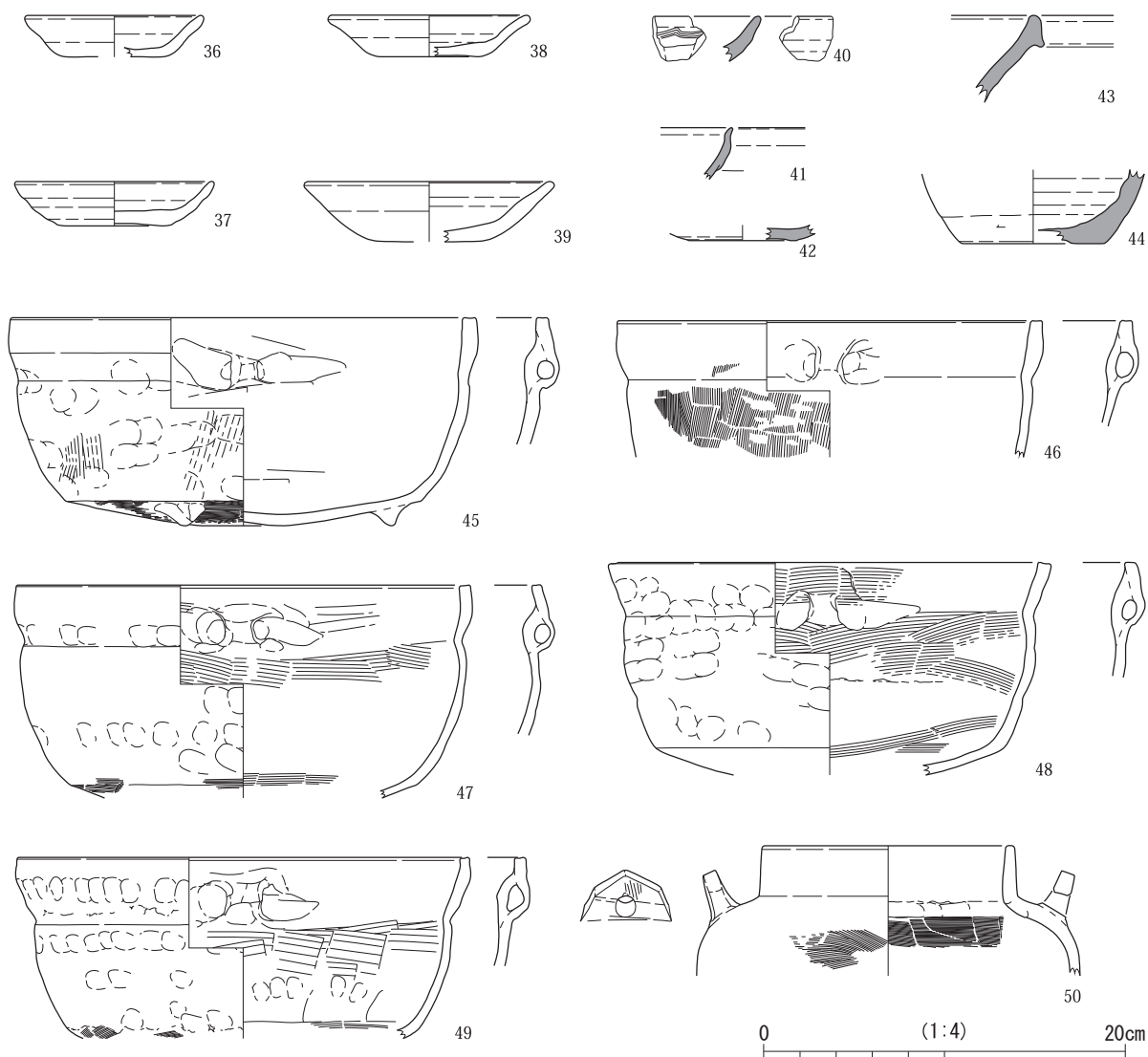


Fig.29 I区 SE02 下層出土遺物

7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。26 は常滑産の甕で、復元口径 44.6cm を測る。4 型式 13 世紀初頭と考えられる。27 は土師器の内耳鍋である。内彎形内耳鍋 B2 類で、16 世紀後半に属する。28 は初山産の播鉢底部で、胎土は灰色を呈する。底径 10.4cm を測る。大窯 3 段階の所産。29 は丸瓦の小片である。凹面に布目が残る。30 ～ 32 は播鉢で、30 が初山産、31・32 が瀬戸美濃産である。30 は大窯 3 段階、31 は大窯 4 段階後半、32 は残りが良い資料で片口が残存する。大窯 2 段階に属する。33 は初山あるいは志戸呂産の壺である。なで肩の体部から短い口縁部が垂直に立ち上がり、口縁端部を内外に拡張する。内外面に暗赤灰色の釉がかかる。江戸前期まで降る可能性がある。34 は志戸呂産の大皿と考えられる。胎土は灰褐を呈し、底径 11.0cm を測る。大窯 4 段階に属する。35 は山茶碗の碗で底部は完存する。湖西・渥美産と考えられ、5 型式 13 世紀初頭の所産と考えられる。36 ～ 39 は土師器かわらけである。36 ～ 38 は小皿で口径 9.6 ～ 10.8cm。39 は中皿で口径 13.4cm を測る。ロクロ成形で底部に回転糸切痕を残す。16 世紀後半～ 17 世紀前半の年代が考えられる。40 は瀬戸美濃産陶器の黄瀬戸碗の小片である。にぶい黄色の釉調を示す。大窯 4 段階の所産。41 は瀬戸美濃産の小天目碗の小片。大窯 3 段階の所産。42 は初山産の皿の小片である。胎土は灰褐色を呈する。43 は瀬戸美濃産播鉢口縁部の小片で、大窯 3 段階に属する。44 は瀬戸美濃産徳利の底部である。

底部は幅広の蛇の目高台で、江戸前期の所産。45～49は土師器の内耳鍋である。いずれも内彎形内耳鍋B2類で、半球形の体部から内湾する口縁部が立ち上がり、口縁部上端はややくぼむ。体部外面はユビオサエあるいはハケメ調整。体部内面はハケメ調整あるいは板ナデ調整。内耳は両方が残存するものはないが、口縁部下に半球形の粘土塊を縦位に貼り付け、棒状工具を用いて孔を貫通させている。45は底部まで残存する。底部には断面三角形の短い脚部を貼り付ける。2ヶ所残存するが、貼り付け位置からみて3足であると考えられる。体部と底部境の稜は明瞭で、外面は細かなハケメが認められる。48は口縁部が「く」の字状に外反する。45は口径23.3cm、48は25.6cmを測る。50は土師器の茶釜である。口縁部から肩部までの破片で、口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部はややすぼまる。肩部には板状粘土を横位に貼り付け外耳とし、口縁部に直交する位置に円孔を貫通させる。外耳は斜上方に貼り付け、五角形を呈する。体部下半は不明であるが、羽は付属しないものと推定される。

(4) 小 結

I区は今回の調査範囲の最南端で、5次調査V区の北5mの位置にあたる。遺構は大別して鎌倉時代に属する遺構と、戦国時代から江戸時代にかけての遺構が認められた。鎌倉時代の遺構としてはSK02と、埋土の特徴や切り合い関係などからSD01・SD02、SA01などが挙げられる。SA01は年代の判明する遺物が認められないが、SD01・SD02と主軸を揃えることから同時期の遺構である可能性を考えている。SK02は浅い土坑で、廃棄土坑としての性格が考えられる。SA01もこれに伴うとすれば、I区は鎌倉時代の居住空間の一画を占めているものと考えられる。

戦国時代から江戸時代の遺構としては、SE02や多くの小穴群が認められた。小穴に関しては出土遺物が少ないため、厳密な年代は不明であるが、埋土で識別すると当該期の遺構が多くを占めるものと推定している。小穴の特徴としては、柱痕跡が認められ根石などを伴う小穴が多いということが挙げられる。組み合わせが判明しないが、おそらく建物を構成する柱穴である可能性が高い。

SE02は素掘りの井戸で、埋土から多量の遺物が出土しており、当該期の良好な一括資料を得ることができた。調査範囲が狭く、井戸底面までの調査を断念したため、井戸が機能した詳細な年代は確認できなかったが、井戸の埋没時に相当する時期の遺物が多量に出土した。出土遺物は大窯3～4段階に属する瀬戸美濃産や初山・志戸呂産の陶器類や、かわらけ、内耳鍋が多くを占めており、城下町形成期の居住空間として土地利用がなされたことが再認識できた。この井戸に伴うほかの遺構の年代については調査では明らかにすることができなかったが、先述したように多くの小穴はこの井戸と同時期の遺構である可能性が高い。

4 II 区の調査

(1) 概 要

II 区は第 1 章でも述べたとおり 6 地区に分割して調査することとなり、呼称をアルファベット小文字を用いて II a 区、II b 区、II c 区北部、II c 区南部、II d 区、II e 区とした。II c 区は調査範囲の中央を分断するかたちで水道管やガス管などが横断しており、それを挟んで同時に調査を行うこととなったため、北側を II c 区北部、南側を II c 区南部と呼称した。

II 区は今回の調査範囲のほぼ中央に位置し、未調査範囲も含めると長さ 54 m、幅 5 m、面積 240.4 m²に及ぶ。以下に II 区の調査成果を述べるが、遺構平面図は細分した調査区ごとに示す。遺構の説明については遺構の種別毎に行うため、個別の遺構図は種別毎に示すこととする。なお本文では主要遺構のみ記述し、ほかの遺構については文末の遺構一覧表に示したので参照されたい。

検出した遺構は、小穴が最も多く 204 基、土坑 25 基、溝 8 条、井戸 3 基、柱列 2 条、その他 7 基となった。出土遺物もほかの地区にくらべて豊富に出土した。遺構の帰属年代が判明するものもみられたが、小穴からは年代の判明する遺物がほとんど出土していないため、遺構の詳細な年代については判明しないものが多かった。遺構の年代の根拠として、埋土の相違により識別できるものもあり、これらを考慮し年代を推定した。具体的には他の地区と同様、基盤層直上にある IV 層とした自然堆積層を切る遺構かどうか、年代を推しはかる一つの指標となった。

II a 区で検出できた遺構は重複するものが少なく、遺構の密度も非常に薄いことが挙げられる。調査区北端部と、II b 区に接する南端部付近に遺構が認められたが、調査区中央部はほとんど遺構が認められなかった。みつかった遺構もほとんどが小穴であった。出土遺物も広範囲に調査できたわりに少なく、図示できたのは Fig.58 に示したとおりであった。

II b 区は II a 区の南に連続する調査区である。II a 区南端部で、井戸と想定できる深度のある遺構の存在が明らかとなったため、この付近の遺構は II a 区の遺構としては調査せず、II a 区埋め戻し後に II b 区の調査範囲として調査を行った。

II c 区は II b 区の南に位置する調査区で、中央部に未調査範囲をはさんで北側の II c 区北部と、南側の II c 区南部に区分して調査した。このうち II c 区南部は今回の調査範囲のなかで最も遺構密度が高く、多数の遺構が認められた。

II d・II e 区は II c 区南部の南に位置する調査区で、東側に隣接する宅地との関係から限定的な範囲の調査となった。

(2) 遺 構

i) 溝

SD01 (Fig. 30・33・40) II b 区と II a 区の境から南に延びる直線溝で、IV 層下面から掘り込まれる遺構である。この延長が II c 区北部、さらに II c 区南部にまで連続するものとみられる。II b 区から II c 区北部の南端までは直線的に延びるが、II c 区南部ではこれをそのまま延長させるとやや西にずれるため、別遺構である可能性もあるものの、遺構の幅や深さ、断面形など共通する要素が認められたため、ここでは同一遺構として扱うこととする。仮に別遺構とした場合は長さがおおよそ 12 m となる。同一遺構とした場合は南にある SD02 の手前で浅くなり、ここまでの長さが 19 m をはかる。II b 区では SK09 を切るが、その北側は調査範囲が狭まる位置になるため詳細は不明であるが、この位置で収束するかあるいは西側へ折れ曲がる可能性が考えられる。遺構は浅い皿状断面を呈し、幅が

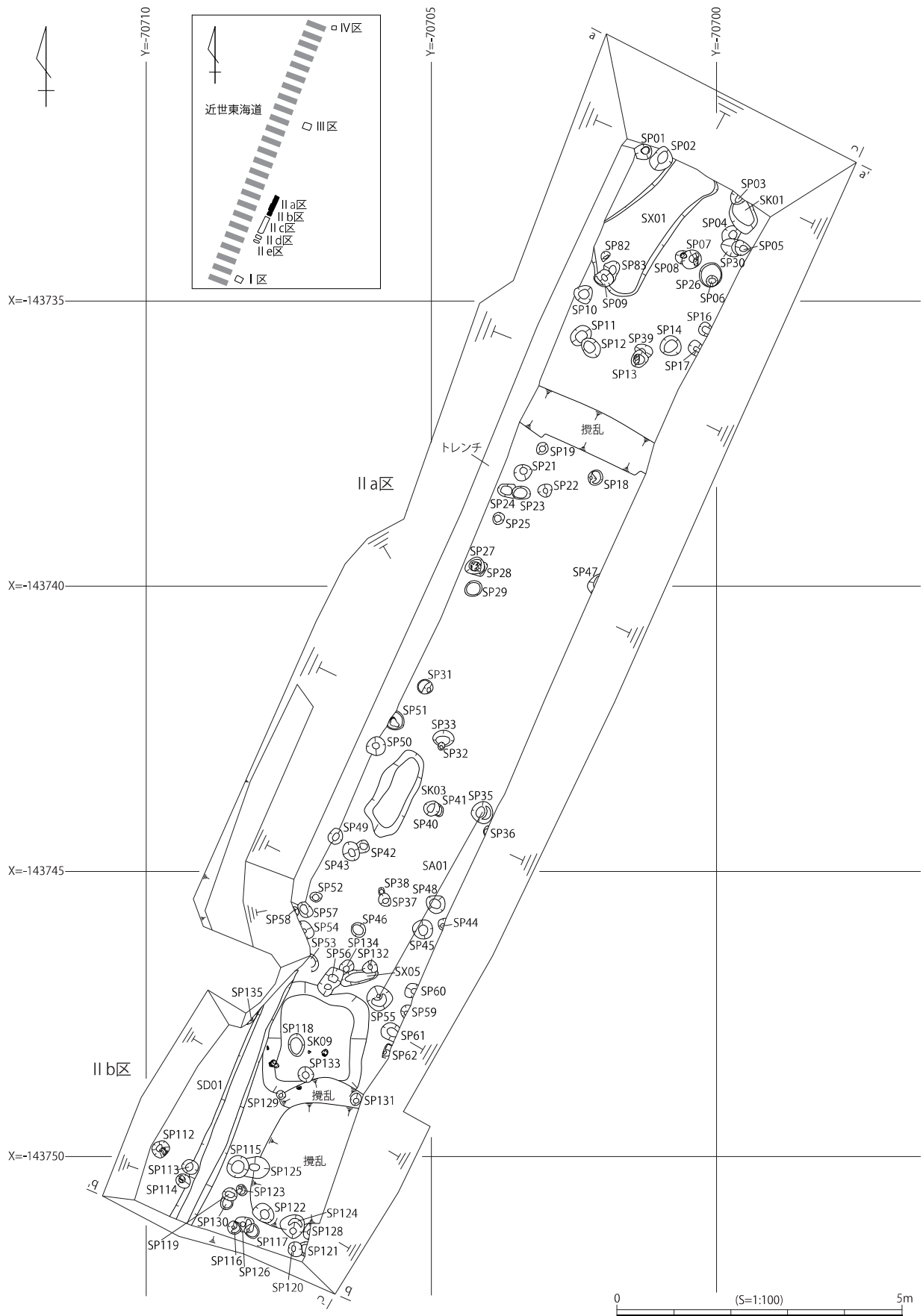
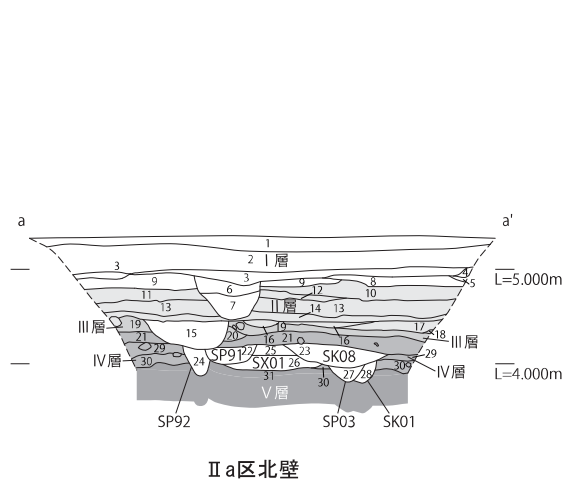
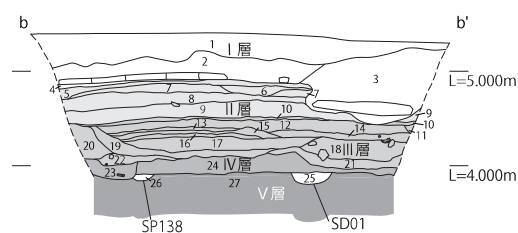


Fig.30 IIa・IIb 区 遺構全体図



- 1～2 碎石・盛土・攪乱 (I 層)
- 3 にぶい黄色粘土質シルト (I 層)
- 4 黄褐色砂質シルト (明黄褐色砂質シルトを含む。I 層)
- 5 褐色粘土質シルト (焼土を多量含む。I 層)
- 6 にぶい黄褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土 (攪乱。I 層)
- 7 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 5cm 以下の礫を少量含む。攪乱。I 層)
- 8 褐色粘土質シルト (φ 3cm 以下の礫を多量含む。I 層)
- 9 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (I 層)
- 10・12 にぶい黄褐色粘土質シルト (II 層)
- 11 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
- 13 褐色粘土質シルト (II 層)
- 14 にぶい黄褐色粘土質シルト (φ 3cm 以下の礫を少量含む。II 層)
- 15 褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。レンガ・貝粉多量含む。II 層)
- 16・17 にぶい黄褐色粘土質シルト (II 層)
- 18 灰黄色砂質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 19 褐色極細粒砂 (φ 3cm 以下の礫を多量含む。φ 10cm の礫を 1 個含む。III 層)
- 20 にぶい黄褐色砂質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 21 にぶい黄褐色砂質シルト (黄褐色砂質シルトを含む。IV 層)
- 22 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 3cm 以下の礫を少量含む。SP91)
- 23 にぶい黄褐色砂質シルト (φ 5cm 以下の礫を多量含む。SK08)
- 24 褐色砂質シルト (φ 3cm 以下の礫を少量含む。炭化物を少量含む。SP92)
- 25 にぶい黄褐色粘土質シルト (SK01)
- 26 褐色砂質シルト (明黄褐色粘土質シルトを含む。SK01)
- 27 にぶい黄褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土 (SP03)
- 28 黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (SK01)
- 29 にぶい黄褐色砂質シルト (IV 層)
- 30 褐色粘土質シルトと明黄褐色粘土質シルトの混合土 (IV 層)
- 31 明黄褐色粘土質シルト (基盤層。V 層)

II a区 北壁土層注記



- 1～4 碎石・盛土・攪乱 (I 層)
- 5 暗褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土 (II 層)
- 6 暗褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。II 層)
- 7 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。II 層)
- 8 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。II 層)
- 9 灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
- 10 黒褐色シルト (炭化物。焼土を少量含む。III 層)
- 11 褐色粘土質シルト (明黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 12 褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。III 層)
- 13・14 灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (III 層)
- 15 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 16 灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (III 層)
- 17 にぶい黄褐色粘土質シルト (明黄褐色粘土質シルトを含む。φ 2cm 以下の礫をやや多量含む。III 層)
- 18 褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。φ 20cm 以下の礫を少量含む。III 層)
- 19 にぶい黄褐色粘土質シルト (炭化物を少量含む。φ 5cm 以下の礫をやや多量含む。III 層)
- 20 にぶい黄褐色シルト質粘土 (炭化物を少量含む。φ 5cm 以下の礫を少量含む。III 層)
- 21 褐色極細粒砂 (明黄褐色シルトを含む。φ 5cm 以下の礫を多量含む。III 層)
- 22 灰黄褐色粘土質シルトにぶい黄褐色砂質シルトの混合土 (III 層)
- 23 にぶい黄褐色シルト質粘土 (明黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。IV 層)
- 24 にぶい黄褐色粘土質シルト (IV 層)
- 25 黒褐色粘土質シルト (SD01)
- 26 黒褐色粘土質シルト (SP138)
- 27 明黄褐色粘土質シルト (基盤層。V 層)

II b区 南壁土層注記

- | |
|-------------------|
| I 層: 碎石・盛土・攪乱 |
| II 層: 近代の造成土 |
| III 層: 近世の整地土 |
| IV 層: 中世～戦国の自然堆積土 |
| V 層: 基盤層 |

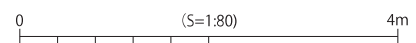


Fig.31 II a・II b 区 壁面図 (1)

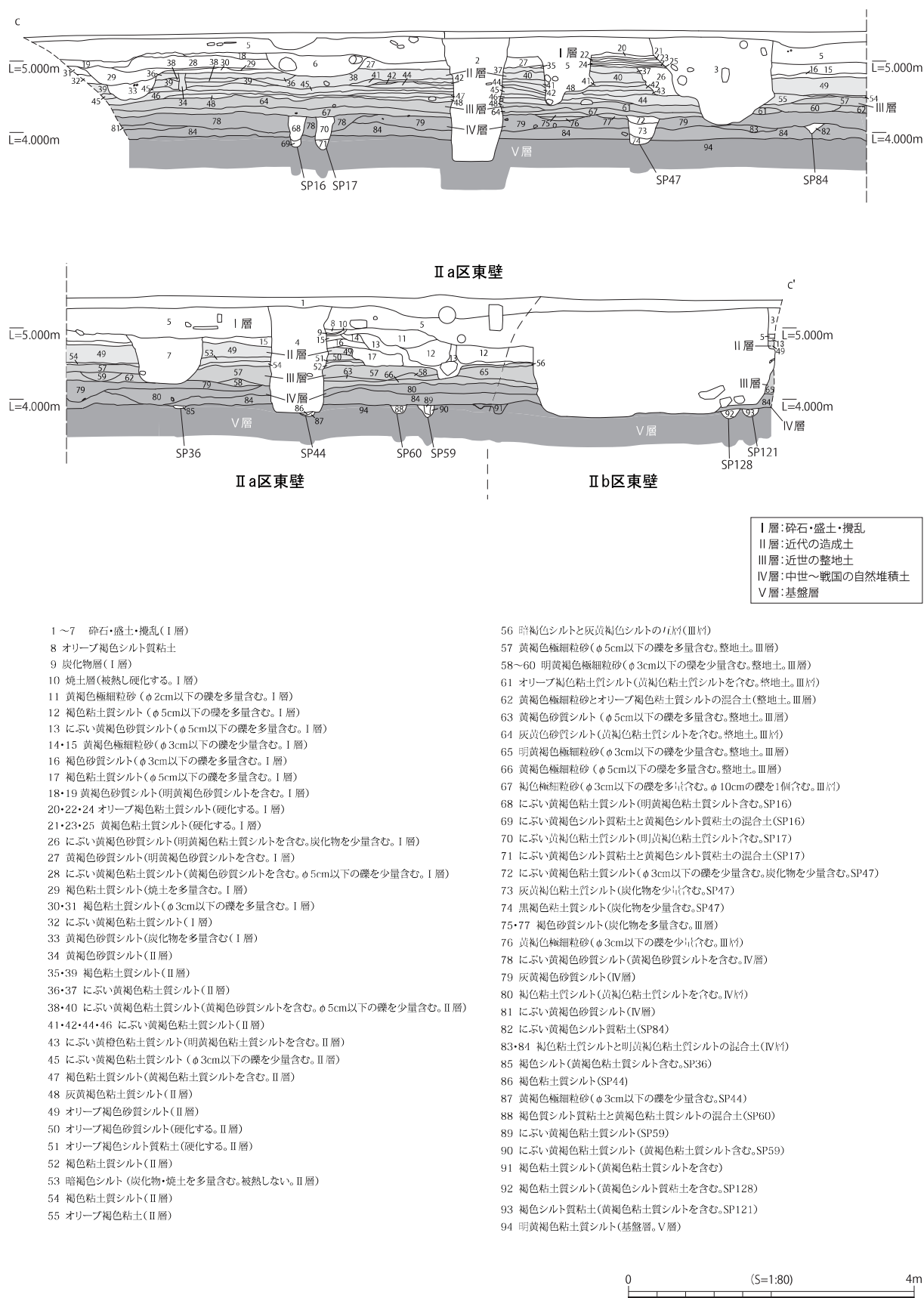


Fig.32 II a · II b 区 壁面図 (2)

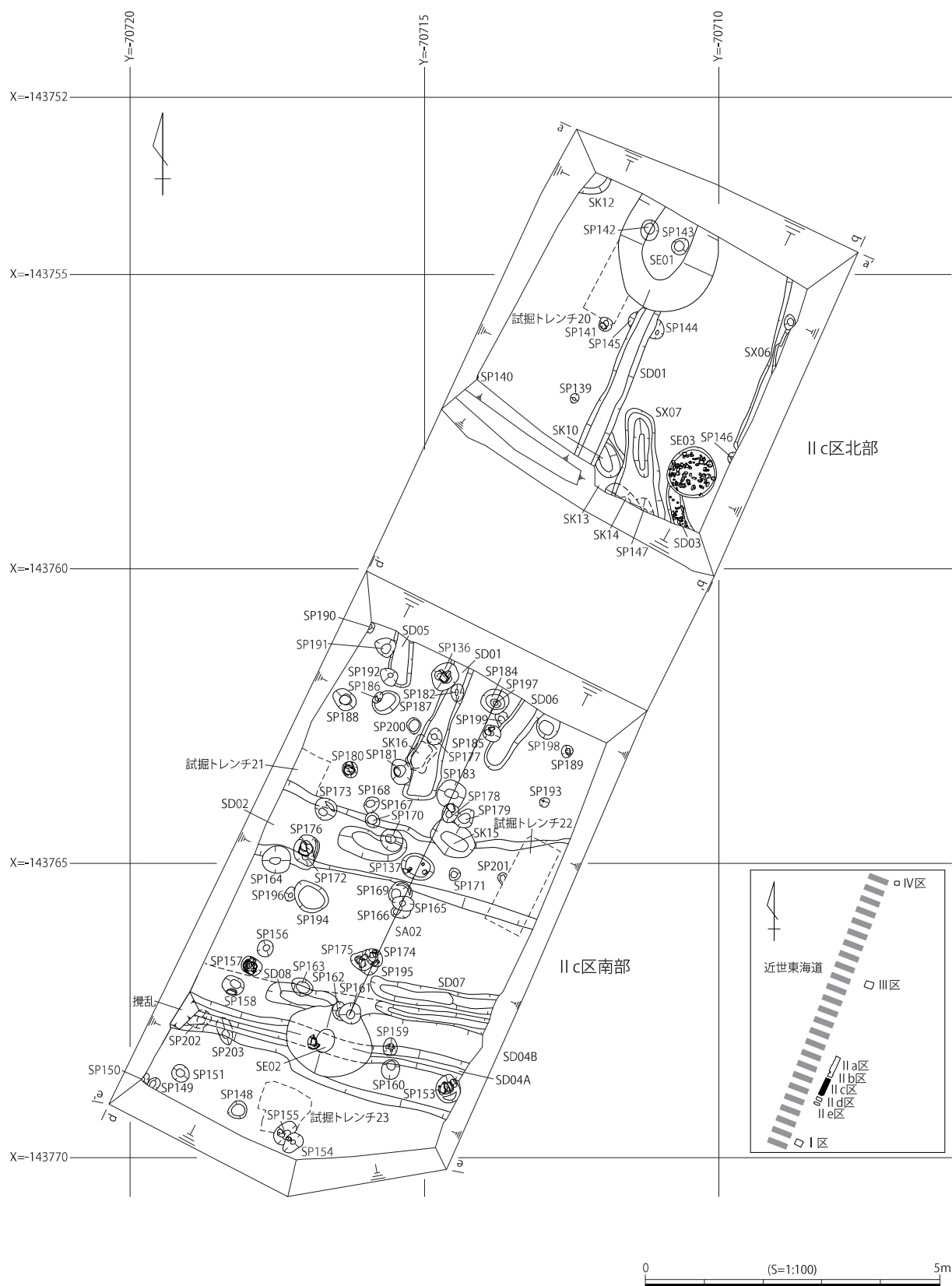
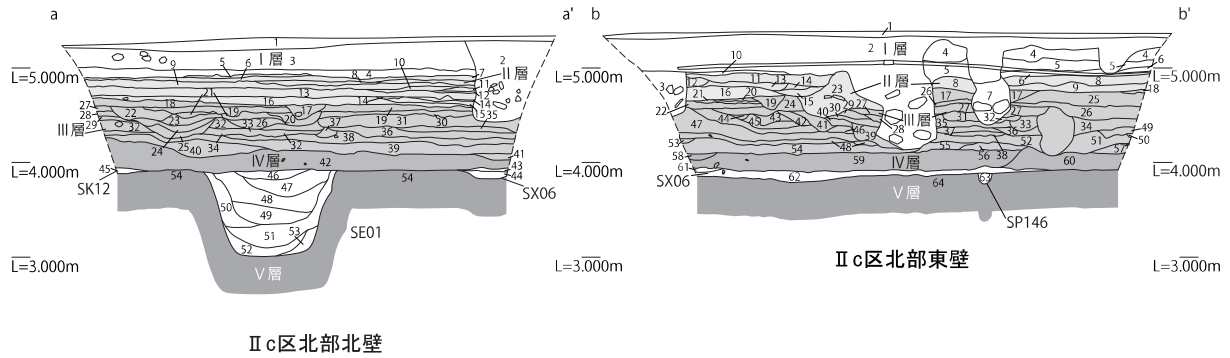


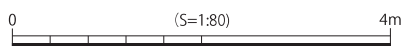
Fig.33 II c 区 遺構全体図



- Ⅰ～Ⅲ 砕石・盛土・攪乱(Ⅰ層)
 4 灰黄褐色砂質シルトと明黄褐色砂質シルトの混合土(硬くしまる。Ⅰ層)
 5 炭化物層(Ⅱ層)
 6 褐色砂質シルト(炭化物を多量含む。Ⅱ層)
 7 灰黄褐色砂質シルト(Ⅱ層)
 8 黄褐色砂質シルト(焼土を多量含む。Ⅱ層)
 9 褐色粘土質シルト(炭化物・焼土を少量含む。Ⅱ層)
 10・12 灰黄褐色粘土質シルト(Ⅱ層)
 11 明黄褐色粘土質シルト(褐色粘土質シルトを含む。Ⅱ層)
 13 黄褐色粘土質シルト(Ⅱ層)
 14 黄褐色粘土質シルト(褐色粘土質シルトを含む。Ⅱ層)
 15 黄褐色砂質シルト(Ⅱ層)
 16 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅱ層)
 17 にぶい黄褐色砂質シルト(φ 5cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 18・29・41 にぶい黄褐色粘土質シルト(Ⅲ層)
 19 褐色砂質シルト(黄褐色砂質シルトを含む。Ⅲ層)
 20 褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土(Ⅲ層)
 21 明黄褐色砂質シルト(焼土を少量含む。Ⅲ層)
 22 にぶい黄褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土(Ⅲ層)
 23 炭化物・焼土層(Ⅲ層)
 24 褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。Ⅲ層)
 25 褐色砂質シルト(炭化物・焼土を少量含む。Ⅲ層)
 26 黄褐色粘土質シルト(炭化物・焼土を多量含む。Ⅲ層)
 27 黄褐色砂質シルト(Ⅲ層)
 28 褐色シルト質粘土(Ⅲ層)
 30 暗褐色粘土質シルト(黄褐色砂質シルトを含む。炭化物・焼土を少量含む。Ⅲ層)
 31 黄褐色砂質シルト(Ⅲ層)
 32・36 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 33 明黄褐色極細粒砂(Ⅲ層)
 34 褐色砂質シルト(炭化物を少量含む。Ⅲ層)
 35 褐色砂質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅲ層)
 37 褐色砂質シルト(Ⅲ層)
 38 にぶい黄褐色砂質シルト(炭化物を少量含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 39 黄褐色中粒砂(φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 40 にぶい黄褐色粘土質シルト(炭化物をやや多量含む。φ 5cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 42 にぶい黄褐色砂質シルト(炭化物を少量含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅳ層)
 43 黄褐色粘土質シルト(SX06)
 44 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。SX06)
 45 褐色砂質シルト(SK12)
 46・48 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。SE01)
 47 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。SE01)
 49 暗褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。SE01)
 50 黒褐色粘土質シルト(SE01)
 51 灰黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。SE01)
 52 にぶい黄褐色シルト質粘土(SE01)
 53 黒褐色シルト質粘土(SE01)
 54 黄褐色粘土質シルト(φ 5cm以下の礫を多量含む。基盤層。Ⅴ層)

Ⅱ c区 北部北壁土層注記

- Ⅰ層：砕石・盛土・攪乱
 Ⅱ層：近代の造成土
 Ⅲ層：近世の整地土
 Ⅳ層：中世～戦国の自然堆積土
 Ⅴ層：基盤層



- Ⅰ～Ⅲ 砕石・盛土・攪乱(Ⅰ層)
 4 明黄褐色中粒砂(Ⅰ層)
 5 にぶい黄褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土(Ⅰ層)
 6 灰黄褐色砂質シルトと明黄褐色砂質シルトの混合土(Ⅰ層)
 7 攪乱(φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅰ層)
 8 明黄褐色粘土質シルト(φ 3cm以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
 9 褐色砂質シルト(φ 3cm以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
 10 灰黄褐色砂質シルト(黄褐色砂質シルトを含む。硬くしまる。Ⅱ層)
 11 褐色粘土質シルト(炭化物・焼土を多量含む。φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅱ層)
 12 褐色砂質シルト(炭化物を多量含む。Ⅱ層)
 13 黄褐色極細粒砂(Ⅱ層)
 14 褐色粘土質シルト(炭化物・焼土を少量含む。Ⅱ層)
 15 黄褐色中粒砂(φ 5cm以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
 16 にぶい黄褐色粘土質シルト(炭化物・焼土をやや多量含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅱ層)
 17・18 黄褐色砂質シルト(褐色粘土質シルトを含む。Ⅲ層)
 19 にぶい黄褐色砂質シルト(炭化物・焼土を少量含む。瓦を少量含む。Ⅲ層)
 20 黄褐色極細粒砂(Ⅲ層)
 21・36 灰黄褐色粘土質シルト(Ⅲ層)
 22・44 にぶい黄褐色シルト質粘土(Ⅲ層)
 23 攪乱(炭化物を少量含む。φ 10cm以下の礫を少量含む。瓦を多量含む。Ⅲ層)
 24 褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を少量含む。Ⅲ層)
 25 灰黄褐色粘土質シルト(φ 5cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 26 炭化物・焼土層(Ⅲ層)
 27 褐色粘土質シルト(φ 10cmの礫を1個含む。Ⅲ層)
 28 黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅲ層)
 29・32 褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅲ層)
 30 褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土(炭化物を多量含む。Ⅲ層)
 31 褐色粘土質シルトと黄褐色極細粒砂の混合土(Ⅲ層)
 33 黄褐色中粒砂(φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 34 褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトの混合土(Ⅲ層)
 35 にぶい黄褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。Ⅲ層)
 37 にぶい黄褐色砂質シルト(φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 38 褐色粘土質シルト(焼土を多量含む。Ⅲ層)
 39・42 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。Ⅲ層)
 40 褐色粘土質シルト(Ⅲ層)
 41 褐色砂質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。炭化物を多量含む。Ⅲ層)
 43 にぶい黄褐色シルト質粘土(炭化物・焼土を少量含む。Ⅲ層)
 45 褐色粘土質シルト(炭化物・焼土を少量含む。Ⅲ層)
 46 灰黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。Ⅲ層)
 47 黄褐色砂質シルト(Ⅲ層)
 48 黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 49 灰黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 50 褐色粘土質シルトと黄褐色極細粒砂の混合土(Ⅲ層)
 51 にぶい黄褐色粘土質シルト(φ 10cm以下の礫を多量含む。Ⅲ層)
 52 灰黄褐色粘土質シルト(φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 53 にぶい黄褐色砂質シルト(炭化物を少量含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 54・56 黄褐色中粒砂(φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 55 灰黄褐色砂質シルト(黄褐色砂質シルトを含む。硬くしまる。Ⅲ層)
 57 褐色砂質シルト(φ 10cm以下の礫を少量含む。Ⅲ層)
 58 にぶい黄褐色粘土質シルト(Ⅳ層)
 59 にぶい黄褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。φ 5cm以下の礫を少量含む。Ⅳ層)
 60 褐色粘土質シルト(炭化物を少量含む。φ 2cm以下の礫を少量含む。Ⅳ層)
 61 黄褐色粘土質シルト(SX06)
 62 にぶい黄褐色粘土質シルト(黄褐色粘土質シルトを含む。SX06)
 63 暗褐色粘土質シルト(SP146)
 64 黄褐色粘土質シルト(φ 5cm以下の礫を多量含む。基盤層。Ⅴ層)

Ⅱ c区 北部東壁土層注記

Fig.34 Ⅱ c区北部壁面図



Fig.35 IIc 区南部 西壁面図



Fig.36 IIc 区南部 南壁面図

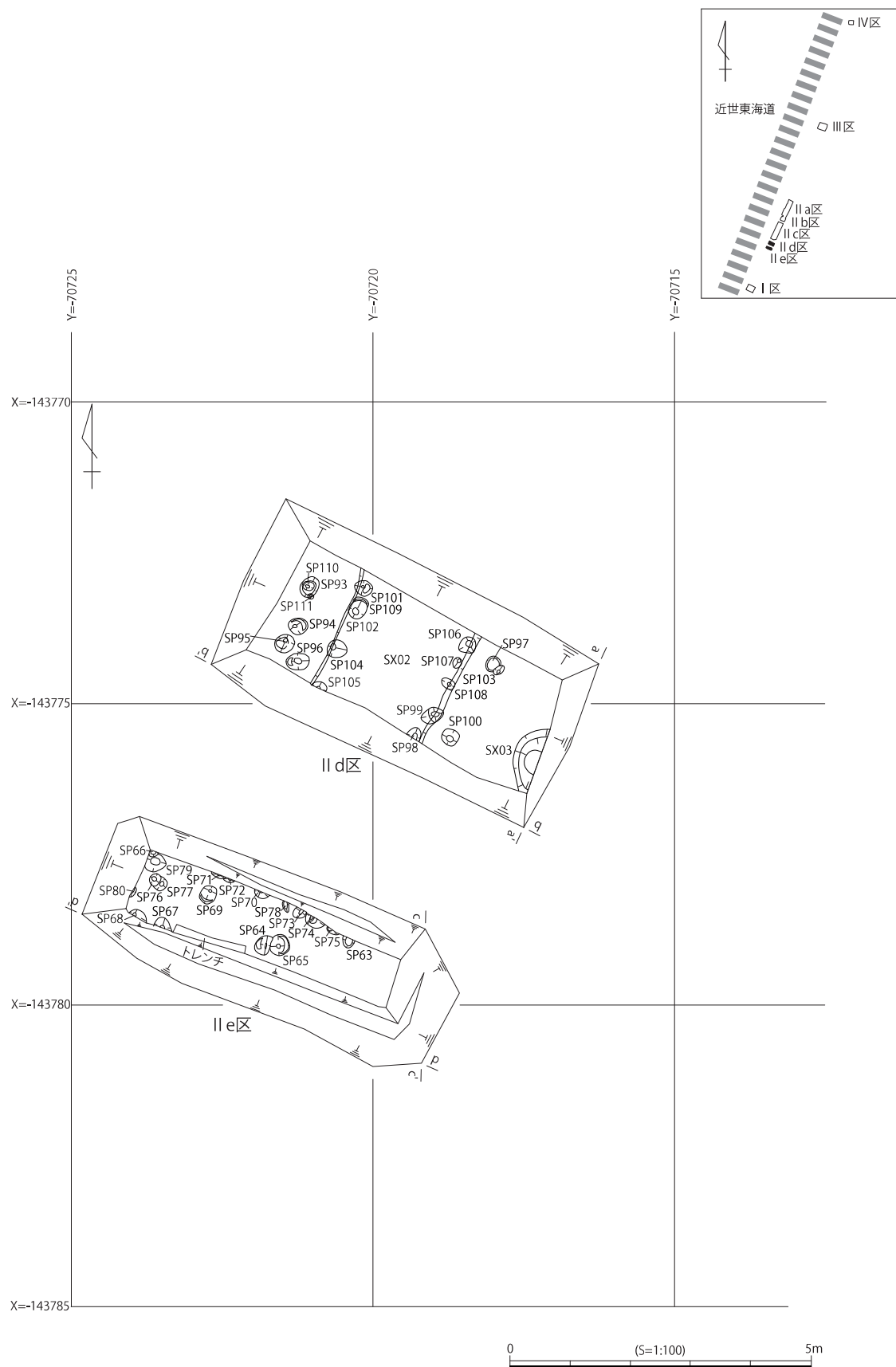
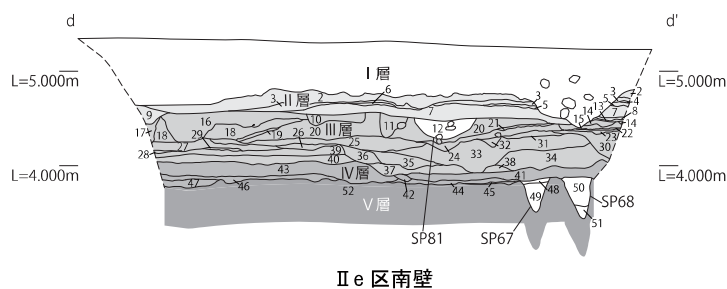


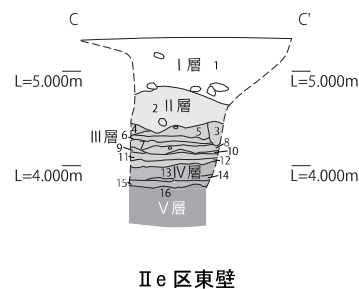
Fig.37 II d・II e 区 遺構全体図



Fig.38 II d 区 壁面図



II e 区南壁



II e 区東壁

- 1 盛土・碎石・盛土 (I 層)
- 2 にぶい黄褐色粘土質シルト (φ 3cm以下の礫を少量含む。硬化する。II 層)
- 3 にぶい黄褐色粘土質シルト (硬化する。II 層)
- 4 褐色粘土質シルト (硬化する。II 層)
- 5・6 褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。硬化する。II 層)
- 7 にぶい黄褐色粘土質シルトと褐色粘土質シルトの混合土 (II 層)
- 8 黄褐色粘土質シルト (II 層)
- 9 褐色砂質シルト (硬化する。II 層)
- 10・11 にぶい黄褐色粘土質シルト (III 層)
- 12 にぶい黄褐色粘土質シルト (瓦・土器多量含む。SP81)
- 13・22 炭化物層 (III 層)
- 14 灰黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。焼土を少量含む。硬化する。III 層)
- 15・23 褐色砂質シルト (焼土層。III 層)
- 16 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色砂質シルトを含む。III 層)
- 17 褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (φ 3cm以下の礫を多量含む。炭化物・焼土を少量含む。III 層)
- 18 黄褐色極細粒砂～中粒砂 (φ 3cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 19 にぶい黄褐色粘土質シルト (III 層)
- 20 黄褐色極細粒砂～中粒砂 (φ 3cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 21 灰黄褐色粘土質シルト (III 層)
- 24 黄褐色粘土質シルトとにぶい黄褐色粘土質シルトの混合土 (III 層)
- 25 にぶい黄褐色粘土質シルト (φ 3cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 26・36 灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (III 層)
- 27 暗褐色粘土質シルト (III 層)
- 28 黄褐色極細粒砂 (φ 5cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 29 暗褐色粘土質シルト (炭化物を多量含む。III 層)
- 30 にぶい黄褐色砂質シルト (III 層)
- 31・40 にぶい黄褐色粘土質シルト (III 層)
- 32 にぶい黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (III 層)
- 33 黄褐色極細粒砂 (III 層)
- 34 黄褐色極細粒砂 (III 層)
- 35 灰黄褐色シルト質粘土
- 37 灰黄褐色シルト質粘土 (黄褐色極細粒砂を含む。III 層)
- 38 明黄褐色極細粒砂 (III 層)
- 39 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 41 灰黄褐色粘土質シルト (IV 層)
- 42 明黄褐色極細粒砂 (IV 層)
- 43 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。IV 層)
- 44 鉄分の沈着層 (IV 層)
- 45 にぶい黄褐色砂質シルト (IV-2 層)
- 47 褐色粘土質シルト (黄褐色シルトを含む。IV-2 層)
- 48 にぶい黄褐色粘土質シルト (SP67)
- 49 灰黄褐色粘土質シルト (SP67)
- 50 にぶい黄褐色粘土質シルト (SP68)
- 51 灰黄褐色粘土質シルト (SP68)
- 52 黄褐色粘土質シルト (φ 5cm以下の礫をやや多量含む。基盤層。V 層)

- 1 盛土・碎石・攪乱 (I 層)
- 2 褐色砂質シルト (硬化する。II 層)
- 3 褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトの混合土 (φ 3cm以下の礫を多量含む。炭化物・焼土を少量含む。III 層)
- 4 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 5 黄褐色粘土質シルト (φ 3cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 6 黄褐色極細粒砂 (φ 5cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 7 暗褐色粘土質シルト (III 層)
- 8 暗褐色粘土質シルト (III 層)
- 9 黄褐色極細粒砂 (φ 5cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 10 黄褐色極細粒砂 (φ 5cm以下の礫を多量含む。III 層)
- 11 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。III 層)
- 12 にぶい黄褐色粘土質シルト (III 層)
- 13 にぶい黄褐色粘土質シルト (黄褐色粘土質シルトを含む。IV 層)
- 14 にぶい黄褐色粘土質シルト (IV-2 層)
- 15 褐色粘土質シルト (黄褐色シルトを含む。IV-2 層)
- 16 黄褐色粘土質シルト (φ 5cm以下の礫をやや多量含む。基盤層。V 層)

II e 区東壁土層注記

I 層：碎石・盛土・攪乱
II 層：近代の造成土
III 層：近世の整地土
IV 層：中世～戦国の自然堆積土
V 層：基盤層

II e 区南壁土層注記

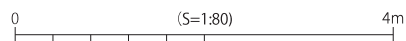


Fig.39 II e 区 壁面図

0.30 ～ 0.49 m、深さが 0.02 ～ 0.09 m を測る。遺構底面の高さは最も北側で 3.83 m、Ⅱ b 区南端部で 3.80 m、SE01 と接する位置では 3.79 m、Ⅱ c 区北部の南端部で 3.83 m となる。おおむね平坦であるが、SE01 付近がやや低くなる。遺構から年代の判明する出土していないため、詳細な遺構の年代は明らかではない。

SD01 はいくつかの遺構と切り合い関係にあり、Ⅱ b 区では後述する方形土坑 SK09 を切り、Ⅱ c 区北部では井戸 SE01 に切られる。Ⅱ c 区南部では SP136 に切られる。SK09 は 13 世紀代の山茶碗が出土しており、遺構の上限は 13 世紀代と考えられる。また SP136 からは江戸時代の常滑産の甕が出土しており、遺構の下限年代は江戸時代になる。一方井戸 SE01 との関係は、先述のとおり SE01 に切られるが、同時に機能していた遺構である可能性も考えられる。

SD02 (Fig. 41) Ⅱ c 区南部のほぼ中央部で検出した東西方向に走行をもつ溝である。Ⅳ層下面から掘り込まれる遺構で、調査区を東西に貫通し、主軸は W-15°-N でやや南に振れをもつ。遺構の中央部がややくびれるが、基本的には直線的になると考えられる。遺構の断面形は浅い皿状で、中央部付近が低くなるが全体に広がるというものではないため、このくぼみは先行する別遺構の可能性も考えられる。

遺構の規模は幅が 1.38 ～ 1.67 m、深さが 0.05 ～ 0.10 m を測る。遺構底面はおおむね平坦となり、中央部のくぼみを同一遺構とした場合の深さは 0.13 m を測る。遺構は多くの小穴と切り合い関係にあり、江戸中期の瀬戸美濃の鉢が出土した SP137 に切られる。溝からは年代の判明する遺物が出土しなかったため、詳細な年代は不明であるが、後述する SD04 とほぼ平行な位置関係にあることなどから 13 世紀代にまで遡る可能性も考えられる。

SD04・SD07・SD08 (Fig. 41) SD04 はⅡ c 区南部の南寄りで検出した溝で、Ⅳ層下面から掘り込まれる。調査の段階ではこれらの溝を同一遺構と認識していたが、再度検討を加えた結果、複数の溝が重複する可能性が高いものと考えられる。この溝に対して北に接する SD07・SD08 は、SD04 に伴うかあるいは前後関係にあると考えられる。SD04 は SD02 の南におよそ 2 m の位置にほぼ平行しており、調査区を東西に貫通する。遺構は初期段階には断面 U 字形を呈する幅 0.22 ～ 0.33 m の細い溝 (SD04A) が存在しており、それらが埋没した後に SD04A の溝を一部踏襲あるいは再掘削するかたちで、幅広の浅い溝 SD04B が掘削されたものと考えられる。SD04B は北辺が一段浅くくぼんでおり、この部分はさらに別の溝の可能性もある。その北側に近接して SD07 が位置するが、これは調査区中央部付近で途切れている。SD07 は溝底に高低差が認められ、西端から東へ 1.4 m の位置で段を有する。SD08 は SD04B 北辺を西に延長した位置にあり、同一遺構の深い部分だけを検出した可能性も考えられる。

遺構の規模は先行する SD04A は幅が西側で 0.31 m、東側で 0.32 m、深さ 0.14 ～ 0.16 m、SD04B は幅が西側で 0.67 m、東側で 1.76 m、深さ 0.15 ～ 0.20 m を測る。SD04A の遺構底面は平坦である。

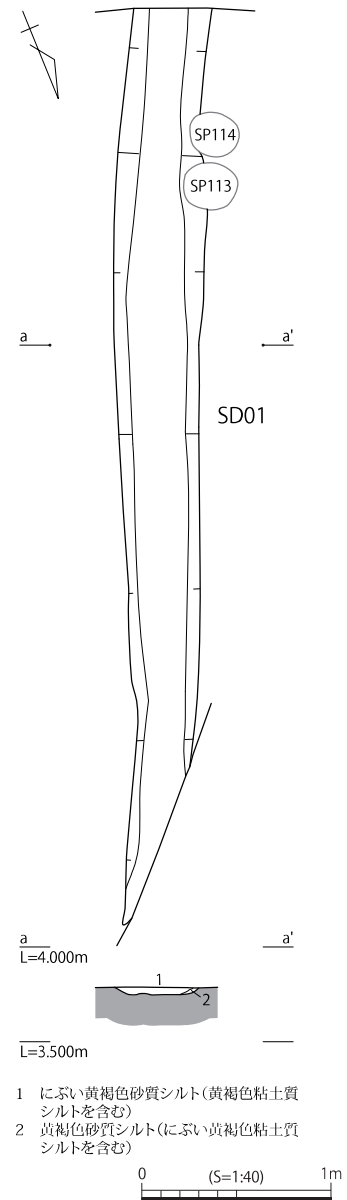


Fig. 40 Ⅱ b 区 SD01 遺構図

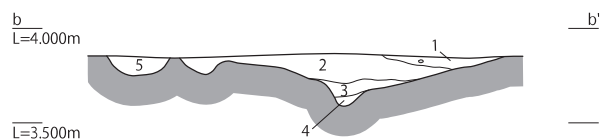
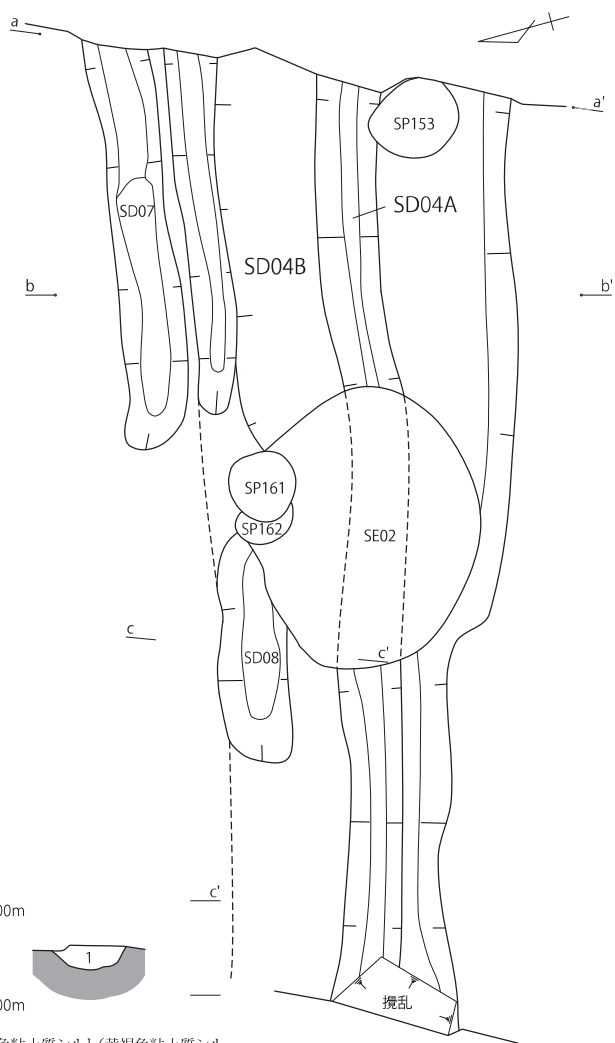
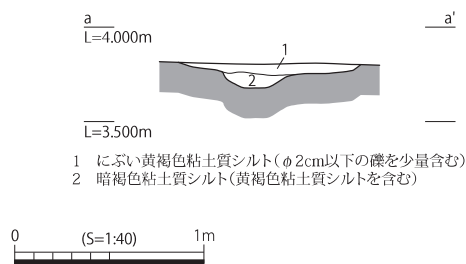
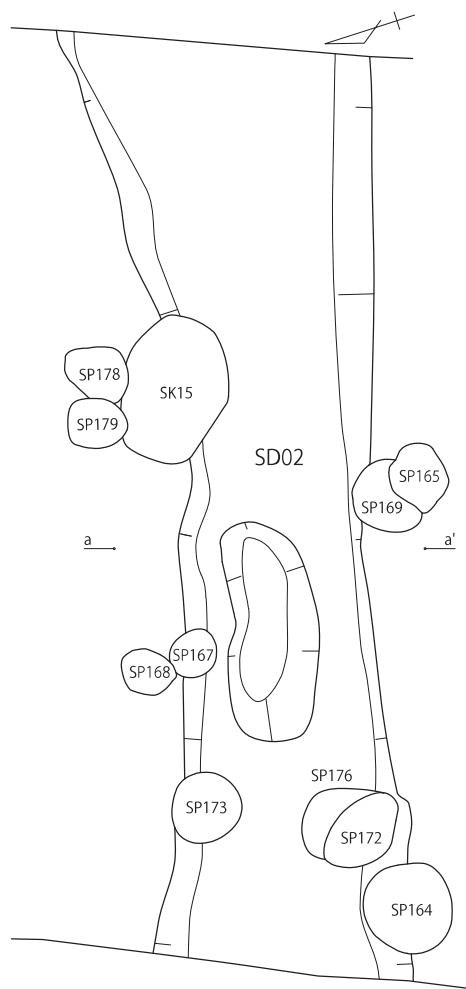


Fig.41 IIc 区南部 遺構図 (1)



Fig.42 II c 区南部西壁断面 地割境界



Fig.43 IIc 区南部東壁断面 地割境界

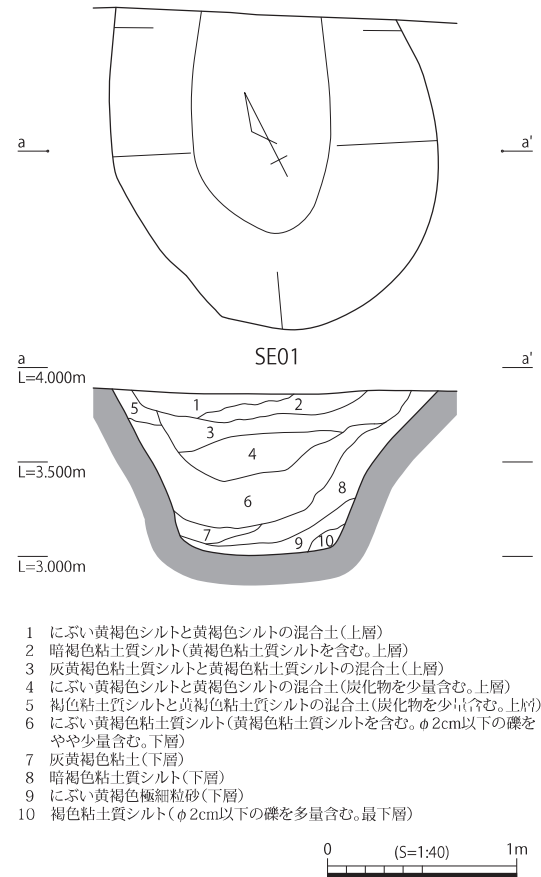


Fig.44 II c 区北部 SE01 遺構図

SD04B の遺構底面は基本的に平坦であるが、北辺部分は細かな凹凸があり、これは溝の掘削の際に使用された工具痕の可能性が考えられる。SD04B は溝幅が東西で大きく異なるが、西側が浅いことから、上面が削平を受けているため狭くなっている可能性が考えられる。

遺構は同一位置に繰り返し掘削されており、当初は幅狭であった溝が後になり拡幅させていったものと推定される。遺構からは戦国時代から江戸時代の遺物が認められず、SD04B から少量ながら山茶碗や渥美産甕などが出土しており、13 世紀代までに埋没したものと考えられる。

この遺構とは年代に大きな開きがあるため、直接的な関係は想定できないが、この位置においても II a 区でみられたような地割境界を示す堆積が認められた。Fig.42・43 の写真に示すように東西方向の溝状の掘り込みが認められ、II a 区の状況と同様、これを境として黄褐色礫混細粒砂層を用いた整地土と考えられる層が途切れる。このような現象がこの位置でみられたことは、13 世紀代に繰り返し掘削された溝が、埋没後は断絶するものの、近代においても地割境界が意識されていた可能性が考えられ、地割が踏襲された事例として興味深い。

ii) 井戸

SE01 (Fig. 44) II c 区北部の北壁際中央部で検出した素掘りの井戸である。IV 層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の平面形は南北に長い楕円形を呈するが、遺構の一部が北側調査区外に延びるため、厳密な形状や規模は不明である。遺構の断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。遺構の規模は東西 1.73 m、南北は 1.67 m 以上、深さは 0.83 m を測る。先述のとおり SD01 が南側に取り付く可能性もあり、その場合は SD01 が SE01 に対してやや傾斜することから、集水する機能を有していた可能性も考えられる。なお、遺構から湧水は認められなかった。

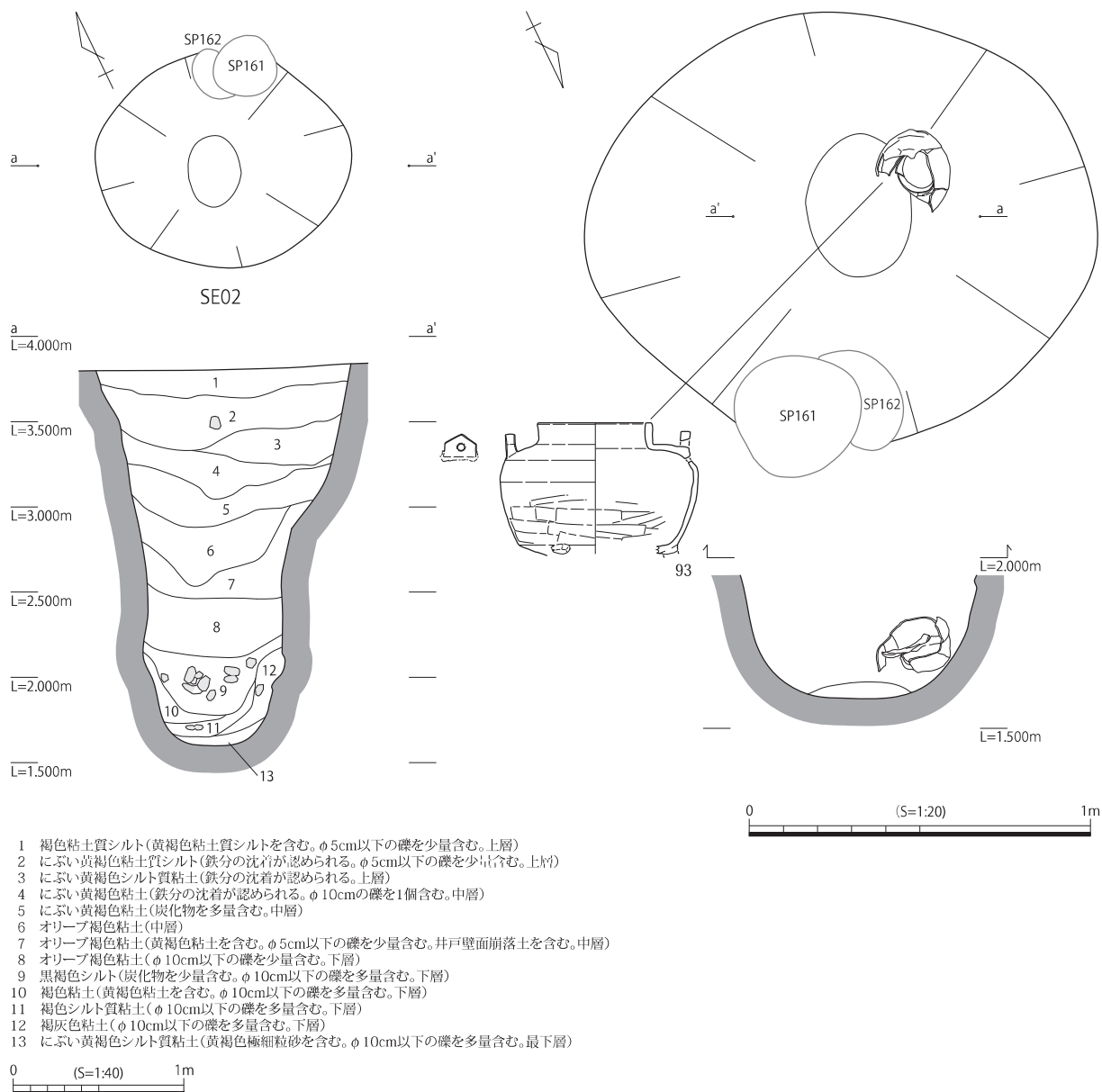


Fig.45 II c 区南部 SE02 遺構図

遺構埋土下層は均一な堆積で、遺構の肩部から流入していった状況を示しているが、ある程度埋没した後の堆積である上層は、基盤層である黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む層で、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺構からは小片ながら山茶碗の碗や、渥美産甕、砥石などが各層から少量出土しており、これらの遺物から 13 世紀代までには埋没したものと考えられる。

SE02 (Fig. 45) II c 区南部の南部中央で検出した素掘りの井戸である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の一部を小穴などに切られるが、調査区内で遺構全体を調査することができた。先述のようにSD04を切る。遺構は東西 1.48 m、南北 1.26 mを測り、ほぼ円形を呈する。今回の調査を通じて唯一遺構底まで調査できた井戸で、深さは 2.22 mを測る。遺構は逆台形の断面形を呈し、底面はほぼ平坦である。

遺構埋土は上～最下層にまで分層が可能で、最下層(13層)は井戸が機能していた段階の堆積である。下層(9～12層)はこぶし大礫を多量に含む粘土層で、遺構底面から 0.5 m上までこぶし大

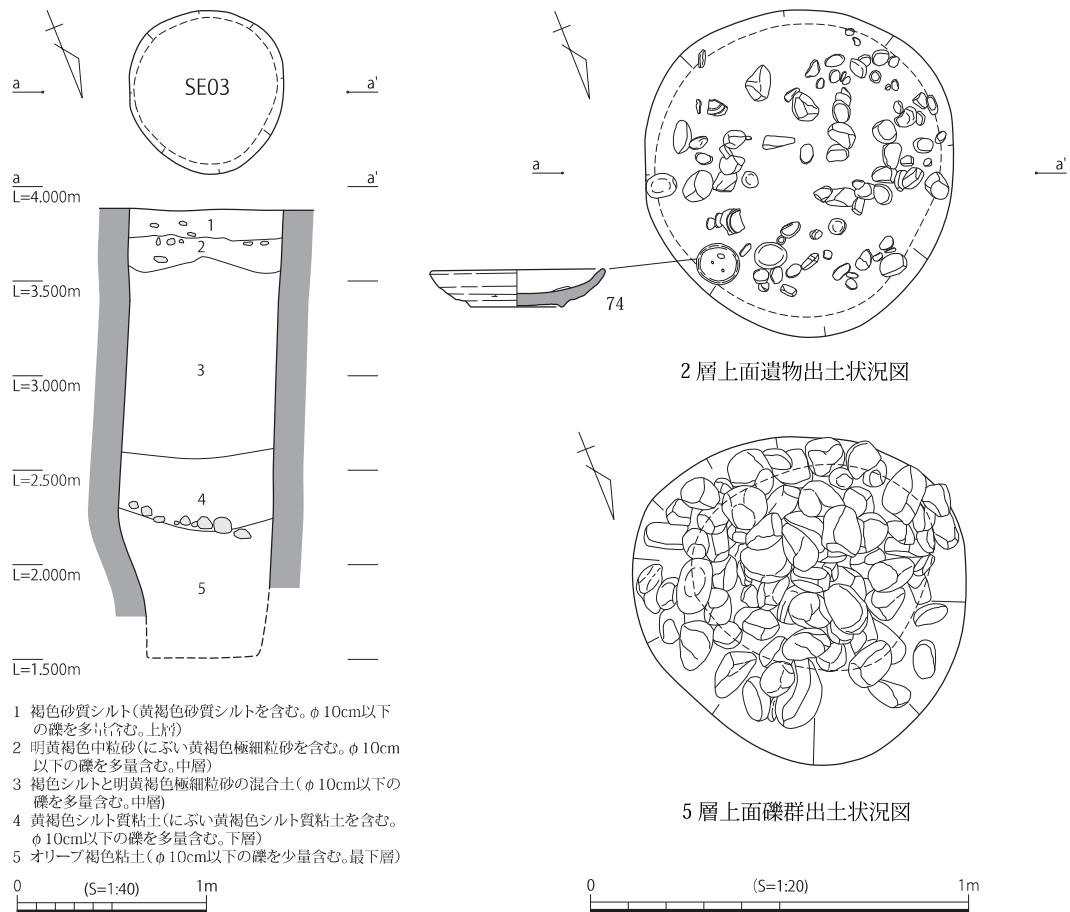


Fig.46 II c 区北部 SE03 遺構図

礫を充填するようである。その上部に堆積する層はやや小ぶりの礫を含む粘土層（8層）で、比較的均一な堆積が認められた。その上部の層は基盤層に起因する黄褐色粘土をやや含む粘土層（7層）のため、井戸壁面崩落土の可能性もある。その上に比較的均一な堆積が認められ（4～6層）、最終的には人為的に埋め戻された（1～3層）ものと考えられる。このように下層からこぶし大礫が多量に出土し、充填するような状況から、井戸の機能停止後に、礫を充填した可能性が考えられる。その後はある程度井戸として機能していた可能性、あるいは段階を分けて埋め戻している可能性も考えられる。さらに井戸壁面の一部が崩落しており、放置された後は粘土が厚く堆積することから、徐々に埋没していったものと推定される。埋土の上層は、黄褐色粘土質シルトがブロック状に含まれる層が認められるため、最終的には完全に埋め戻されたものと考えられる。

遺構からは各層より多くの遺物が出土している。図示したとおり、最下層からやや浮いた状態で17世紀前半と考えられる土師器の茶釜（93）が逆位置で出土した⁽¹⁾。また下層からは瀬戸美濃産の天目碗や初山産の大皿などが出土しており、これらの出土遺物は火窯3段階前半の年代が考えられ、16世紀後半から17世紀前半頃には井戸としての利用を終えたものと考えられる。

SE03 (Fig. 46) II c 区北部の南東隅で検出した井戸である。調査当初は円形土坑であると想定して調査を行ったが、掘り込みが垂直になることや、深さが通常の土坑よりも深くなったため、井戸であるという認識に至った。遺構の規模は東西 1.73 m、南北 1.70 m でほぼ正円を呈する。断面形は箱形を呈し、ほぼ垂直になる。

遺構埋土は大別して上～最下層に区分され、上層からは図示したとおり、こぶし大までの礫と破

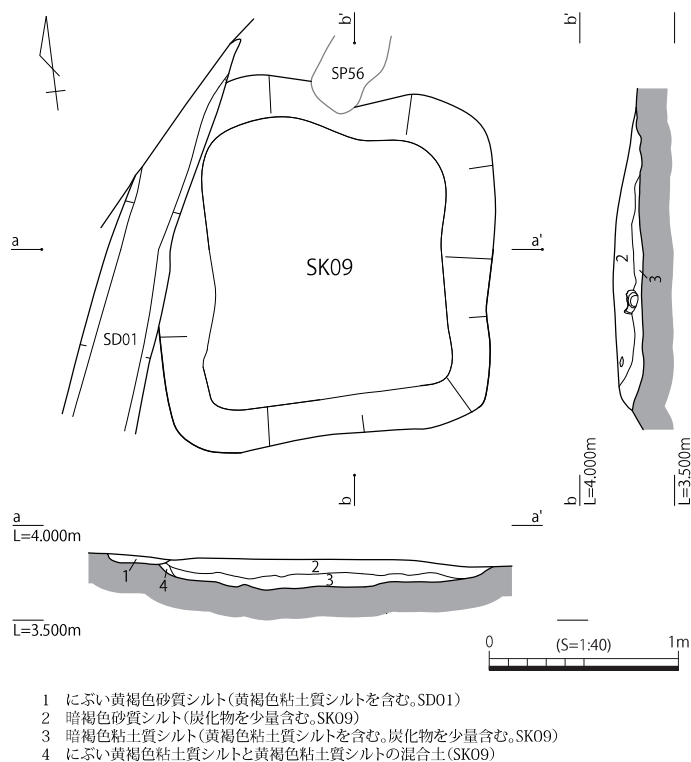


Fig.47 II b 区 SK09 遺構図

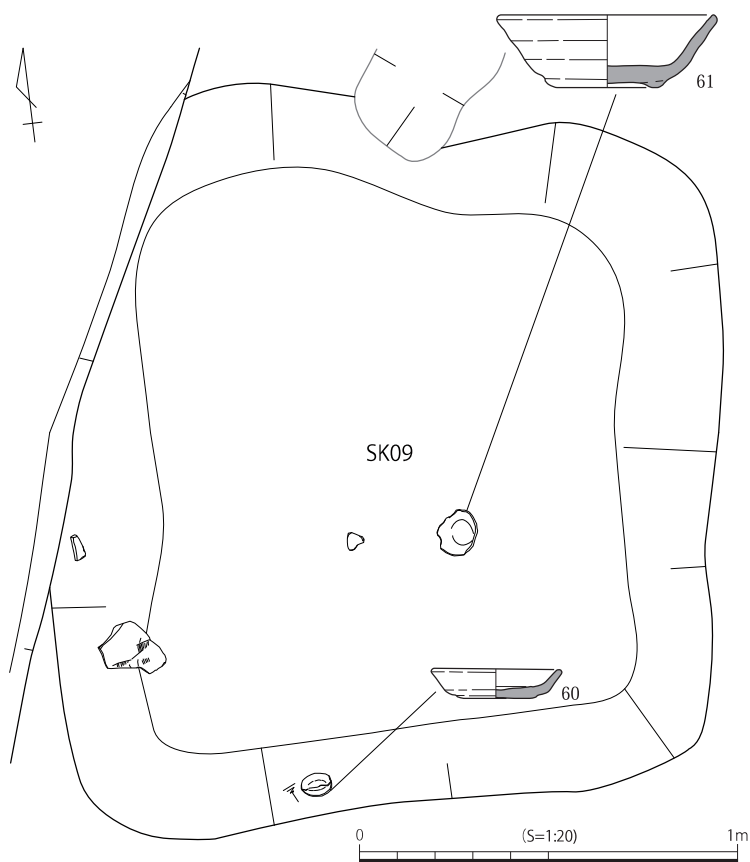


Fig.48 II b 区 SK09 遺物出土状況図

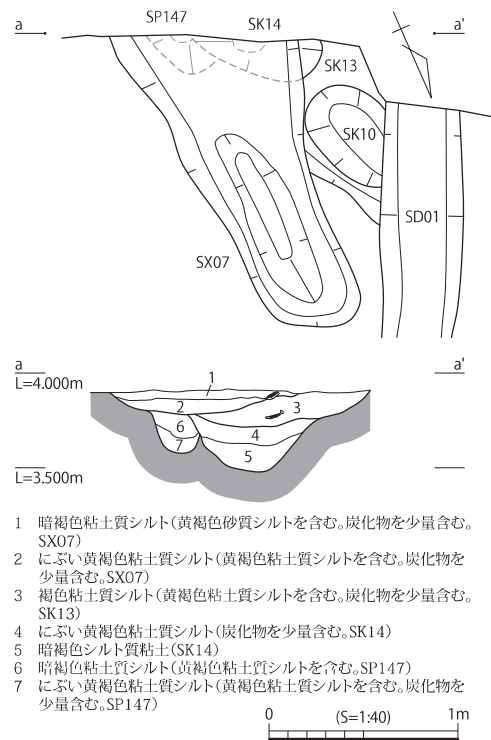


Fig.49 II c 区北部 遺構図 (1)

損した土器が出土した。中層は2層が明黄褐色中粒砂、3層が褐色シルトと明黄褐色極細粒砂の混合土が堆積し、こぶし大礫を多量に含む。出土遺物は非常に希薄であった。下層は4層の下部にこぶし大礫を充填する層を検出した。この層からも遺物がほとんど遺物が出土しなかった。この礫を除去すると粘土層(5層)が認められたが、調査範囲が狭くなったため安全を考慮し、遺構底面までの掘削を断念した。この面から下にピンポールで探ると、深さ2.35mの位置で硬化する面に達するため、一応この面を底面として認識した。なお5層から湧水は認められなかった。

遺構からは上層及び最下層から遺物が出土している。上層からは瀬戸美濃産や初山産の天目碗や、瀬戸美濃産の志野丸皿の完形品、最下層からは瀬戸美濃産の輪禿皿や播鉢、瀬戸美濃産の壺などが出土している。また最下層か

らは碗形滓も認められた。これらの出土遺物から、遺構の埋没は登窯第1段階第2小期17世紀前半の年代が考えられる。

iii) 土坑

SK09 (Fig. 47・48) II b 区北端部、II a 区との境界付近で検出した方形土坑である。IV層下面から掘り込まれる遺構で、遺構の規模は東西 1.77 m、南北 2.01 mを測り、隅丸方形を呈する。遺構の南側は近代以降に攪乱されている。また遺構の西側は先述の SD01 に、北側は SP56 に切られる。遺構の断面形は皿状を呈し、底面は平坦である。遺構埋土はレンズ状に堆積し、Fig.48 に示すように遺構の底面から遺物が密着して出土している。遺構の立ち上がりも竪穴建物のような立ち上がりを示さず、遺構の底面からは柱穴などの関連する遺構などは認められなかった。このため遺構の性格を明らかにすることができなかった。出土遺物は山茶碗の碗 (61) や小皿 (60)、渥美産の甕 (62) などが認められたことから、13 世紀代の年代が考えられる。

SK13・SK14・SP147・SX07 (Fig. 49) II c 区北部の南壁際で検出した遺構群である。土坑が 2 基と小穴が 1 基、不明遺構が 1 基切り合う。切り合い関係が非常に複雑で、SP147 → SK14 → SK13 → SX07 の順に埋没する。

SP147 は遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は不明であるが、円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。断面形は U 字形を呈するが、柱痕跡などは認められない。埋土から遺物が少量出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

SK14 も遺構の半分以上が調査区外にあるため、平面形は不明であるが、SP147 と同様円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が少量出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

SK13 は SK10 や SD01 にも切られており、遺構の形状は不明である。断面形は皿状を呈する。埋土から須恵器杯 H 身の細片や、墨書の認められる山茶碗小皿 (69) や、伊勢型鍋 (70) が出土している。このため SK13 は鎌倉時代以降の年代が考えられる。

SX07 は浅い溝状の平面形を呈するが、ほかの遺構と同様調査区外に延びる。遺構の南部で一段低くなるが、これは別遺構の可能性も考えられる。埋土から渥美産甕の破片が出土しているが、遺構の詳細な年代は不明である。

iv) 小穴

SP07・SP08 (Fig.50) SP07 は II a 区の北部で検出した小穴で SP08 を切る遺構である。遺構は 0.33 × 0.34 m の円形小穴で、断面形は U 字形を呈する。柱痕跡は認められなかったが、遺構の底面付近からこぶし大礫が 2 個認められ、柱の根固めである可能性が考えられる。断面観察からは柱は抜き取られた可能性が考えられる。2 個のこぶし大礫のうち一つは砥石 (55) であった。

SP08 は南北 0.23 m をはかる円形小穴で、遺構の東側を SP07 に切られる。このため残りが良くなかったが、遺構底面から碗形滓 (56) が出土した。SP07 やほかの遺構でも認められる根石のように、平坦面を上にして配置されていた。

ともに柱穴の可能性が考えられる遺構であり、建物を構成する可能性が想定されるが、調査区内で組み合う遺構は不明である。ほかに年代の判明する遺物が出土しなかったため、遺構の年代は不明である。

SP10 (Fig. 50) II a 区北部で検出した小穴で、SP08 の南西 1.6 m に位置する。平面形は不整形円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明である。

SP13・SP39 (Fig. 50) SP13 は、II a 区の北部で検出した小穴で SP39 を切る。SP07 の南 1.6 m に

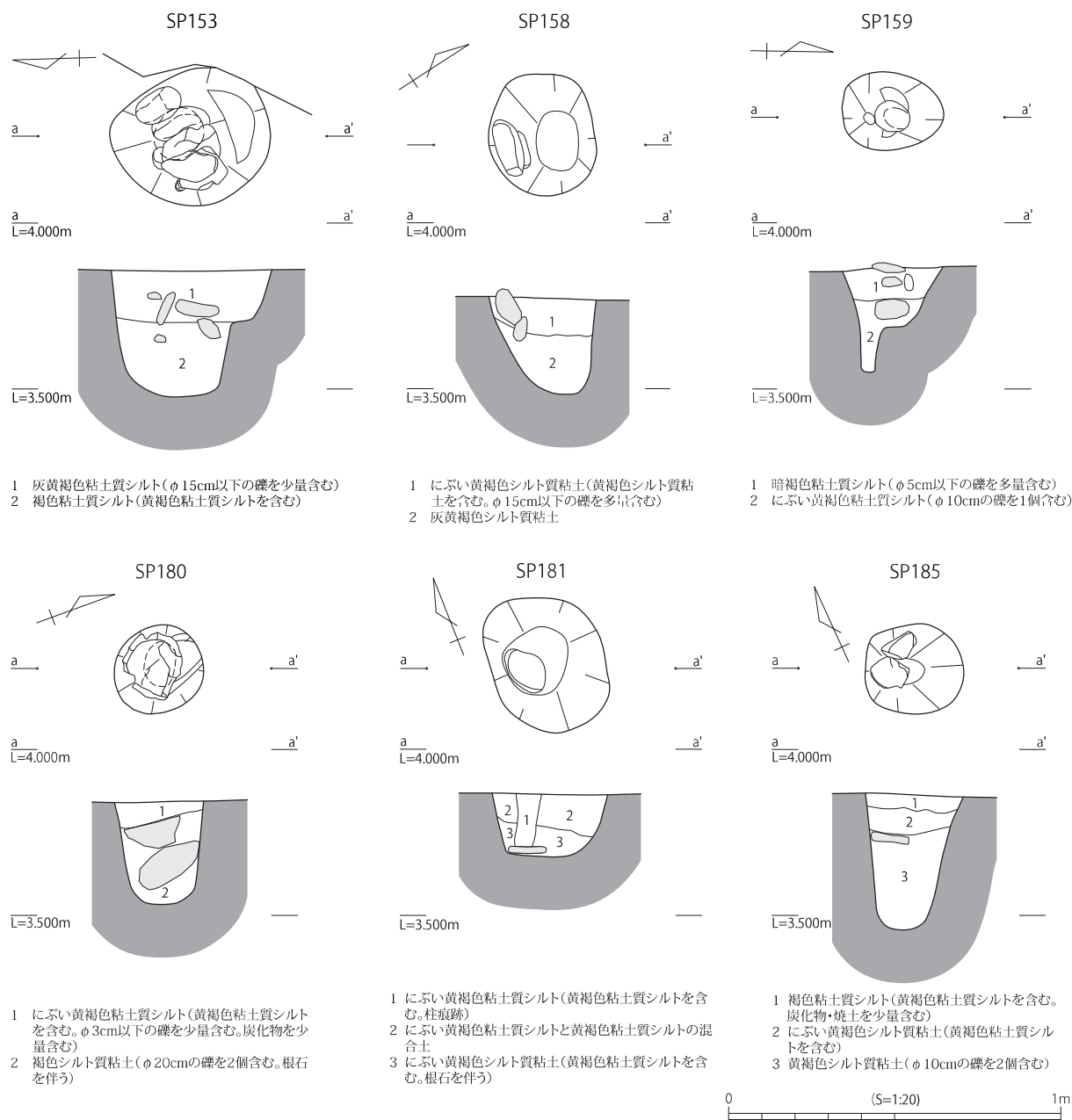


Fig.51 II c 区南部 遺構図(2)

位置する。遺構の平面形は円形を呈し、直径 3.0×2.8 m、深さ 0.18 m を測る。遺構の断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP39 は SP13 に切られる小穴で、平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土していないため、遺構の年代は不明である。

SP27・SP28 (Fig. 50) II a 区中央部北西寄りで検出した小穴で、SP27 が SP28 を切る。SP27 は平面形が不整円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。遺構の底面は平坦で、根石とみられる礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP45 (Fig. 50) II a 区南部で検出した小穴で、方形土坑 SK09 の北東 2 m に位置する。遺構の平面形は円形を呈し、 0.36×0.34 m を測る。遺構の断面形は U 字形を呈する。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP47 (Fig. 50) II a 区の中央部やや北寄りで検出した小穴で、遺構の約半分が調査できた。IV層

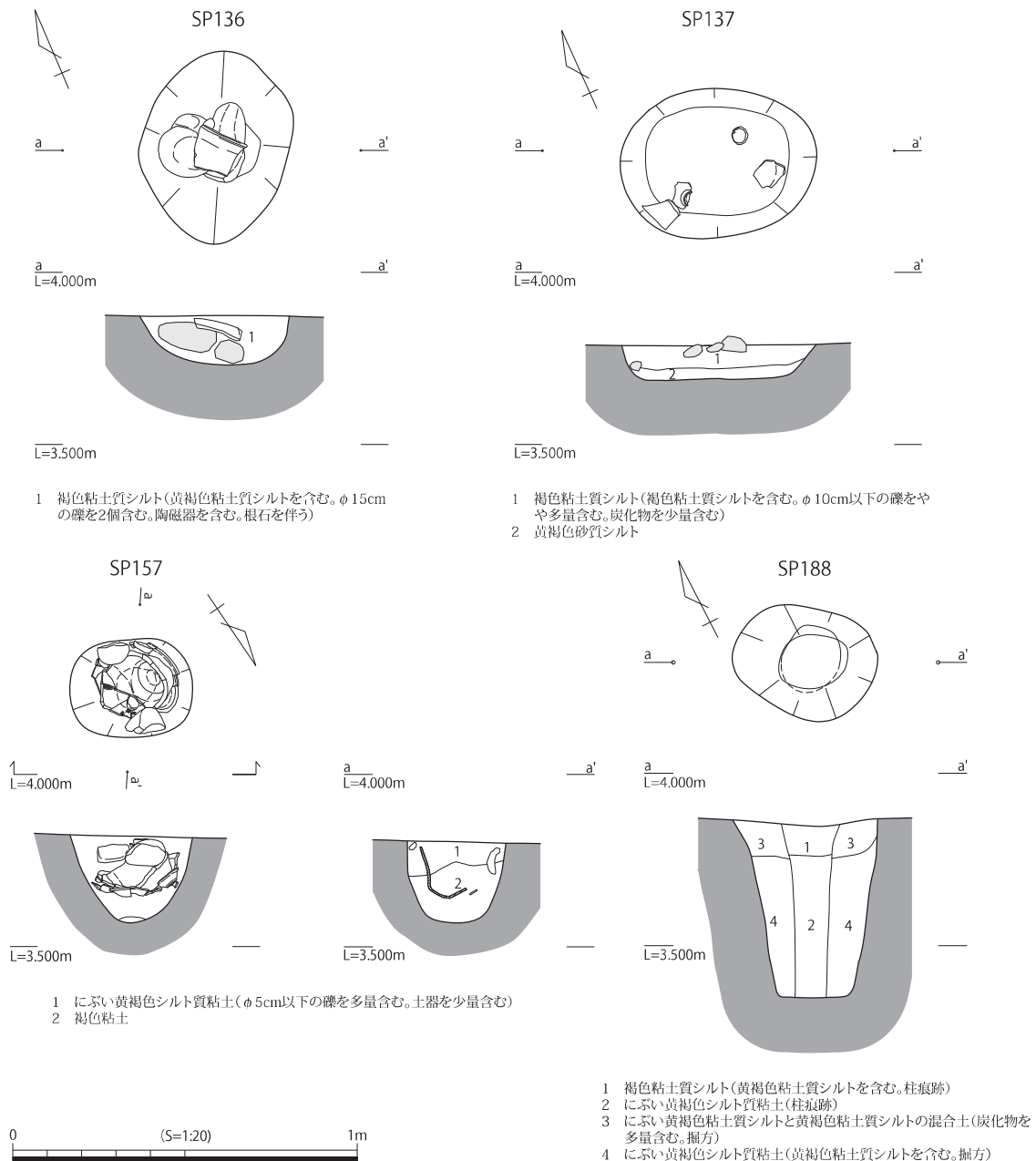


Fig.52 II c 区南部 遺構図 (3)

上面から掘り込まれる遺構で、平面形は円形を呈するものと考えられる。規模は南北 0.37 m、東西 0.12 m 以上、深さ 0.41 m を測り、遺構の断面形は U 字形を呈する。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明であるが、IV 層より掘り込まれており、戦国時代以降に属するものと考えられる。

SP51 (Fig. 50) II a 区の中央部西寄りで検出した小穴で残りが悪く、遺構の底面が残存する状況である。遺構の底面に根石とみられる上面が平坦な礫が認められた。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP65 (Fig. 53) II e 区の中央部で検出した小穴で、西側に SP64 と接するが切り合い関係は不明である。平面形は楕円形を呈し、遺構の東側に狭い段を有する。断面形は V 字形を呈する。遺構埋土にしまりがなく、湧水が認められた。遺構の厳密な掘り込み面は不明であるが、埋土は IV 層に類似する層がブロック状に認められたため、IV 層上面から掘り込まれた遺構であると推定される。埋土

から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP67 (Fig. 53) II e 区の南西部で検出した小穴で、全体の約半分が調査区外になる。IV層下面から掘り込まれる小穴で、平面形は楕円形を呈するものとみられ、断面形はV字形を呈する。埋土はSP65と同様しまりがなく、基盤層に起因する黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明である。

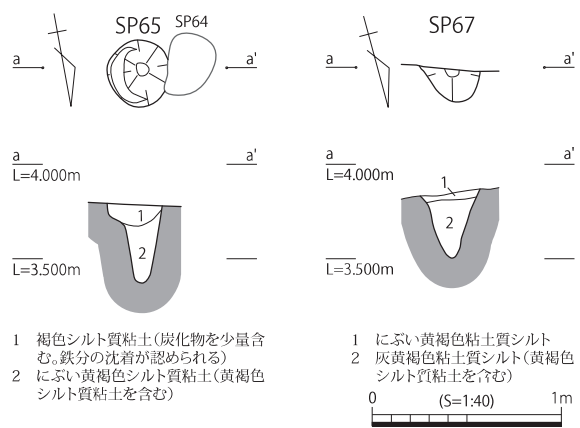


Fig.53 II e 区 遺構図

SP112 (Fig. 50) II b 区南西部で検出した小穴で、平面形は円形、断面形はU字形を呈する。遺構の規模は 0.30×0.28 m、深さ 0.24 m を測る。埋土の上層部から用途不明の石製品 (63) が出土した。ほかに年代の判明する遺物が出土していないため、詳細な年代は不明であるが、埋土の特徴はIV層に類似するため、IV層上面から掘り込まれたものと推定される。

SP115 (Fig. 50) II b 区南西部で検出した小穴で、東側の SP125 を切る。遺構の平面形は円形、断面形はU字形を呈し、遺構の規模は 0.38×0.37 m、深さ 0.19 m を測る。埋土の特徴はIV層に類似するが、基盤層に起因する黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。埋土から山茶碗が出土したが、小片であり遺構の詳細な年代は不明である。

SP126 (Fig. 50) II b 区南端部で検出した小穴で、遺構の西側を SP116 に、東側を SP117 に切られる。遺構の平面形は円形、断面形はU字形を呈する。遺構の規模は 0.32×0.26 m、深さ 0.30 m を測る。遺構から遺物が出土しなかったため遺構の年代は不明である。

SP136 (Fig. 52) II c 区南部の北部壁際中央部で検出した小穴である。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。小穴の中央部に 10 ~ 20cm 大の礫を置き、その上に常滑産の甕 (108) が外面を上にして認められた。削平を受けているため残りが悪く、断面観察から柱痕跡は認められなかったが、柱の根固めとして土器を転用した可能性が考えられる。出土した常滑産の甕から、12 型式江戸時代前期の年代が考えられる。

SP137 (Fig. 52) II c 区南部の中央部やや北寄り、SD02 のほぼ中央部で検出した小穴で、SD02 を切る。平面形は楕円形、断面形は南側に狭い段をもち、U字形を呈する。遺構底面は平坦で、こぶし大礫とともにやや浮いた状態で、陶磁器の破片が出土した。これらの出土状況から廃棄されたものと考えられ、美濃産の鉢 (94) や肥前産磁器の碗 (95) などから江戸時代中期ごろの年代が考えられる。

SP153 (Fig. 51) II c 区南部の南東部東壁際で検出した小穴で SD04 を切る。遺構の平面形は楕円形、断面形はU字形を呈し南側に段をもつ。遺構の底面はほぼ平坦で、中央部にやや浮いた状態で 10 ~ 20cm 大の礫を 2 段に重ねて並べる状況が認められた。断面観察からは、礫の上面が遺構の南側の狭い段の上面に一致するため、段の上面まで一旦土を入れ平坦面をつくり、この段に揃えるように礫を配置した可能性が高い。断面観察から柱痕跡は認められなかったが、礫の上面はおおむね平坦であり、根石の可能性が考えられる。SD04 を切ることから、遺構の年代は鎌倉時代以降と考えられる。輸入陶磁器の青磁碗小片 (101) が 1 点出土しているが、ほかに出土遺物がないため詳細な年代は不明である。

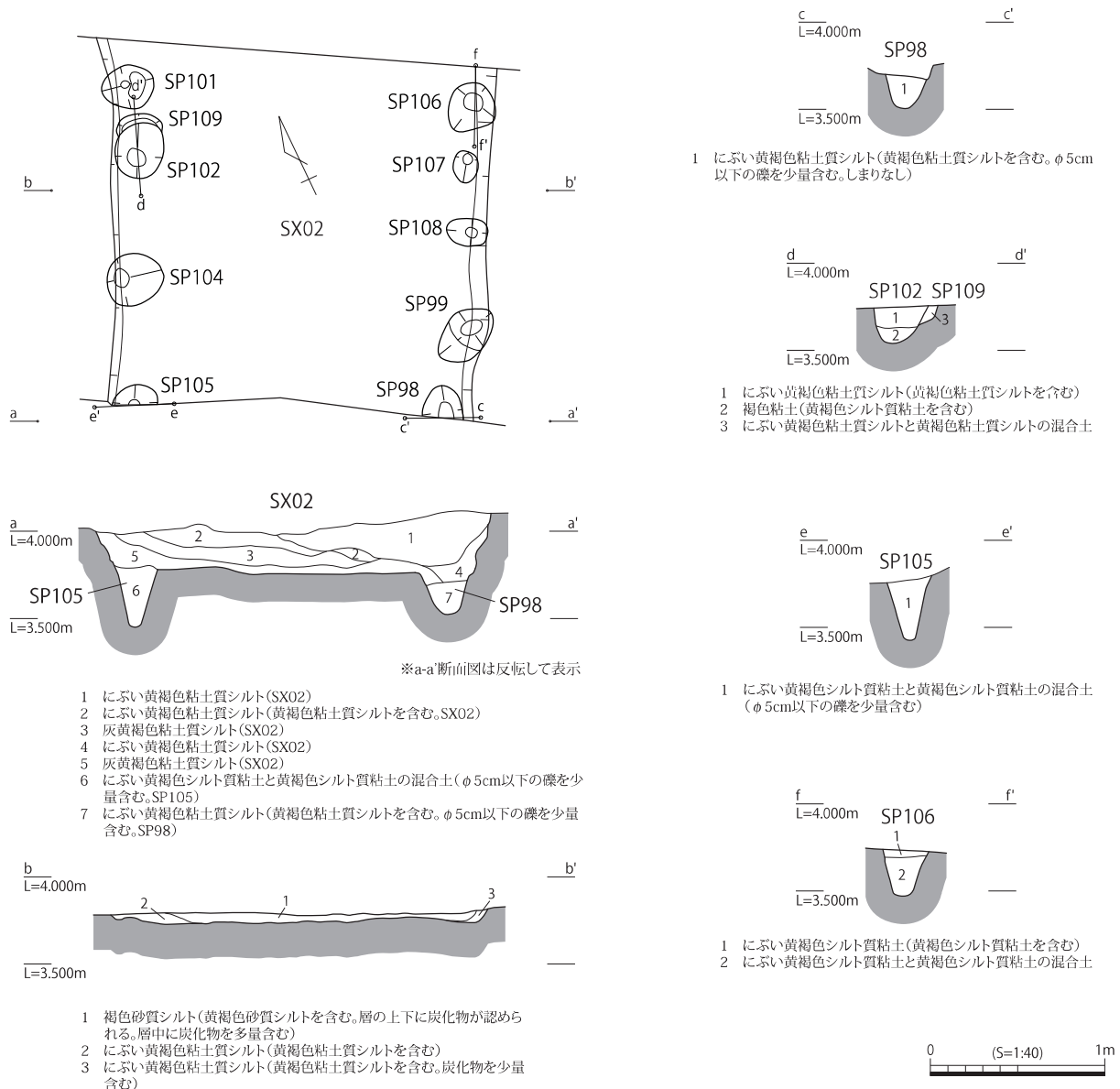


Fig.54 II d 区 SX02 遺構図

SP157 (Fig. 52) II c 区南部の、南西部で検出した小穴で、SD04 の北 0.6 m に位置する。遺構の平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。遺構からは底面からやや高い位置で Fig.52 (図版 21-4・5) のような状態で遺物が出土した。破損した黄瀬戸の大型鉢 (97) を正位置で据え、その上に体部より上位を欠く常滑産の甕底部 (99) を斜位に置く。鉢の脇には瀬戸美濃産の丸皿 (98) を、常滑産の甕の両脇にこぶし大礫が 2 個認められた。甕の内部からは顕著な遺物などは認められなかった。

出土状況からは単純に遺物を廃棄したような状況を示すものではなく、意図的な配置をしているものと考えられるが、具体的にどのような行為を想定すべきかは不明である。遺構の年代は、出土遺物から登窯第 1 段階第 2 小期に属し、17 世紀前半の年代が考えられる。

SP158 (Fig. 51) SP157 の南 0.1 m に位置する小穴である。遺構の平面形は楕円形、断面形は U 字形を呈する。断面観察で柱痕跡は認められなかったが、遺構の南壁際に、こぶし大礫が 2 個浮いた状態で認められた。根固めのために配置された可能性が考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP159 (Fig. 51) II c 区南部の中央部やや東で検出した小穴でSD04を切る。SE02の東0.1 mに位置する。平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。遺構の北側に段を有する。断面観察で柱痕跡は認められなかったが、段の高さまで土を入れて平坦面をつくり、その上にこぶし大礫を1個据えている。礫は上面が平坦であり、根石として使用されたものと考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP180 (Fig. 51) II c 区南部の北西部で検出した小穴で、SD02の北0.5 mに位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。遺構の底面からやや浮いた状態で、10～20cm大の礫が2個重なって認められた。断面観察で柱痕跡は認められなかったが、上にある礫の上面が平坦であり、根石として使用された可能性が考えられる。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP181 (Fig. 51) SP180の東0.6 mに位置する小穴で、平面形は楕円形、断面形はU字形を呈する。断面観察によると柱痕跡が確認でき、その直下に薄い板石が据えられていたため、根石として使用されたものと考えられる。当初、柱痕跡は平面形が長方形を呈するようには見えたため板状の柱を想定していたが、断ち割った結果それは誤りで、通常の円形の柱であると考えられる。柱の直径は8cmを測る。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

SP185 (Fig. 51) II c 区南部の北部中央付近で検出した小穴でSD06を切る。平面形は円形を呈し、断面形はU字形を呈する。遺構の深さは0.41 mを測る。遺構の上面からおよそ12cm下で、15cmほどの大きさの礫が2個認められた。断面観察からは柱痕跡は認められなかったが、出土状況からこの礫は、柱の根固めに用いられた可能性が考えられる。なおこのうちの1個は砥石(109)であった。遺構からはほかに遺物が出土しなかったため、遺構の詳細な年代は不明である。

SP188 (Fig. 52) II c 区南部の北西部で検出した小穴で、SP180の北0.8 mに位置する。平面形は東西方向に長軸をもつ楕円形、断面形はU字形を呈する。小穴の中央部に柱痕跡が認められた。柱の直径は12cmを測る。この小穴に組み合う遺構は不明である。埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。

v) その他の遺構

SX02 (Fig. 54) II d 区中央部で検出した遺構で、IV層上面から掘り込まれている。調査できた範囲が狭く遺構の全容は不明であるが、調査区の北と南へ連続するようである。南側へはII e 区内でこの遺構の続きとみられるものがみつからなかったため、II e 区までの範囲に収まるものとみられる。北側についても、II c 区南部でこの遺構の続きとみられるものがみつからなかったため、II c 区南部までの範囲に収まるものとみられる。調査区内で検出できた規模は東西2.15 m、南北2.0 m以上、検出面から遺構底面までの深さが0.35 mを測る。遺構の平面形は方形あるいは長方形を呈すると考えられ、断面形は箱形を呈する。遺構の底面は平坦で、遺構の両辺に沿って小穴(西側にSP101・SP102・SP104・SP105、東側にSP98・SP99・SP106・SP107・SP108)が並ぶ。小穴は柱筋を通らないが、SX02に沿って配置されることから、有機的な関連が存在することは明らかである。それぞれの小穴埋土の特徴としては、にぶい黄褐色シルト質粘土と黄褐色シルト質粘土の混合土が認められること

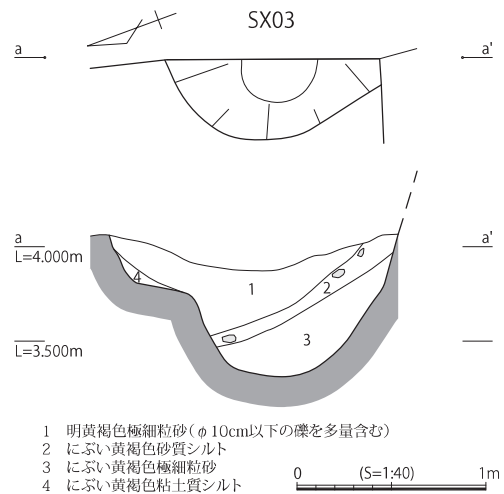


Fig.55 II d 区 SX03 遺構図

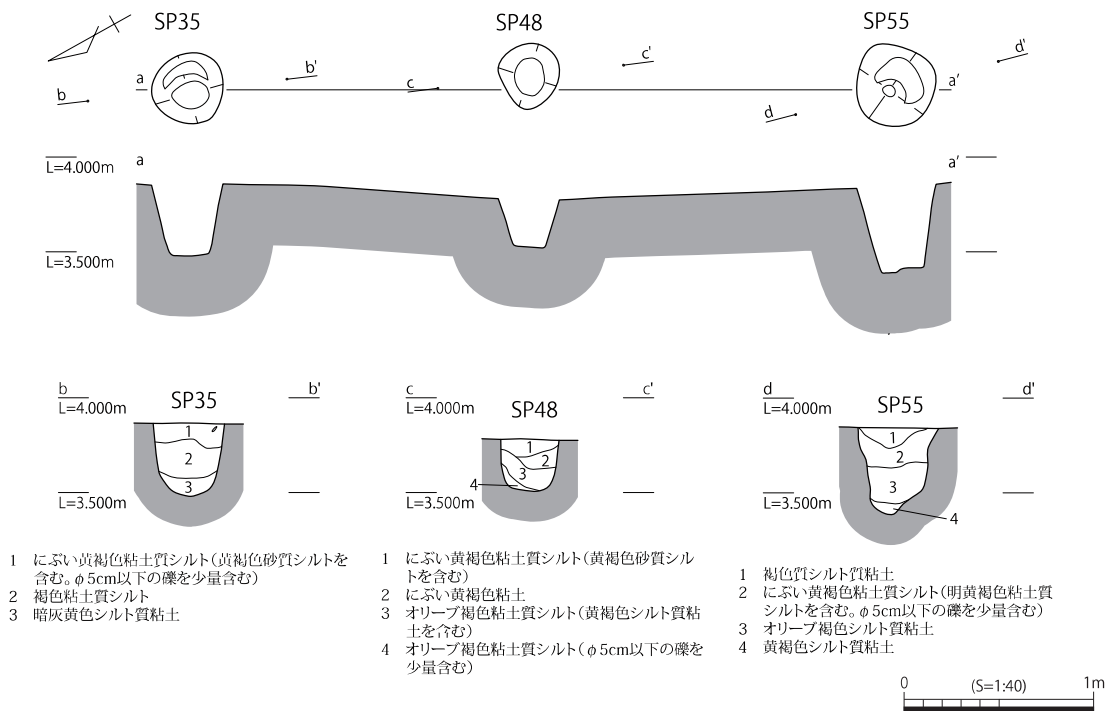


Fig.56 II a 区 SA01 遺構図

から、人為的な埋め戻しを想定できるものである。これに対して SX02 の埋土は、基本的には自然堆積と考えられることから、この遺構が機能していた時には小穴は埋まっており、SX02 は埋まっていない可能性が高い。調査できた範囲が狭いが、遺構の主軸は南北を指向しており、N-25°-E で、やや東に偏する。

SX02 及び伴う小穴埋土から遺物が出土しているが、小片のため遺構の年代は不明である。遺構の性格が不明ながら、近世東海道と方位を揃えることから、これを意識して構築された可能性が高い。

SX03 (Fig. 55) II d 区東壁付近で検出した落ち込みである。遺構の大半が調査区外となるため明確ではないが、円形あるいは楕円形を呈する土坑であると考えられる。埋土の特徴から、基盤層の礫層に類似する層を用いて人為的に埋め戻されたものと考えられるが、東壁を観察すると、この遺構の埋め戻しと連動して上面にも整地(Ⅲ層)を行っていることが明らかである。すなわちこの遺構も一連の整地に伴い、埋め戻されたものと考えられる。遺構からは遺物が出土しなかったため、詳細な年代は不明であるが、Ⅳ層を切っていることに加え、この遺構の直上に近世の整地土層であるⅢ層が認められるため、この遺構の埋没もⅢ層の形成期に属する可能性が高い。

SA01 (SP35・SP48・SP55) (Fig. 56) II a 区南東部で検出した柱列で、北東—南西方向に2間分の小穴が認められた。基盤層上で検出したが、掘り込み面は不明である。埋土の特徴からは、Ⅳ層下面で検出した遺構埋土と類似するため、戦国時代以前にまで遡る可能性も考えられる。柱列は主軸を N29°E にとり、柱間寸法は SP35—SP48 間が 1.80 m、SP48—SP55 間が 1.85 m を測る。柱列を構成する小穴はいずれも円形を呈し、断面形は U 字形を呈する。小穴底面の高さはそれぞれ SP35 が 3.48 m、SP48 が 3.51 m、SP55 が 3.38 m を測り、SP55 がやや低い。断面観察の結果、それぞれの小穴からは柱痕跡ならびに根石などが認められなかった。SP55 の埋土から土師質の獣脚(54)が出土している。ほかの小穴から遺物は出土していないため、遺構の詳細な年代は不明である。

SA02 (SP184・SP183・SP165・SP161・SP155) (Fig. 57) II c 区南部の中央部で検出した柱列で、南北に並ぶ。調査区内で4間分確認した。調査区外へさらに延びる可能性が考えられる。柱間寸法

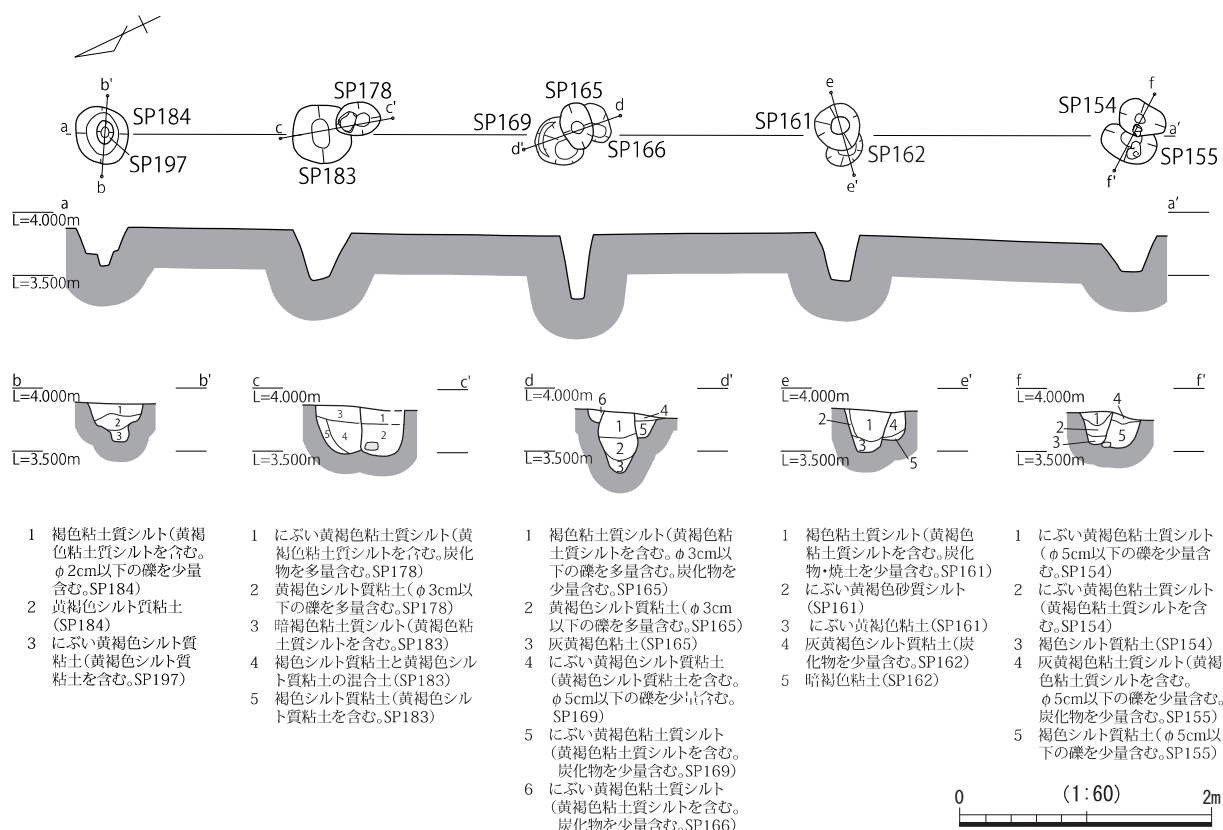


Fig.57 II c 区南部 SA02 遺構図

は SP155 - SP161 間が 2.3 m、SP161 - SP165 間が 2.1 m、SP165 - SP183 間が 2.05 m、SP183 - SP184 が 1.7 m となり等間隔ではないが、およそ 2 m 前後となる。また、小穴底面の高さは、Fig. 57 に示すとおり不揃いである。それぞれの小穴から年代の判明する遺物が出土していないが、南から 2 基目の SP161 が、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけての井戸である SE02 を切っており、このことから柱列は、17 世紀前半以降にまで降る可能性が高いものと推定される。柱列は主軸を N-26°-E にとり、近世東海道に主軸を揃えている可能性が高い。これに伴う遺構については、並行する柱列などが認められなかったため不明である。

(3) 遺物 (Fig. 58 ~ 64)

51 ~ 56 は II a 区出土遺物である。51・52 は IV 層出土の土師器かわらけ。ロクロ成形で底部は回転糸切による。51 は器壁が厚い。52 は器高がやや深めのかかわらけで、底部の回転糸切痕が顕著である。

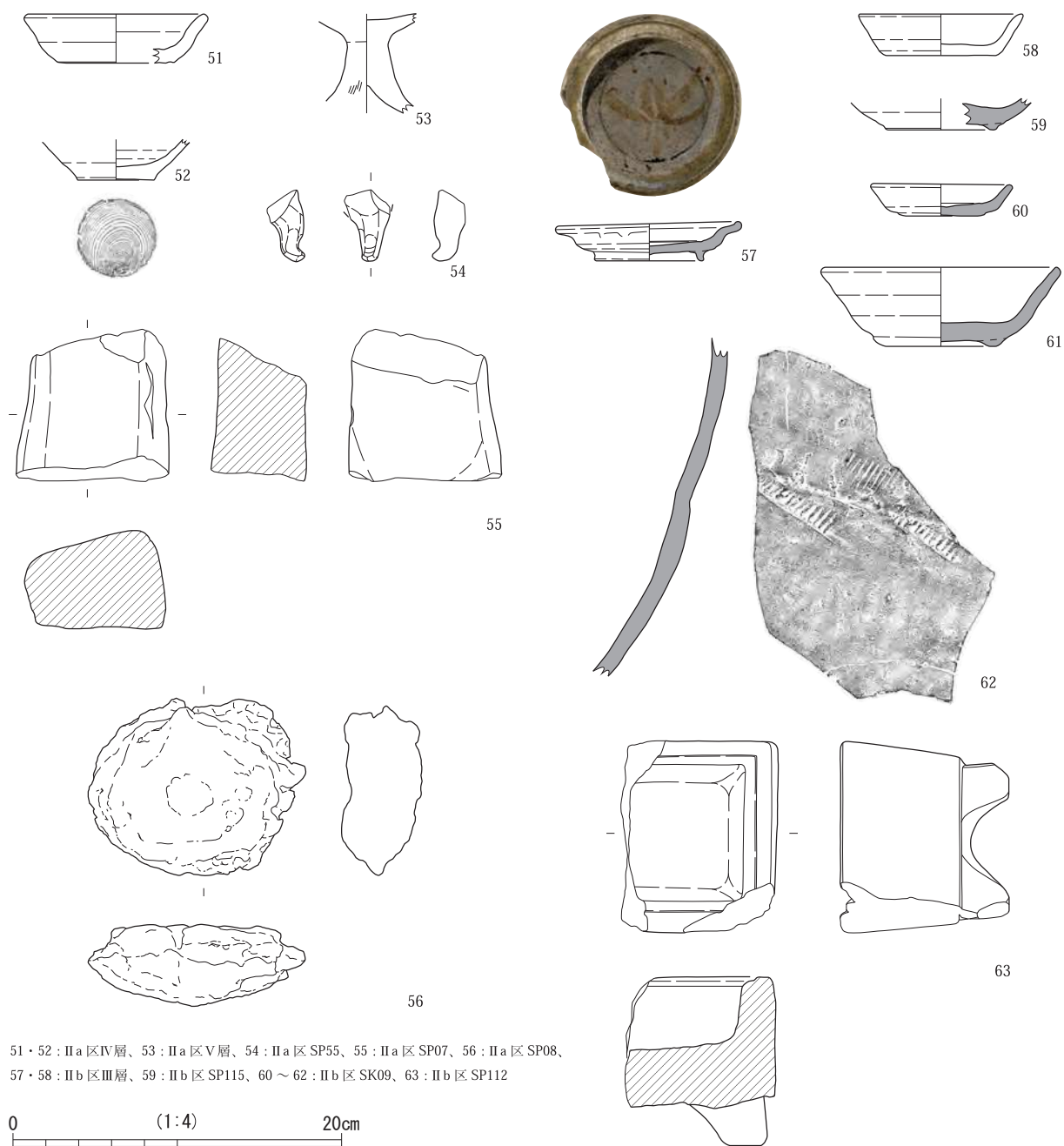
53 は V 層上面出土の土師器高杯脚部の破片である。摩耗が著しく調整は不明である。短い脚柱部は中実で、脚端部と杯部を欠損する。

54 は SP55 出土の獣脚である。取り付く本体部を欠くため、本来の形状は不明である。脚端部でややくびれて外側へ踏ん張る。土師質で高さ 4.3cm を測る。

55 は SP07 出土の砥石である。根石として転用されていた。砂岩製で両小口を欠損する。各面とも使用痕が顕著である。幅 9.3cm を測る。

56 は SP08 出土の碗形滓である。根石として転用されていた。周辺で何らかの鍛冶がなされていたものと考えられる。

57 ~ 63 は II b 区出土遺物である。57 は III 層出土の瀬戸美濃産陶器の鉄絵折縁皿である。口縁部



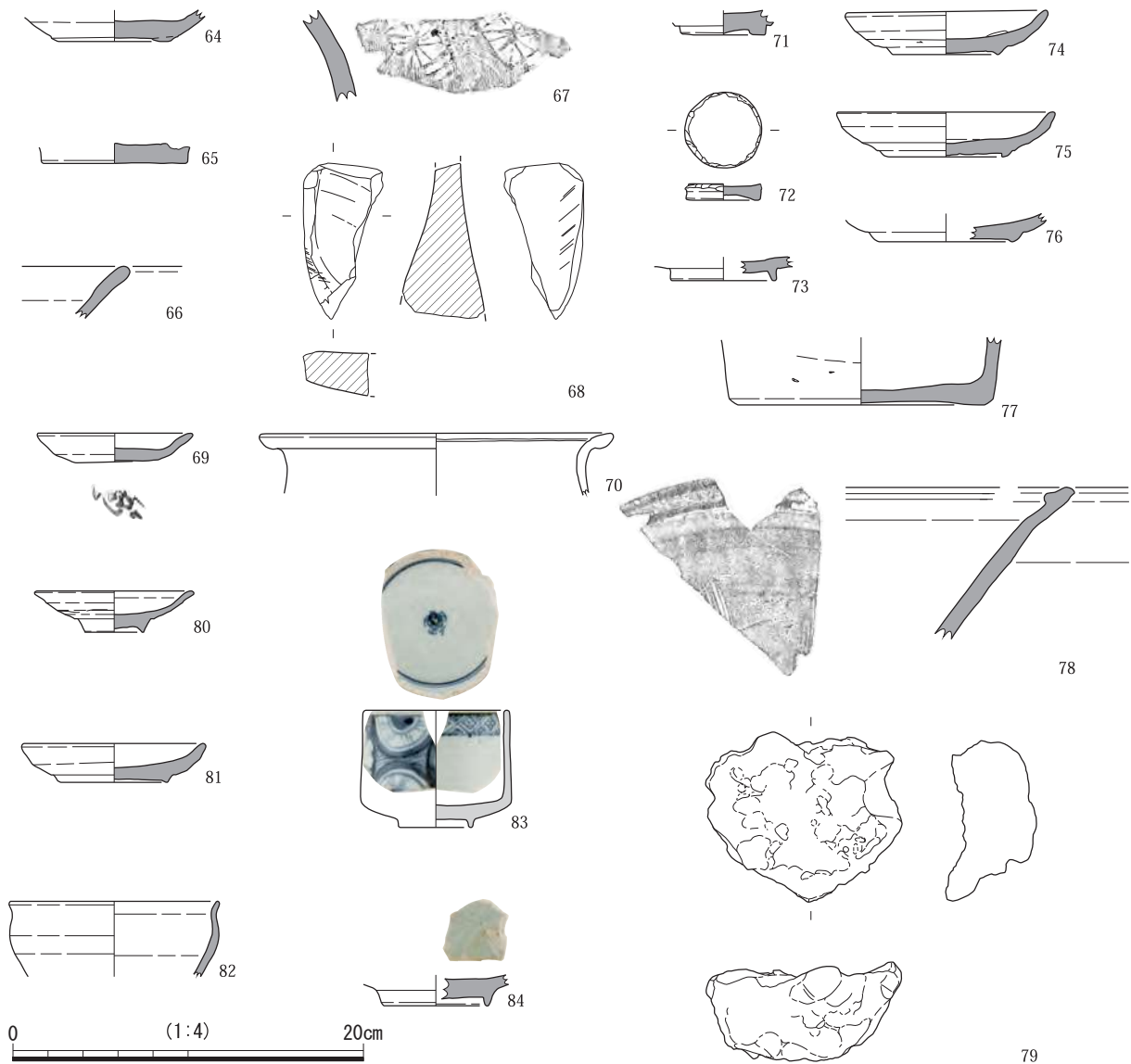
51・52：Ⅱa区Ⅳ層、53：Ⅱa区Ⅴ層、54：Ⅱa区SP55、55：Ⅱa区SP07、56：Ⅱa区SP08、
57・58：Ⅱb区Ⅲ層、59：Ⅱb区SP115、60～62：Ⅱb区SK09、63：Ⅱb区SP112

Fig.58 Ⅱa・Ⅱb区 出土遺物

をやや欠損するものの、残りが良い。灰オリーブ色の釉を内面と口縁部外面にかける。見込部に草花文が認められる。外面と見込部に煤が付着することから、灯明皿として使用された可能性が高い。口径 11.0cm を測る。登窯第 1 段階第 3 小期に属する。58 はⅢ層出土の土師器かわらけである。ロクロ成形で、底部裏面に回転糸切痕を残す。口径 9.8cm を測る小皿。

59 は SP115 出土の山茶碗の碗である。底部の破片で、厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。

60～62 は SK09 出土遺物である。60 は完形の山茶碗小皿。口径 8.4cm を測る。粗雑なつくりで、口縁部に自然釉がかかる。61 は山茶碗の碗である。59 と同様厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。口縁部は斜外方に立ち上がり、端部を丸く収める。やや青みがかった色調で、焼



64～68：SE01、69・70：SK13、71～79：SE03、80～83：Ⅲ層、84：Ⅳ層

Fig.59 II c 区北部 出土遺物

成も甘い。口径 14.1cm を測る。59・60 とともに 7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。

62 は渥美産の甕体部である。器壁が厚い大型の甕体部で、外面に平行タタキが連続して認められる。

63 は SP112 出土の石製容器である。およそ半分を欠損するものとみられる。容器は方形あるいは長方形を呈するものと考えられ、幅が 11.7cm を測る。箱形に内部を削り出し、内部底面はやや傾斜をもつものの平坦につくる。容器の立ち上がりは斜上方へ開き気味になり、上端部は内側に幅 0.4cm の浅い段を設け、印籠造とする。このため蓋を伴う可能性がある。容器の下部には脚部を造り出し、現状で 2 か所残存する。本来 4 足であった可能性が高い。容器の内法は幅 8.3cm、長さ 7.5cm 以上、深さ 4.4cm を測る。なお全体に被熱しており、煤が付着する。

64～68 は II c 区北部の SE01 出土遺物である。64 は山茶碗の碗底部で、厚みのある底部に断面三角形の低い高台を貼り付ける。7 型式 13 世紀中葉に属するものと考えられる。65 は瀬戸美濃産の瓶子底部の破片である。平底底部のみ残存する。底径 8.2cm を測る。古瀬戸中期 14 世紀代の所産。66 は山茶碗の片口鉢口縁部であると考えられる。小片のため、法量などは不明である。67 は渥美産甕



85～87：SD04、88～93：SE02、94～96：SP137、97～99：SP157

Fig.60 II c 区南部 出土遺物（1）

の体部である。外面にタタキが認められる。68は砥石である。破損するが使用痕が顕著である。現存長8.9cmを測る。

69・70はII c 区北部のSK13出土遺物である。69は山茶碗の小皿である。口径8.8cmを測り完形である。底部裏面に墨書が認められる。漢字のような文字が認められるが判読できない。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。70は伊勢型鍋の破片である。頸部は強く外反し、口縁端部は折り返して肥厚したのちに丸く収める。外面に煤が付着する。小片のため確定できないが、口径20.2cmを測る小型の鍋であると考えられる。

71～79はⅡc区北部のSE03出土遺物である。71～76は上層、77～79は最下層出土である。71は初山産の天目碗底部である。底径5.5cmを測り、大窯3段階に属する。72は瀬戸美濃産の天目碗底部である。破断面を打ち欠いており、加工円盤に転用したものと考えられる。底径4.4cmを測る。古瀬戸後期Ⅳ期古段階に属する。73は瀬戸美濃産の輪禿皿底部。灰白色の釉がかかる。登窯第1段階第2小期に属する。74～76は瀬戸美濃産の志野丸皿。74は完形で口径11.4cmを測る。いずれも登窯第1段階第2小期に属する。77は瀬戸産の壺底部である。平底の底部から体部は垂直気味に立ち上がる。78は瀬戸美濃産の播鉢口縁部の小片で、大窯3段階後半に属する。79は碗形滓である。

80～83はⅡc区北部のⅢ層、84はⅣ層出土遺物である。80は瀬戸美濃産の小皿。内外面に煤が付着するため、灯明皿として使用されたものと考えられる。江戸中期の所産。81は瀬戸美濃産の志野丸皿である。口縁部の一部と底部に煤が付着するため、灯明皿として使用されたと考えられる。完形品で口径10.3cmを測る。登窯第1段階第2小期に属する。82は瀬戸美濃産の天目碗口縁部の小片である。登窯第1段階第2小期に属する。83は肥前産磁器の半筒碗である。底部が完存し、見込部に手書きの五弁花印判が認められる。18世紀後半と考えられる。84は輸入磁器の青磁碗底部である。底部裏面には釉がかからない。

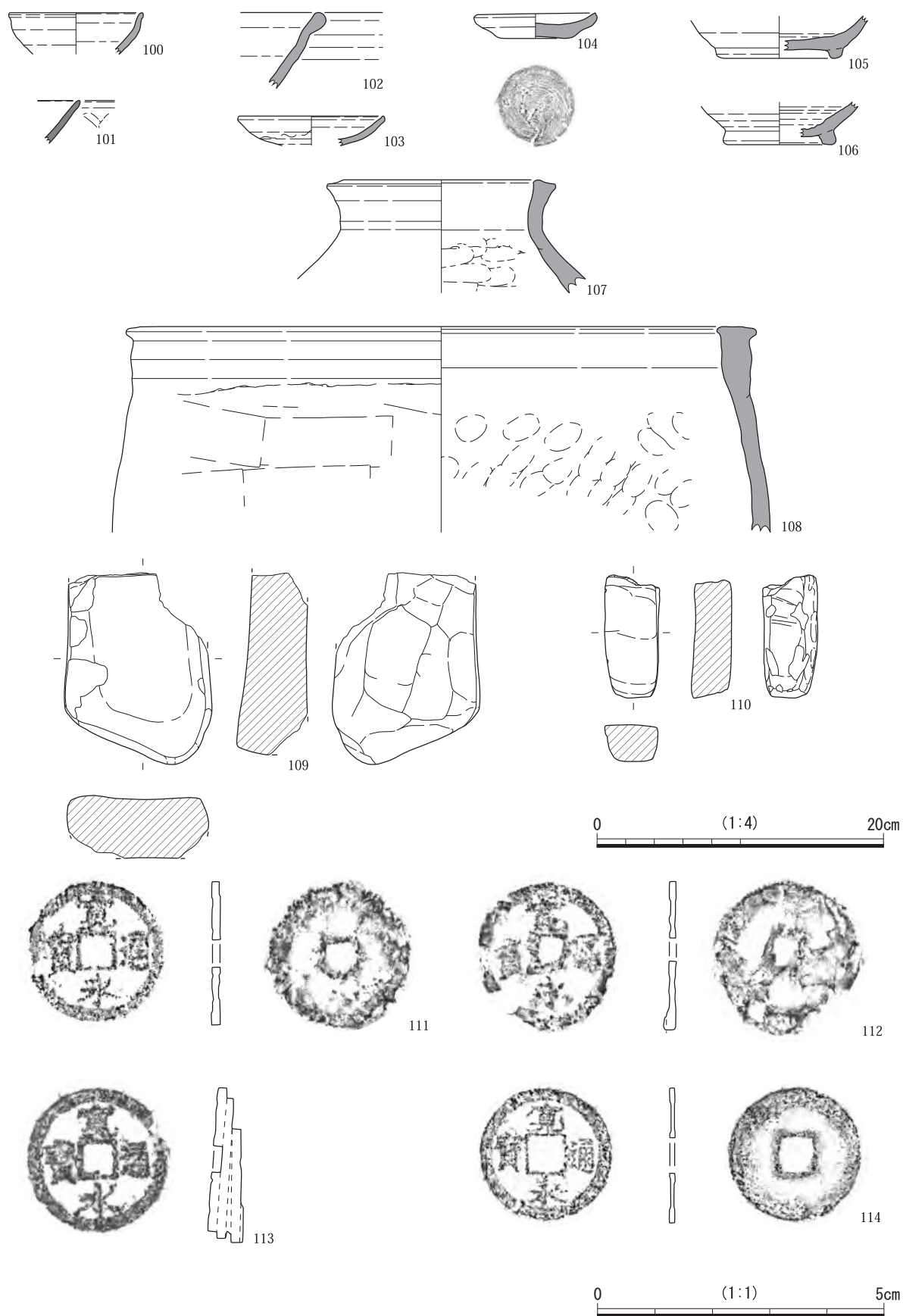
85～87はⅡc区南部SD04B出土遺物である。85は山茶碗の碗底部である。7型式13世紀中葉に属するものと考えられる。86は渥美産の壺肩部の破片である。肩部外面に連弁文が線刻される。87は産地不明陶器の甕底部であると考えられる。器壁が厚いことから大型の製品である可能性が高い。

88～93はⅡc区南部SE02出土遺物である。88は瀬戸美濃産の天目碗で大窯3段階前半と考えられる。胎土は浅黄橙色を呈する。89は瀬戸美濃産の茶入。小片のため詳細は不明であるが、江戸時代の所産と考えられる。90は瀬戸美濃産の丸皿あるいは端反皿であると考えられる。底部裏面に付着物が認められる。大窯1～2段階に属するものと考えられる。91は初山産の大皿。内湾する体部から、口縁部は水平方向に外反して端部は丸く収める。胎土は灰色を呈する。大窯3段階と考えられる。92は志戸呂産の鉢と考えられる。胎土は灰白色を呈し、見込部に煤が付着する。93は土師器茶釜である。底部を欠くが残りが高く、口径13.1cmを測る。肩の張る体部に垂直に立ち上がる口縁部を有する。肩部には板状粘土を横位に貼り付け外耳とし、口縁部に直交する位置に円孔を貫通させる。外耳はほぼ垂直に貼り付け、五角形を呈する。体部に羽が付かない羽無釜で、17世紀前半と考えられる。

94～96はⅡc区南部SP137出土遺物である。94は美濃産の鉢である。幅広の高台を貼り付ける。釉は灰オリーブ色を呈し、高台に釉がかからない。江戸時代中期と考えられる。95は肥前産磁器の碗である。全面に施釉されるが見込部は砂目、高台畳付は釉剥ぎである。96は瀬戸美濃産の天目碗底部である。破断面の打ち欠きが認められるため、加工円盤に転用されたものと考えられる。大窯3段階前半と考えられる。

97～99はⅡc区南部SP157出土遺物である。97は瀬戸美濃産陶器の黄瀬戸鉢である。全面に施釉され、淡黄色の釉を基調とし濃緑色の釉で文様を描く。見込み部には中央に菊花文が認められ、圏線を7重に巡らす。体部内面には波状文を1段施す。残りが高く口径29.0cmを測る。登窯第1段階第2小期と考えられる。98は瀬戸美濃産の折縁皿である。全面に施釉され、見込部に菊花文が認められる。口径10.2cmを測る。登窯第1段階第2小期と考えられる。99は常滑産の壺底部で、体部より上部を欠損する。平底の底部から斜上方へ立ち上がる。16世紀の年代が考えられる。

100はⅡc区南部SP176出土遺物で、初山産の小天目碗である。胎土は灰色、光沢のない暗赤褐色の釉がかかる。大窯3段階と考えられる。101はⅡc区南部SP153出土遺物で、龍泉窯系青磁碗の口



100 : SP176、101 : SP153、102 : SP161、103・104・105 : III層、106 : V層上面、
107・108 : SP136、109 : SP185、110 : SP178、111～113 : SK25、114 : II層

Fig.61 II c 区南部 出土遺物 (2)

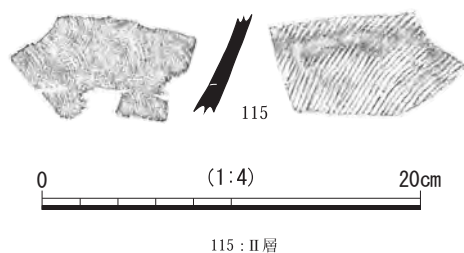


Fig.62 II d 区 出土遺物

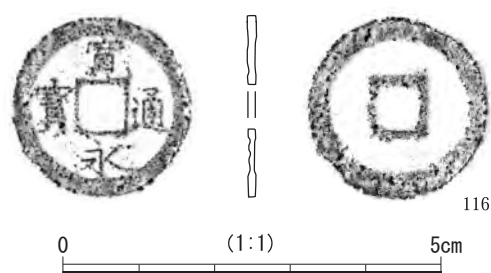


Fig.63 II e 区 出土遺物 (1)

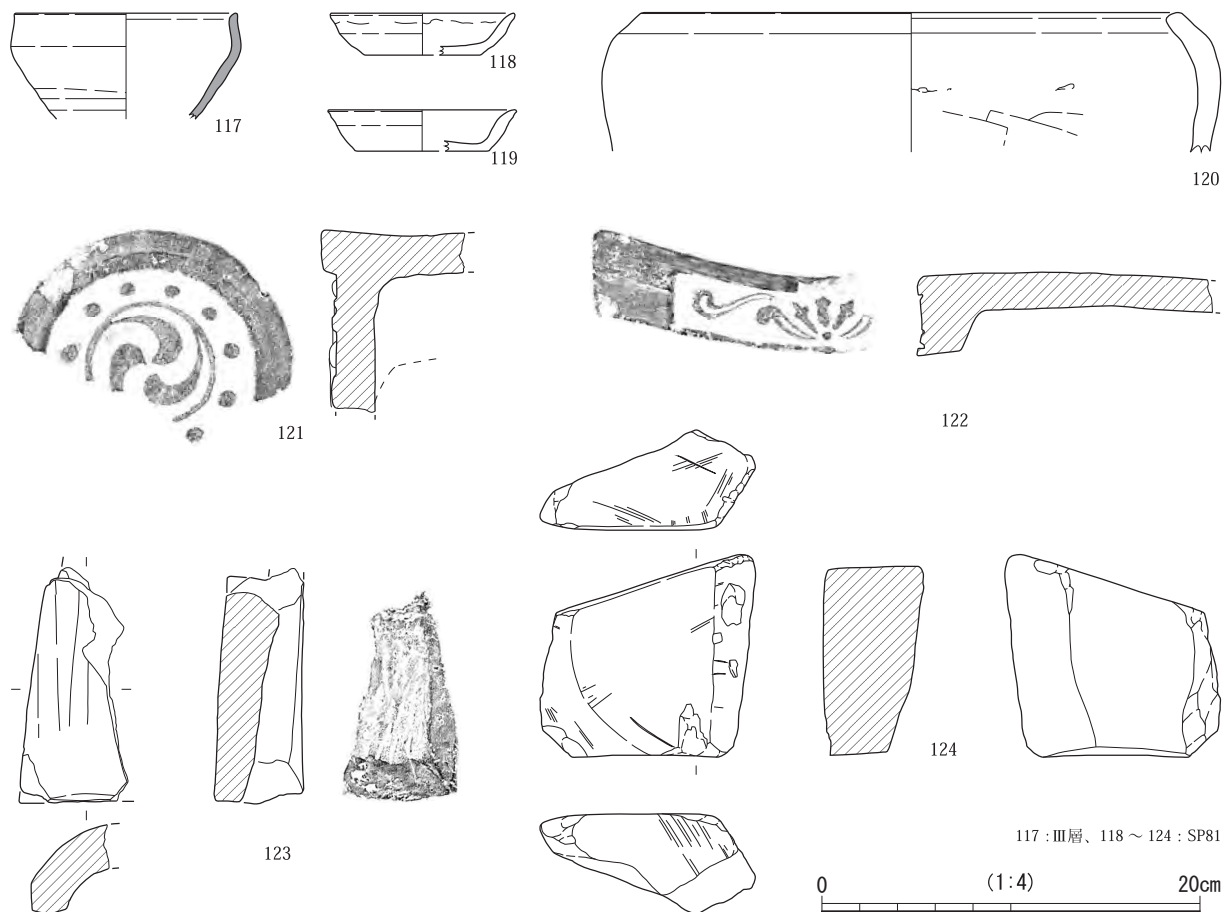


Fig.64 II e 区 出土遺物 (2)

縁部小片である。体部外面に鎬蓮弁文がわずかに認められる。102はII c区南部 SP161 出土遺物で、山茶碗の片口鉢であると考えられる。103～105はII c区南部Ⅲ層出土遺物である。103は志戸呂産の灯明皿で、江戸時代後期の所産であると考えられる。104は瀬戸美濃産の皿で内面に灰白色の釉がかかる。外面に煤が付着する。江戸時代後期の所産であると考えられる。105は山茶碗の碗底部である。5型式13世紀初頭の所産と考えられる。106はII c区南部Ⅴ層上面出土遺物で、灰釉陶器の壺の可能性がある。断面方形の高台を貼り付ける。底径7.4cmを測る。107・108はII c区南部 SP136 出土遺物で、107が常滑産の壺、108が甕である。ともに口縁部の破片で、107は暗赤褐色の釉がかかる。12型式江戸時代前期に属するものと考えられる。109・110は砥石である。109はII c区南部 SP185、110はII c区南部 SP178 出土である。111～113はII c区南部 SK25 出土の銭貨である。いずれも寛永通宝で、

111 は古寛永、112・113 は新寛永である。113 は 3 枚が溶着する。

114 はⅡ c 区南部Ⅱ層出土の寛永通宝である。最も鋳上りが良く、銭文も判読が容易である。新寛永であると考えられる。115 はⅡ d 区Ⅱ層出土の須恵器甕体部である。外面は縦位から斜位の平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕が認められる。古墳時代後期と考えられる。116 はⅡ e 区Ⅱ層出土の寛永通宝である。新寛永であると考えられる。

117 はⅡ e 区Ⅱ層出土の瀬戸美濃産の天目碗である。登窯第 2 段階第 5 小期と考えられる。118～124 はⅡ e 区 SP81 出土遺物である。118・119 は土師器のかわらけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。118 は口縁部内外面に煤が付着するため、灯明皿として使用されたものと考えられる。120 は土師質土器の鉢であると考えられる。口径 28.2cm を測る大型品である。121 は連珠左巻三巴文軒丸瓦である。巴と連珠の間に圈線をめぐらす。瓦当径は 15.2cm、連珠数は推定で 11 個。122 は軒平瓦で、中心飾りから 2 単位の均整唐草紋が表現されている。唐草紋は圈線を表現したもので、同様の模様は浜松城跡 10 次調査 1 トレンチから出土している⁽²⁾。123 は道具瓦と考えられる。凹面には布目痕が認められる。玉縁が取り付くものと考えられる。124 は砥石である。一部を欠損するが、使用痕跡が顕著である。

(4) 小 結

Ⅱ区は今回の調査範囲においてほぼ中央部に位置する。埋設管などの存在から調査区を細分して設定せざるをえず、必ずしも満足のいく調査ができたとは言い難い。安全対策上、未調査部分を残さざるを得なかった箇所も存在した。以下、Ⅱ区の調査結果をまとめることとする。

Ⅱ a 区・Ⅱ b 区は今回の調査区の中で最大面積を調査できた調査区である。遺構密度としては希薄で、Ⅱ a 区では小穴が散見されるのみであった。Ⅱ b 区に近づくにつれ遺構密度が増し、Ⅱ b 区では方形土坑 SK09 やそれを切る SD01 などが検出できた。SK09 は遺構底面が平坦な土坑で、堅穴建物のような平面形を呈するが、小穴や溝などの遺構がともなわず、調査では遺構の性格を決定できるものは得られなかった。遺構からは山茶碗の碗や小皿、渥美産の甕などが出土したため、13 世紀代の遺構であると考えられる。

SD01 はこれを切る遺構で、南北方向に直線的に延びる。遺構の北限は、Ⅱ a 区との境界付近で調査区外へ延びている可能性が考えられ、西側へ折れ曲がるものと推定される。一方南側は、Ⅱ c 区北部さらにはⅡ c 区南部にまで連続するようである。Ⅱ c 区南部の SD02 の手前付近で浅くなり途切れる。上面が削平を受けている可能性もあるが、この付近で収束するのがあるいは SD02 に繋がっていた可能性も考えられる。なお、SD02 の南側にこの延長とみられる遺構はみつかっていない。本文中でも述べたが、Ⅱ c 区北部で検出した井戸 SE01 に集水する目的で掘削された可能性も考えられる。

Ⅱ a 区南部で柱列 SA01 を 1 条検出した。南北方向に 2 間分のみであり、調査範囲が狭く、組み合わせる遺構の存在を明らかにすることができなかった。第 2 章 2 において、Ⅱ a 区中央部付近で地割の境界とみられる堆積が東西壁面において確認することができたと述べたが、これは現在も宅地の境界となっており、近代の地割が現在にまで踏襲されたことを示すものであろう。なお、この境界線付近は基盤層上で遺構がほとんどみつからず空闲地となっており、遺構の在り方からも境界線が存在したことを想起できよう。柱列 SA01 はこの境界線の南側に位置している。柱列 SA01 は北側へは延びず、東西方向に展開する建物の一部であった可能性も考えられる。周辺を調査する際には注意を要する。

Ⅱ c 区はⅡ b 区の南 2 m に位置し、未調査区を境に北部と南部に分断される。Ⅱ c 区北部では先述

の南北溝 SD01・SE01 のほかに、井戸 SE03 が認められた。調査範囲が狭く井戸底面までの調査ができなかったが、井戸下層にこぶし大礫を充填する層を検出した。このこぶし大礫充填層は、今回調査した当該期における井戸の特徴の一つに挙げられる。礫より上層は無遺物層が認められることから、こぶし大礫の充填は井戸としての機能停止を示す行為である可能性が考えられる。なお SE03 の最上層から、登窯第 1 段階第 2 小期に属する遺物が小礫とともにまとまって認められた。井戸としての機能を消失した後、廃棄土坑として利用されたものと推定される。

Ⅱ c 区南部は今回の調査区中、最も遺構密度の高い調査区である。多数の小穴のほかに、13 世紀代に埋没したとみられる東西方向の溝 (SD02、SD04) を 2 か所で検出し、それを切る 16 世紀後半から 17 世紀前半の井戸 SE02 を検出した。SD02 と SD04 は東西方向に平行しており、同時期に存在していた可能性も考えられる。SD04 は溝が重複しており、同一地点に繰り返し溝を掘削していたものと推定される。なおこの位置も先述の地割の踏襲が認められることから、境界線の溝であった可能性も考えられるが、遺構が 13 世紀代と古くなり、城下町形成期以前から一定の地割が存在していた可能性を指摘するにとどめておく。近世東海道は現在の国道 257 号が踏襲しているが、この地割の基準となったのが「東海道」である可能性が高い。

このほかに柱痕跡は少ないものの、根石を伴う小穴が多数認められた。遺構の底面に平坦な礫を据えたものや、柱周囲を取り巻く状況を示すものなども認められた。またこの調査区に限ったことではないが、小穴を掘ると浅いにもかかわらず湧水 (水脈に当たったか) が認められるものが多かった。このような小穴はⅡ b 区・Ⅱ d 区・Ⅱ e 区においても認められた。豊富な湧水もその要因であろうが、根石の存在は不等沈下を防止する効果を期待していた可能性が高い。調査区中央部で南北方向の柱列 SA02 を検出しており、先述の SE02 を切ることから江戸時代以降に営まれた柱列である可能性が高い。これに組み合う遺構が認められず建物であった可能性は不明である。

Ⅱ d・Ⅱ e 区はともに調査範囲が狭いにもかかわらず、多数の小穴をはじめとする遺構を検出した。これらのうち特筆すべきはⅡ d 区で検出した SX02 である。SX02 は調査できた範囲が狭いため遺構の平面形や規模など不明な点が多いが、東西方向の幅 2.15 m、南北方向は 2.0 m 以上で、調査区の南北に直線的に連続するとみられる。遺構の断面形は箱形を呈し、底面は平坦である。また遺構の両端には小穴が不等間隔ながら遺構に沿って並ぶ。小穴は深さや底面高が一定ではなく、明確に柱痕跡が観察できるものでもない。遺構両端の小穴列の内側は、遺構が認められなかった。出土遺物も少なく、年代を判別できる遺物が出土していないが、Ⅳ層を切ることから戦国時代以降の遺構であり、城下町形成期から近世城下町に伴う可能性が高い。遺構の主軸が近世東海道と方位を揃えることもその傍証と言えよう。調査の結果からはどのような性格を有する遺構か明らかにすることができなかったが、今後周辺を調査する際には注意を要する遺構であることを指摘しておきたい。

5 III区の調査

(1) 概 要

今回の調査区の中央部北寄りに位置する調査区で、東西 8 m、南北 7 m、調査面積が 56.0 m²を測る。検出した遺構は少なく、小穴・土坑が各 1 基、計 2 基に留まる。壁面に確認できた遺構としては小穴が 1 基、土坑が 5 基、不明遺構 1 基である。攪乱が遺構面にまで及ぶこともあり、遺構の残存状況は悪かった。

(2) 遺 構

i) 土坑

SK01 (Fig. 67) 調査区南西部で検出した遺構で、直径 3.77 × 3.60 m の楕円形を呈する。同じく削平を受けているため浅く、深さ 0.17 m の浅い箱形を呈する。埋土に基盤層に起因する礫を多く含む。遺物が出土しなかったため、遺構の年代は不明である。

ii) 小穴

SP01 (Fig. 67) 調査区北西部で検出した遺構で、平面形は円形を呈し、直径 0.53 m を測る。上部が削平を受けているとみられるため浅く、深さ 0.17 m の浅い V 字形を呈する。遺物が出土しなかつ

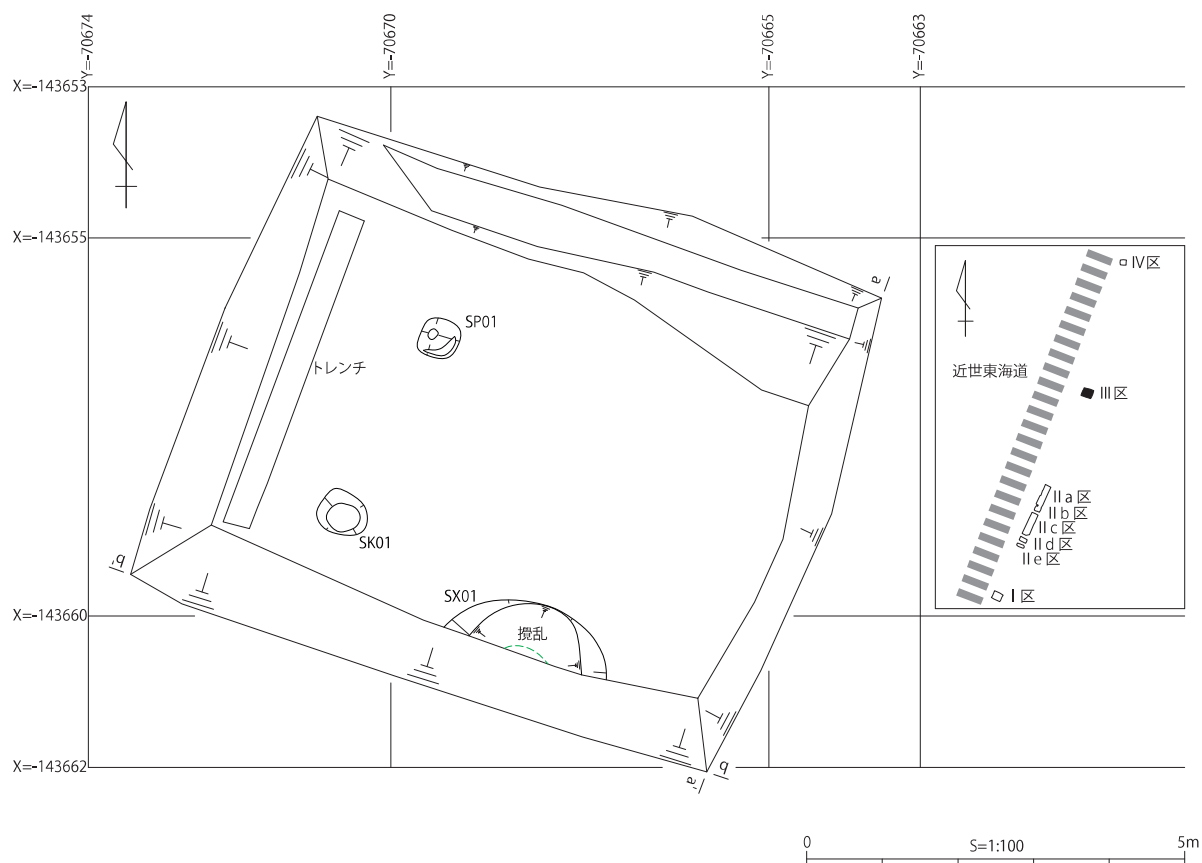


Fig.65 III区 遺構全体図

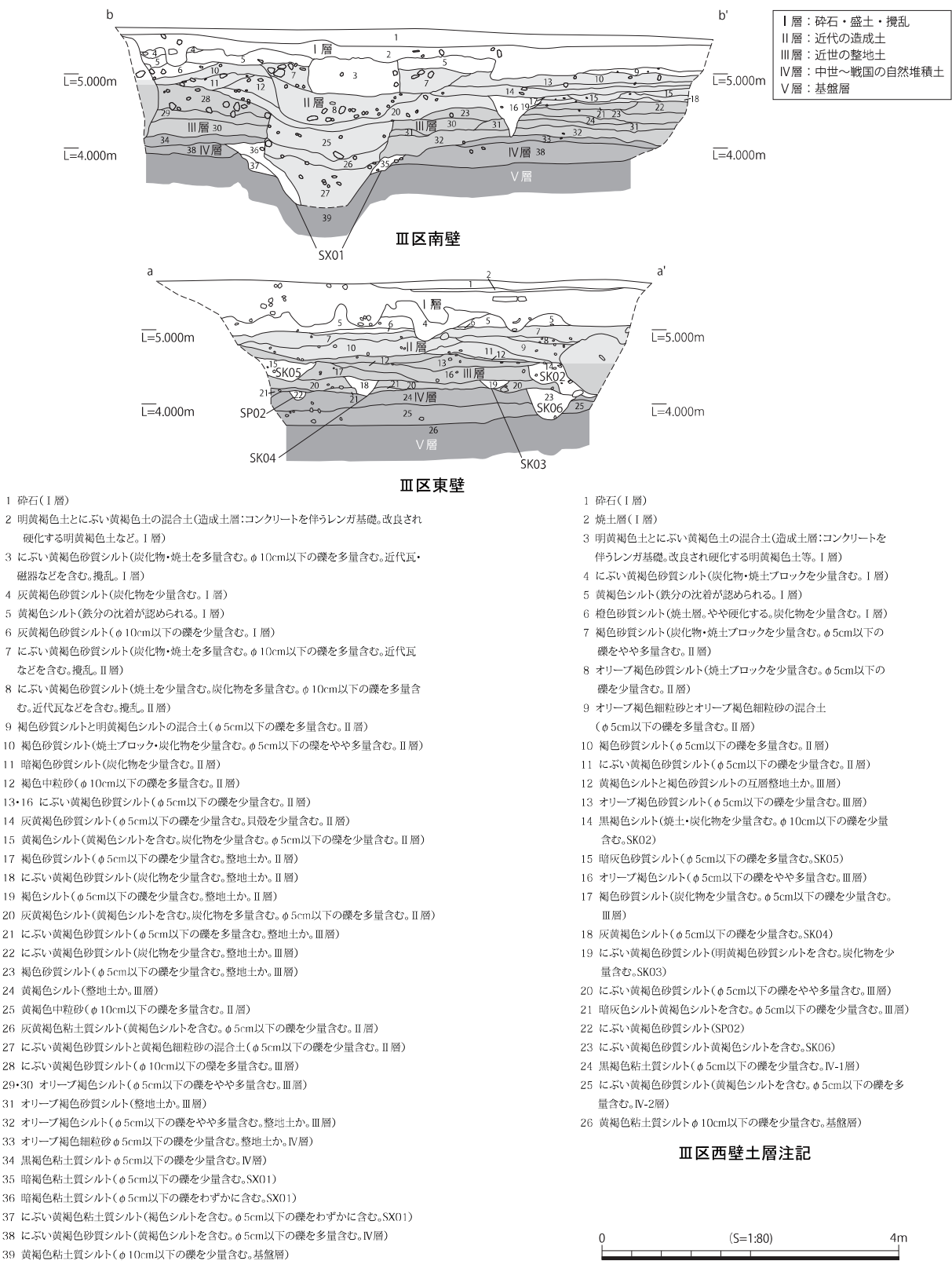


Fig.66 III区 壁面図

たため、遺構の年代は不明である。

(3) 遺物 (Fig. 68)

125・128はIII層出土遺物である。125は初山産の播鉢であると考えられる。焼成不良で胎土は橙

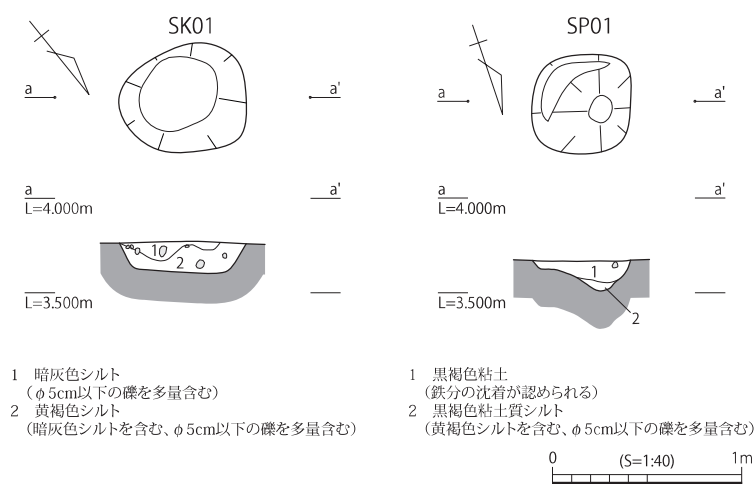


Fig.67 III区 遺構図

色を呈する。内面は使用のため平滑になる。128は銅製の煙管吸口で、雁首を欠損する。羅字の一部が残存する。吸口に文様が認められる。126はIV層出土の山茶碗の碗である。底部の破片で底径7.4cmを測る。5型式13世紀初頭に属するものと考えられる。127はSX01出土の龍泉窯系青磁碗小片である。全面に灰オリーブの釉がかかる。高台の畳付は釉ハギになる。

(4) 小 結

この調査区において平面で検出した遺構は、土坑1基と小穴1基を検出したに留まるが、東壁面にはIV層より掘り込まれる遺構(SK06・SP02)や、III層より掘り込まれる遺構(SK02・SK03・SK04・SK05・SX01)が認められた。出土した遺物が細片であるため、これらの遺構の詳細な年代は明らかにできないが、基本層序の説明の際にも触れたが、IV層からは戦国時代以前の土器が出土し、近世以降の遺物を含まないことから、IV層は戦国時代以降に形成されたと考えられる。このためIV層を切る遺構は戦国時代に上限が求められる。一方、III層からは近世の遺物が出土しているため、これを切る遺構は近世以降の年代が想定できる。

平面的に検出した2基はどの層から掘り込まれるのか、調査では明らかにすることができなかった。埋土の特徴からはIV層に類する土が認められることを考えると、IV層形成以降すなわち戦国時代以降の年代が推定される。このほかに遺構が検出できず、この2基の遺構が組み合うかどうかも含め不明である。この調査区においては非常に遺構密度が希薄で、出土遺物も少なかった。

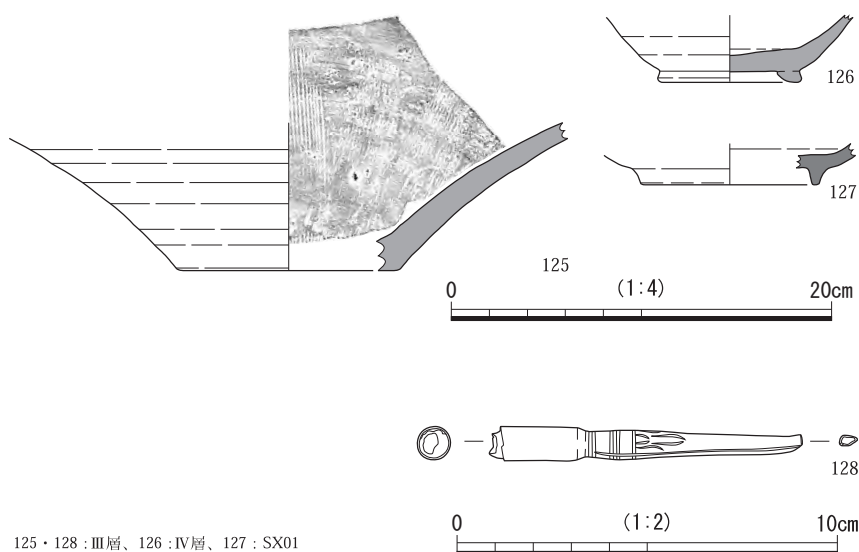


Fig.68 III区 出土遺物

6 IV区の調査

(1) 概 要

今回の調査区の最北端に位置する調査区で、東西 4.78 m、南北 4.1 m、調査面積が 19.6 m²を測る。基盤層で平面的に検出した遺構は少なく、土坑が5基、自然流路が1条、溝が1条、小穴が3基に留まる。壁面に確認できた遺構としては小穴が15基である。

調査は通常通り重機による表土掘削を行ったが、現地表面から 1.1 m 掘り下げた層から内耳鍋の破片が層をなすように密集して検出された。この層の上面において遺物の分布範囲と、遺構の有無を確認する必要があるため、重機掘削を一旦中止した。この面をⅢ-4層と認識し、遺物の分布範囲を調査した。またこの遺物が遺構に含まれるかどうかを調査したが、明確に掘り込まれるプランは検出されず、地形のくぼみに遺物が分布する状況であった。この範囲を SX01 として調査記録を行い、再び重機を投入し掘削を再開した。

基盤層上で平面的に検出した遺構は自然流路や不整形土坑など、ほかの調査区とは異なる様相を呈することが明らかで、先に調査したⅢ-4層とは異なり、これらの遺構からはほとんど遺物が出土しなかった。一方で各壁面の堆積状況からは、掘り込み面が様々であるものの、小穴が15基確認できており、遺物も少量ながら出土した。

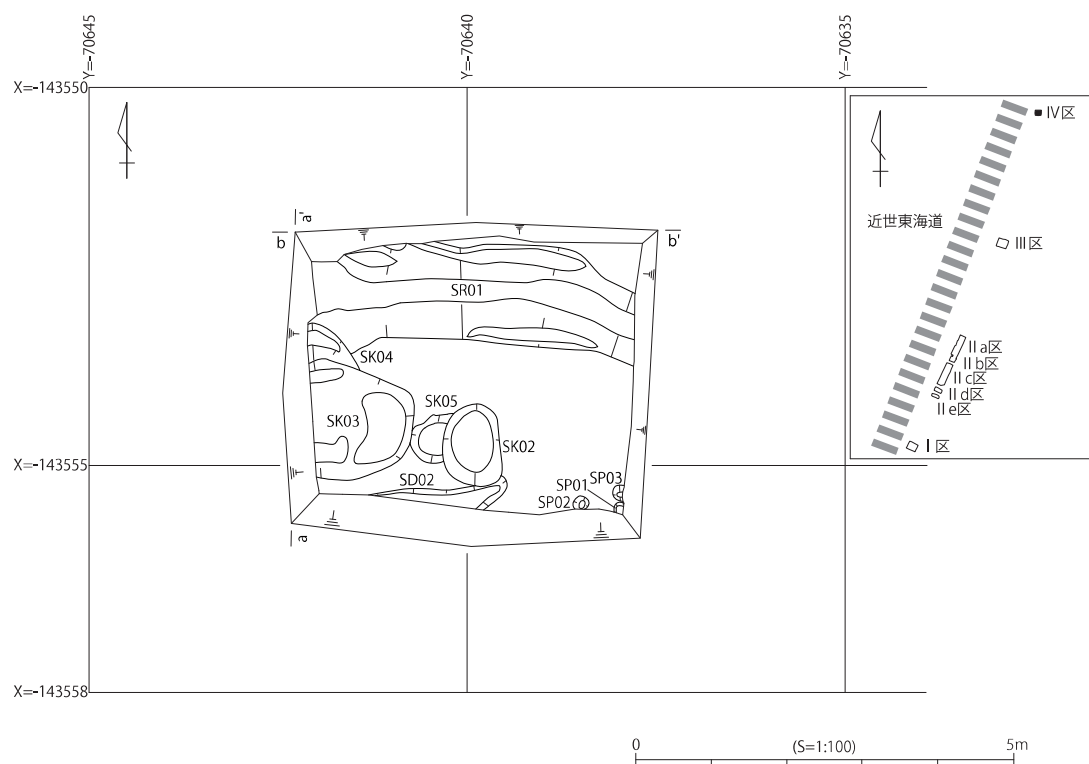


Fig.69 IV区 遺構全体図



Fig.70 IV区 西壁面図



Fig.71 IV区 北壁面図

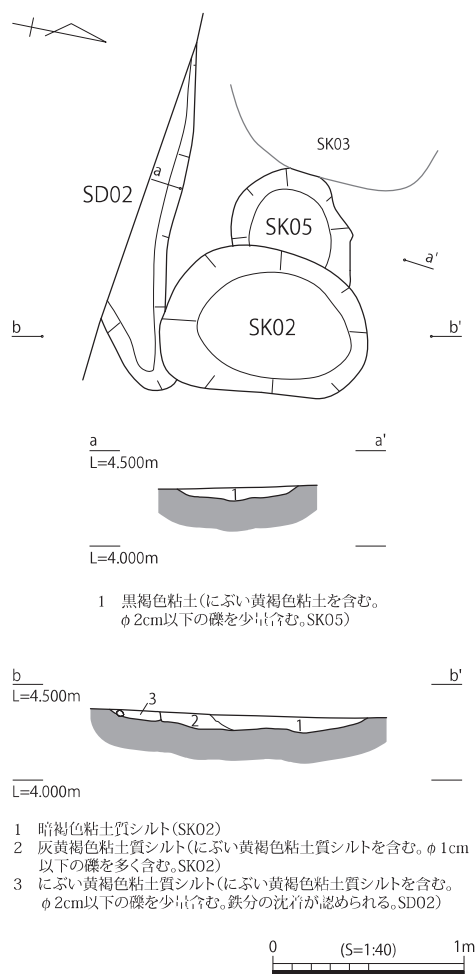


Fig.72 IV区 SD02・SK02・SK05 遺構図

述するIV層下面で検出したSK03にSK05が切られることから、IV層形成以前の遺構である可能性が高いものと考えられる。

SK03 (Fig. 73) 調査区中央部から南西隅部で検出した大型土坑で、調査区外へと延びる。遺構の北側にSK04を切る。遺構の平面形は、調査区外に延びるため詳細な形状は不明であるが、不整円形を呈するものと考えられる。遺構はV字状の断面形を有し、東側で段をもつ。遺構の規模は南北が1.60 m、東西が1.36 m以上、検出面からの深さが0.49 mを測る。埋土に黄褐色シルトのブロック土を多量に含むことから、人為的に埋

(2) 遺 構

i) 溝

SD02 (Fig. 72) 調査区南壁際に検出した溝状遺構であるが、遺構の大半が調査区外になるため溝かどうか明らかではない。しかしながら東西方向に直線的に延びることから溝として認識した。調査区内で東西方向に1.90 mにわたり検出した。幅は東端で0.38 mを測り、遺構の断面形は浅い皿状で、遺構の底面は東から西へゆるやかに下降する。SK02に切られ、遺構の東端は削平のため途切れる。遺構から遺物は出土しなかったが、IV層が形成される以前に埋没するため、詳細な年代は不明ながら、戦国時代以前と推定される。

ii) 土坑

SK02・SK05 (Fig. 72) 調査区中央部南壁寄りで検出した浅い土坑である。SK05がSK02に切られる。SK02は南北に長軸をもつ楕円形を呈する土坑で、浅い皿状を呈する断面形をもつ。SK05はSK02・SK03に切られるため、遺構の形状は不明確ながら円形を呈するものと考えられる。断面形は浅い皿状を呈する。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、遺構の詳細な年代は不明である。また遺構の掘り込み面については、IV層上面か下面かの判断が困難な状況であるが、ともに埋土の特徴が類似すること、後

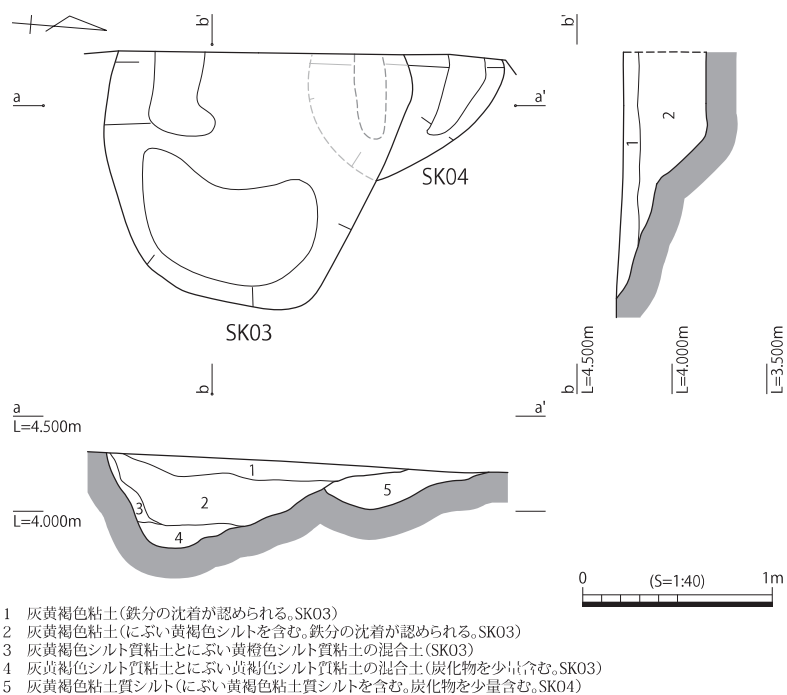


Fig.73 IV区 SK03・SK04 遺構図

め戻された可能性が高い。遺構から年代の判明する遺物が出土しなかったため詳細な年代は不明であるが、IV層が形成される以前に埋没するため、戦国時代以前の遺構であると推定される。

SK04 (Fig. 73) SK03に切られる土坑で、遺構の大半が調査区外に延びる。遺構の北部にある自然流路 SR01 を切る。遺構の平面形は円形を呈するものと推定される。断面形はゆるやかなV字形を呈する。埋土はSK03と同様に黄褐色シルトのブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺構から年代の判明する遺物が出土しなかったため詳細な年代は不明であるが、IV層が形成される以前に埋没するため、戦国時代以前の遺構であると推定される。

iii) 自然流路

SR01 (Fig. 74) 調査区北部で検出した、東西方向に走行をもつ自然流路と考えられる。平面的に検出した当初は、直線的に調査区を貫通すると思っていたため、溝という認識であったが、調査を進めるなかで遺構の形状がやや蛇行することが判明したため、調査範囲が狭いものの自然流路という認識に変更するに至った。調査区内で4.2 mにわたり調査した。遺構の幅は端の狭いところで0.90 m、中央部で1.32 m、断面形はV字～U字形を呈し、検出面からの深さ0.25～0.64 mを測る。遺構の西側をSK04に切られる。遺構の底面は東から西へ傾斜をもち、西壁から東へ0.5 mの位置で急激に落ち込み、段を有する。埋土からは自然に埋没したものと考えられ、こぶし大礫が多量に認められるため、流速の速さが推定される。遺構からほとんど遺物が出土しなかったが、先述のSK04に切られること、IV層下面で検出できることが明らかであるため、IV層形成以前の遺構であると考えられる。わずかに出土した内耳鍋やかわけなどから、戦国時代から江戸時代にかけて埋没した可能性が考えられる。

(3) 遺物 (Fig. 75)

129はSR01出土のかわけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。口径11.5cmを測る中皿である。130は東壁で検出したSP12出土の土師器内耳鍋A類である。なで肩の体部から口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は上方へつまみ上げる。外面は斜め方向のハケメ調整。

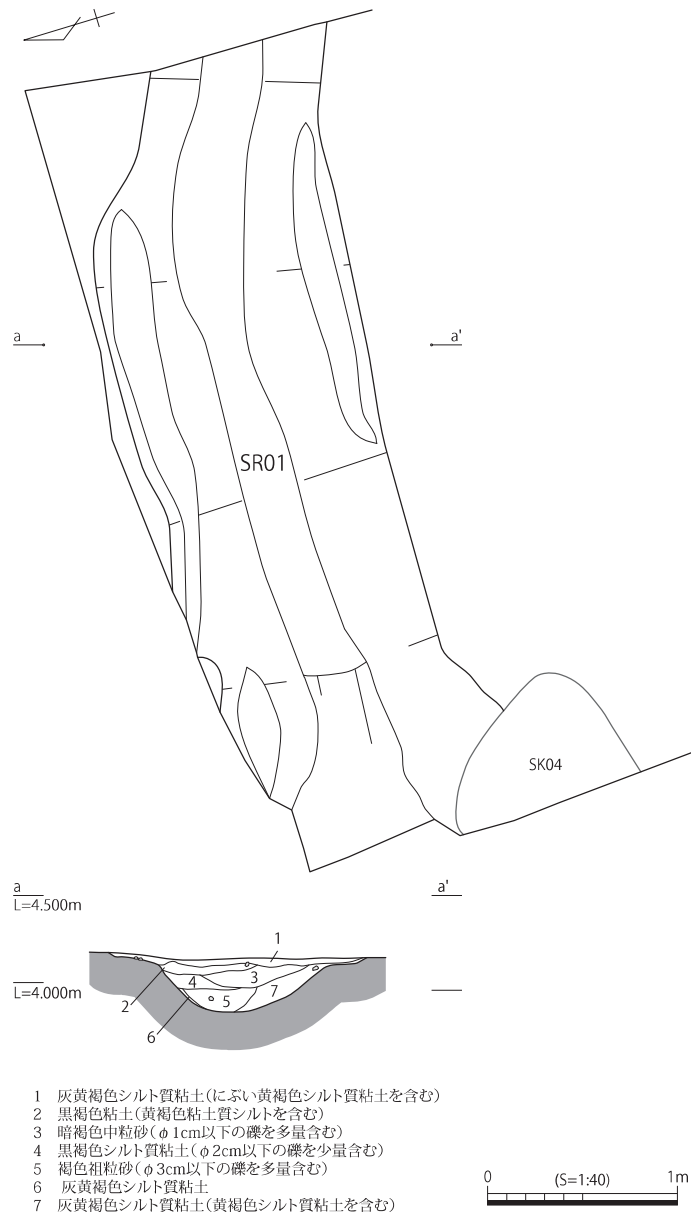
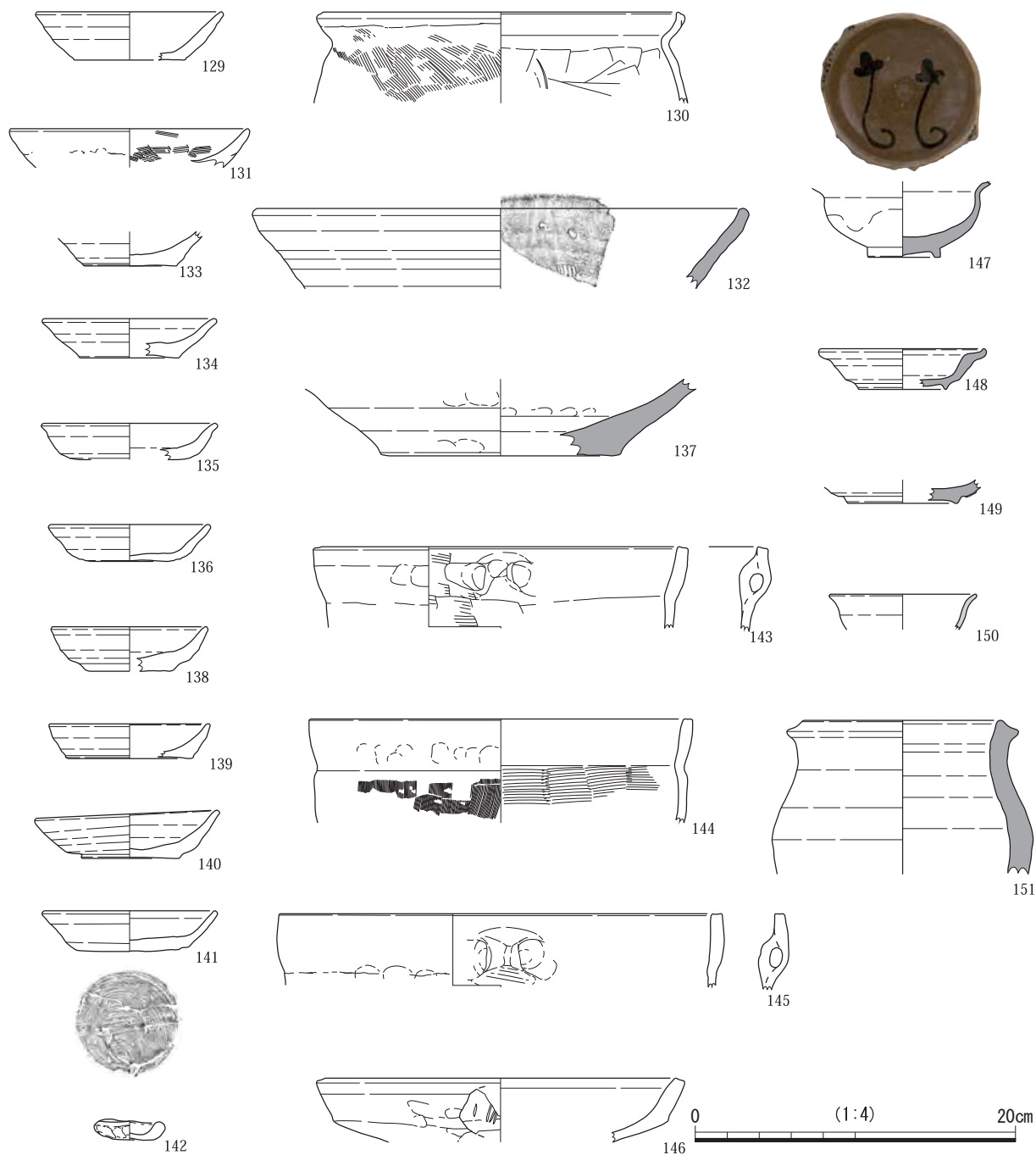


Fig.74 IV区 SR01 遺構図



129 : SR01、130 : SP12、131・132 : SP05、133～136・149・150 : III層、137～148・151 : III-4層

Fig.75 IV区 出土遺物

131・132 は北壁で検出した SP05 出土遺物である。131 は土師器かわらけで口径 14.8cm とやや大型の皿。132 は瀬戸美濃産の播鉢の小片である。灰褐色の光沢のない釉がかかる。古瀬戸後IV期新段階と考えられる。

133～136・149・150 はIII層出土遺物で、133～136 は土師器かわらけである。ロクロ成形で底部は回転糸切痕を残す。149 は瀬戸美濃産の志野丸皿である。底部の破片で登窯第1段階第2小期と考えられる。150 は産地不明の磁器碗である。明緑灰色の釉がかかる。

137～148・151 はIII-4層出土遺物である。137 は渥美産の鉢底部である。残りが悪く全形は不明であるが、大型の鉢になると考えられる。138～141 は土師器かわらけである。ロクロ成形で底部は

回転糸切痕を残す。口径 9.6 ～ 11.7cm を測る小皿である。142 は手づくねのかわらけで、口径 3.8cm を測る完形品である。ユビオサエが顕著である。143 ～ 145 は土師器の内耳鍋である。口縁部のみ残存する内彎形内耳鍋 B2 類で、16 世紀後半に属する。146 は土師器炮烙と考えられる。口縁部外面に剥離痕が認められ、刻み目が観察される。147 は唐津産陶器の碗である。口縁端部を欠くものの残りが良く、内湾する体部から口縁部は外反する。底部は削り出しにより断面方形の高台が付く。内面と体部外面中位まで灰褐色の土灰釉がかかる。見込部に草本文が認められる。また口縁部内面にも施文が認められるが、詳細は不明である。底径 4.5cm を測る。Ⅲ期 17 世紀後半と考えられる。148 は瀬戸美濃産の折縁皿である。大窯 3 段階と考えられる。151 は常滑産の壺で、口縁部から体部までの破片である。12 型式江戸時代前期と考えられる。

(4) 小 結

今回の調査範囲の最北端部に位置するⅣ区では、自然流路や不整形を呈する土坑などが検出されたが、他の調査区で普遍的にみられた建物や井戸などの、居住空間にみられる遺構がほとんど検出されなかった。基盤層の直上にはⅣ層、さらにその上位には幾重にもわたる整地土とみられる堆積があり、その中に内耳鍋を中心とする遺物が多量に出土したものの、基盤層で検出した遺構からはほとんど遺物が出土しなかった。わずかながら出土した遺物からは、ほかの調査区でみられる戦国時代末から江戸時代初頭の遺物が認められたため、城下町形成期の遺構と考えられる。つまりⅣ区の遺構群もⅠ～Ⅲ区の遺構群と同時期の遺構群であると認識している。遺構の少なかったⅢ区（旅籠町）、遺構の多数認められたⅠ・Ⅱ区（塩町）、Ⅳ区の町名は「伝馬町」で、町名が変わると遺構の様相も大きく異なることは当時の町割りを考える上で興味深い。

Ⅳ区は基盤層から現地表面までの深さが 2.0 m をはかり、他の調査区とくらべ堆積が厚いことが明らかで、盛土（Ⅰ層）、近代の造成土であるⅡ層に加え、先にも触れたが整地土とみられる層（Ⅲ層）が幾重にも認められた。Ⅲ層の形成時期は近世と考えており、近世城下町の整備に伴う整地土の可能性が指摘できる。概要で触れたが、Ⅲ層中において内耳鍋の破片が密集して出土する層（Ⅲ-4 層・写真図版 PL.29-1）を検出しており、この層を検討したが明確な遺構としては認識できず、遺物の分布範囲を SX01 として捉えた。この面で遺構検出を行ったが、ほかに遺構は認められなかった。Ⅲ-4 層から出土した土器は、多量にもかかわらず（コンテナ 4 箱分にも及ぶ）ほとんど接合しないことから、破損した土器をまとめて廃棄したものと推定される。近世城下町の生活面について明らかにすることは困難ではあるが、このような大量廃棄の存在は近在に生活域の存在を示唆するものと思われる。

Tab.3 I 区 遺構一覧表（1）

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SD	01	I	5IC14・ m4・m5	W18°N	4.24	0.28	13世紀	直線	皿	3.61	3.55	0.06		SP08・SE01に切られる	
SD	02	I	5ICm4	W16°N	2.05	0.26	13世紀	直線	U字	3.60	3.42	0.18		SP14・SP27に切られる	西側と東側で遺構底面高が異なる。中央部で段が付く
SE	01	I	5ICm4・ m5	—	(1.12)	(0.66)	江戸後期	円か	U字	3.97	(2.34)	(1.63)	瀬戸美濃火鉢、染付	SD01・SX02を切る	
SE	02	I	5ICm4・ m5	—	(1.03)	0.91	大塚3・4	楕円	U字	3.58	1.96	1.62	瀬戸美濃、初山、志戸呂、かわらけ、内耳鍋	—	西側壁面が浸食を受けオーバーハングする
SK	01	I	5ICm5	W23°N	0.89	0.27	—	楕円	皿	3.72	3.47	0.25		—	
SK	02	I	5IC14	W11°N	(0.90)	0.56	13世紀	楕円	皿	3.67	3.52	0.15	山茶碗など	SP34に切られる	
SK	03	I	5IC14	W38°N	0.52	0.30	—	楕円	皿	3.65	3.56	0.09		—	
SP	01	I	5ICm4	—	(0.39)	(0.14)	—	円か	U字	3.90	3.55	0.35		—	
SP	02	I	5ICm4	—	(0.48)	(0.23)	—	楕円	U字	3.62	3.51	0.11		—	
SP	03	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	04	I	5ICm4	—	0.25	0.19	—	楕円	U字	3.62	3.49	0.13		—	
SP	05	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番。SP06柱痕跡
SP	06	I	5ICm4	—	0.36	0.33	—	円	箱	3.65	3.29	0.36		—	柱痕跡が認められる
SP	07	I	5ICm4	—	0.27	0.26	—	円	U字	3.63	3.33	0.30		—	柱痕跡が認められる。SA01柱穴
SP	08	I	5ICm4	—	0.16	0.06	—	円か	U字	3.66	3.58	0.08		—	
SP	09	I	5ICm4	—	0.31	0.28	—	円	U字	3.65	3.40	0.25		—	柱痕跡が認められる
SP	10	I	5ICm4	—	0.24	0.21	—	円	U字	3.65	3.38	0.27		—	
SP	11	I	5ICm4	—	0.18	0.13	—	楕円	皿	3.68	3.64	0.04		—	
SP	12	I	5IC14	—	0.28	0.27	—	円	U字	3.61	3.30	0.31		—	柱痕跡が認められる
SP	13	I	5IC14	—	0.29	0.27	—	円	U字	3.65	3.38	0.27		—	柱痕跡が認められる。SA01柱穴
SP	14	I	5ICm4	—	0.27	0.22	—	円	U字	3.68	3.49	0.19		SD02を切る	
SP	15	I	5ICm4	—	0.36	0.29	—	円	U字	3.70	3.29	0.41		SP16・SP37を切る	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP	16	I	5ICm4	—	(0.20)	(0.13)	—	円か	U字	3.68	3.51	0.17		SP15・SP37に切られる	
SP	17	I	5IC14・m4	—	0.24	0.23	—	円	U字	3.68	3.50	0.18		—	
SP	18	I	5IC14	—	0.21	0.21	—	円	U字	3.61	3.29	0.32		—	柱痕跡が認められる
SP	19	I	5IC14	—	0.27	0.20	—	円	U字	3.57	3.39	0.18		—	
SP	20	I	5IC14	—	0.39	0.37	—	円	U字	3.54	3.27	0.27		—	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP	21	I	5IC14	—	0.20	0.17	—	楕円	U字	3.54	3.44	0.10		—	
SP	22	I	5IC14	—	0.31	0.28	—	楕円	U字	3.61	3.47	0.14		SP23を切る	根石を伴う
SP	23	I	5IC14	—	0.30	(0.15)	—	不整円	U字	3.57	3.40	0.17		SP22に切られる	
SP	24	I	5IC14	—	0.21	0.18	—	円	U字	3.63	3.45	0.18		—	
SP	25	I	5IC14	—	(0.21)	(0.08)	—	円か	U字	3.80	3.62	0.18		SP36に切られる	
SP	26	I	5IC14	—	(0.15)	(0.04)	—	円か	U字	3.78	3.63	0.15		—	
SP	27	I	5ICm4	—	0.20	0.19	—	円	U字	3.60	3.42	0.18		SD02を切る	柱痕跡が認められる。根石を伴う
SP	28	I	5IC14	—	0.26	0.20	—	楕円	U字	3.57	3.44	0.13		SX01に切られる	

Tab.4 I 区 遺構一覧表 (2)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	29	I	5ICm4	—	(0.35)	(0.03)	—	楕円か	皿	3.73	3.68	0.05		—	
SP	30	I	5IC14	—	0.20	0.18	—	円	U字	3.59	3.44	0.15		—	柱痕跡が認められる。SA01
SP	31	I	5IC14	—	0.36	0.30	—	円	U字	3.59	(3.38)	0.23	山茶碗	—	こぶし大以下の礫を充填する
SP	32	I	5IC14	—	0.29	0.28	—	円	U字	3.60	3.47	0.13		—	
SP	33	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	34	I	5IC14	—	0.56	0.45	—	円	U字	3.66	3.24	0.42		SK02を切る	柱痕跡が認められる
SP	35	I	5IC14	—	(0.19)	(0.57)	—	円か	U字	3.80	3.62	0.18		—	
SP	36	I	5IC14	—	(0.45)	(0.23)	—	円か	U字	3.86	3.51	0.35		SP25を切る	柱痕跡が認められる
SP	37	I	5ICm4	—	(3.65)	(3.42)	—	円	U字	3.66	3.46	0.20		SP15に切られる。SP16を切る	
SP	38	I	5IC14	—	(0.24)	(0.20)	—	円	U字	3.61	3.42	0.19		SK02に切られる	
SP	39	I	5ICm4	—	(0.20)	(0.12)	—	円	U字	3.60	3.46	0.14		SX03に切られる	
SP	40	I	5ICm4	—	0.32	0.28	—	不整円	U字	3.69	3.45	0.24		SP41を切る	
SP	41	I	5ICm4	—	0.23	(0.10)	—	楕円	U字	3.69	3.56	0.13		SP40に切られる	
SP	42	I	5IC14	—	0.25	0.20	—	楕円	V字	3.65	3.56	0.09		—	
SP	43	I	5IC14	—	(0.29)	—	—	—	V字	3.80	3.66	0.14		—	
SP	44	I	5IC14	—	(0.32)	—	—	—	U字	3.85	3.70	0.15		—	
SA	01	I	5IC14・m4	W21°N	4.28	0.27	—	—	—	3.63～ 3.57	3.60～ 3.43	—		—	SP07・SP13・SP30
SX	01	I	5IC14	W27°N	2.19	0.21	—	弧状	U字	3.60	3.51	0.09		SP28を切る	
SX	02	I	5ICm5	W38°N	(0.42)	—	—	直線	U字	3.78	3.61	0.17		SE01に切られる	調査区外へ延びる
SX	03	I	5ICm4	W26°N	(2.28)	(0.12)	—	不明	U字	3.57	3.45	0.12		SP39を切る	調査区外へ延びる

Tab.5 III区 遺構一覧表

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SK	01	III	5GDg12	—	0.68	0.58	—	楕円形	皿	3.77	3.60	0.17		—	
SK	02	III	5GDh13	—	(0.95)	—	—	不明	箱	4.56	4.12	0.44		—	
SK	03	III	5GDh12	—	(0.30)	—	—	不明	U字	4.32	4.10	0.22		—	
SK	04	III	5GDg12	—	(0.49)	—	—	不明	U字	4.37	4.11	0.26		—	
SK	05	III	5GDh12	—	(0.83)	—	—	不明	U字	4.71	4.31	0.40		—	
SK	06	III	5GDh13	—	(0.68)	—	—	不明	U字	4.12	3.78	0.34		—	
SP	01	III	5GDg12	—	0.53	0.53	—	円	U字	3.67	3.50	0.17		—	
SP	02	III	5GDh12	—	(0.22)	—	—	不明	U字	4.18	4.05	0.13		—	
SX	01	III	5GDg13	—	(2.30)	(0.75)	—	不明	U字	4.08	3.22	0.86	青磁碗	—	

Tab.6 II区 遺構一覧表(1)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SD	01	II c北	5HCs9・ s10	N24°E	(18.89)	(0.40)	—	直線	皿	3.87	3.82	0.05		SP113・SP114に 切られる。SK09 を切る	
SD	02	II c南	5HCp14・ p15・ q14・q15	W15°N	(4.91)	1.38～ 1.67	—	直線	皿	3.80	3.70	0.10		SP137・SP164・ SP167・SP169・ SP170・SP171・ SP172・SP173・ SP176に切られ る。SP201を切 るか	
SD	03	II c北	5HCq13	N9°W	(0.60)	(0.28)	—	直線	皿	3.86	3.83	0.03		SE03に切られる	礫を充填
SD	04A	II c南	5HCp15・ q15	W15°N	(4.90)	0.28～ 0.32	—	直線	V字	3.75	3.59	0.16		SE02・SP153・ SP159・SP160・ SP161・SP162に 切られる。SD04AがSD04Bに先 行 SP202・SP203を 切る	
SD	04B	II c南	5HCp15・ q15	W15°N	(4.90)	1.70～ 2.28	—	直線	皿	3.87	3.67	0.20	渥美甕	SE02・SP153・ SP159・SP160・ SP161・SP162に 切られる。 SP202・SP203を 切る	
SD	05	II c南	5HCp14	N8°E	(0.85)	(0.38)	—	直線	皿	3.88	3.84	0.04		SP191・SP192に 切られる	
SD	06	II c南	5HCq14	N33°E	(1.28)	(0.43)	—	直線	皿	3.86	3.79	0.07		SP199を切る	
SD	07	II c南	5HCp15・ q15	W10°N	2.13	0.29	—	直線	箱	3.79	3.73	0.06		SD04に切られ る	
SD	08	II c南	5HCp15	W14°N	(1.19)	(0.37)	—	直線	U字	3.80	3.65	0.15		SE02・SP163に 切られる	
SE	01	II c北	5HCq12	—	1.73	1.70	13世紀	円	箱	3.86	3.03	0.83		SD01を切る	
SE	02	II c南	5HCp15	—	1.48	1.26	大窯3前	楕円	箱	3.83	1.61	2.22		SP161・SP162に 切られる。 SD04を切る	
SE	03	II c北	5HCq13	—	0.86	0.81	登窯2	円	箱	3.88	(1.50)	(2.38)	瀬戸美濃志 野・天目	SD03を切る	下層にこぶし大礫を 充填
SK	01	II a	5HDa6	—	(0.60)	0.44	—	楕円	皿	3.86	3.80	0.06		SP03に切られる	
SK	02	II a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SK	03	II a	5HCs8	—	1.52	0.70	—	不整楕円	皿	3.85	3.75	0.10		—	
SK	04	II a	5HCt6	—	(0.74)	—	—	—	U字	4.13	3.66	0.47		—	
SK	05	II a	5HCt6	—	(0.84)	—	—	—	U字	4.35	3.93	0.42		—	
SK	06	II a	5HCt6	—	(0.61)	—	—	—	皿	4.39	4.22	0.17		—	
SK	07	II a	5HCt7	—	(0.51)	—	—	—	皿	4.12	3.99	0.13		—	
SK	08	II a	5HCt6・ 5HDa6	—	(1.11)	—	—	—	U字	4.20	3.95	0.25		SP03・SK01・ SX01を切る	
SK	09	II b	5HCs9	N7°E	(2.03)	(1.79)	13世紀	隅丸方形	箱	3.72	3.64	0.08	山茶碗、渥 美	SP56・SP118・ SD01に切られ る。SP129・ SP133を切る	
SK	10	II c北	5HCq13	N19°W	(0.61)	(0.40)	—	楕円	皿	3.75	3.70	0.05		SK13・SD01に 切られる	
SK	11	II c北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SE03に変更したため 欠番
SK	12	II c北	5HCq12	—	(0.44)	(0.30)	—	円か	皿	3.90	3.86	0.04		—	調査区外に延びる

Tab.7 II区 遺構一覧表(2)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	埴属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SK	13	IIc北	5HCq13	—	(0.54)	(0.52)	—	不整円か	皿	3.90	3.76	0.14	山茶碗・伊勢型鍋	SD01・SX07に切られる	山茶碗の皿に墨書
SK	14	IIc北	5HCq13	—	(0.75)	(0.14)	—	楕円か	U字	3.74	3.46	0.28		SX07・SK13に切られる	
SK	15	IIc南	5HCq14	W35°N	(0.77)	(0.48)	—	楕円	皿	3.80	3.69	0.11		SD02・SP178・SP179に切られる	
SK	16	IIc南	5HCq14	N36°E	(0.54)	(0.37)	—	楕円	皿	3.82	3.71	0.11		SD01・SP177・SP181に切られる	
SK	17	IIc南	5HCp14	—	(0.69)	—	—	—	U字	4.16	3.97	0.19		—	
SK	18	IIc南	5HCq14	—	(0.80)	—	—	—	U字	4.39	4.17	0.22		—	
SK	19	IIc南	5HCq15	—	(1.05)	—	—	—	皿	4.39	4.11	0.28	香合蓋	SK20を切る	
SK	20	IIc南	5HCq15	—	(0.75)	—	—	—	U字	4.33	4.08	0.25		SK19に切られる	
SK	21	IIc南	5HCp15	—	(0.82)	—	—	—	U字	4.13	3.88	0.25		—	
SK	22	IIc南	5HCp15	—	(0.83)	—	—	—	皿	4.03	3.94	0.09		—	
SK	23	IIc南	5HCp15	—	(0.52)	—	—	—	U字	4.34	4.09	0.25		—	
SK	24	IIc南	5HCp14	—	(0.51)	—	—	—	V字	4.40	4.06	0.34		—	
SK	25	IIc南	5HCp14	—	(0.84)	—	—	—	U字	4.46	4.07	0.39	銭貨	—	寛永通宝8枚。土坑墓か
SK	26	IIc南	5HCq14	—	(0.77)	—	—	—	U字	4.11	3.86	0.25		—	
SP	01	IIa	5HCt6	—	(0.31)	0.27	—	楕円	皿	3.93	3.88	0.05		SP02に切られる	柱痕跡有
SP	02	IIa	5HCt6	—	0.43	0.35	—	楕円	U字	3.89	3.74	0.15		SP01を切る	
SP	03	IIa	5HDa6	—	0.27	(0.18)	—	円	U字	3.89	3.80	0.09		SK01を切る	
SP	04	IIa	5HDa6	—	0.31	(0.30)	—	楕円	U字	3.86	0.80	0.06		SP30・SK01に切られる	
SP	05	IIa	5HDa6	—	0.33	0.27	—	不整円	U字	3.89	3.70	0.19		SP30を切る	
SP	06	IIa	5HCt6・5HDa6	—	0.21	0.20	—	円	皿	3.88	3.82	0.06		SP26を切る	
SP	07	IIa	5HCt6	—	0.34	0.33	—	円	U字	3.91	3.60	0.31	砥石	SP08を切る	根石
SP	08	IIa	5HCt6	—	0.23	(0.23)	—	円	U字	3.91	3.62	0.29	碗形滓	SP07に切られる	
SP	09	IIa	5HCt6	—	0.30	0.29	—	円	U字	3.87	3.72	0.15		SX01・SP83を切る	
SP	10	IIa	5HCt6・t7	—	0.32	0.32	—	不整円	U字	3.85	3.67	0.18		—	
SP	11	IIa	5HCt7	—	0.40	(0.30)	—	楕円	箱	3.87	3.77	0.10		SP11に切られる	
SP	12	IIa	5HCt7	—	0.38	0.29	—	楕円	皿	3.88	3.80	0.08		SP12を切る	
SP	13	IIa	5HCt7	—	0.30	0.28	—	楕円	U字	3.88	3.70	0.18		SP39を切る	
SP	14	IIa	5HCt7	—	0.37	0.35	—	円	U字	3.85	3.55	0.30		—	
SP	15	IIa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	16	IIa	5HCt7	—	0.23	(0.20)	—	円か	U字	4.29	3.78	0.51		—	
SP	17	IIa	5HCt7	—	0.24	(0.21)	—	円か	U字	4.30	3.74	0.54		—	
SP	18	IIa	5HCt7	—	0.27	0.26	—	円	皿	3.90	3.82	0.18		—	
SP	19	IIa	5HCt7	—	0.21	0.20	—	円	皿	3.88	3.85	0.03		—	
SP	20	IIa	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	21	IIa	5HCt7	—	0.30	0.29	—	円	U字	3.88	3.80	0.08		—	
SP	22	IIa	5HCt7	—	0.24	0.23	—	円	U字	3.89	3.80	0.09		—	

Tab.8 II区 遺構一覧表(3)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	23	II a	5HCt7	—	0.33	0.24	—	楕円	皿	3.87	3.80	0.07		SP24を切る	
SP	24	II a	5HCt7	—	0.31	(0.25)	—	楕円	皿	3.88	3.81	0.07		SP23に切られる	
SP	25	II a	5HCt7	—	0.22	0.20	—	円	皿	3.88	3.82	0.06		—	
SP	26	II a	5HDa6	—	0.42	0.40	—	円	皿	3.89	3.85	0.04		SP06に切られる	
SP	27	II a	5HCt7	—	0.32	(0.32)	—	楕円	U字	3.86	3.71	0.15		SP28を切る	
SP	28	II a	5HCt7	—	0.26	(0.18)	—	楕円	U字	3.86	3.74	0.12		SP27に切られる	
SP	29	II a	5HCt8	—	0.32	0.27	—	楕円	皿	3.87	3.84	0.03		—	
SP	30	II a	5HDa6	—	0.36	(0.31)	—	円	U字	3.87	3.69	0.18		SP05に切られる	
SP	31	II a	5HCs8・t8	—	0.27	0.26	—	楕円	U字	3.85	3.62	0.23		—	
SP	32	II a	5HCt8	—	0.15	0.12	—	円	U字	3.87	3.79	0.08		SP33を切る	
SP	33	II a	5HCt8	—	0.37	(0.28)	—	楕円	皿	3.86	3.80	0.06		SP32に切られる	
SP	34	II a	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	35	II a	5HCt8	—	0.38	0.38	—	円	U字	3.87	3.48	0.39		—	SA01柱穴
SP	36	II a	5HCt8	—	(0.18)	(0.06)	—	円か	皿	3.92	3.87	0.05		—	
SP	37	II a	5HCs9	—	0.24	0.20	—	楕円	U字	3.84	3.72	0.12		SP38を切る	
SP	38	II a	5HCs9	—	(0.20)	0.11	—	楕円	皿か	3.85	3.79	0.06		SP37に切られる	
SP	39	II a	5HCt7	—	0.32	(0.19)	—	楕円	U字	3.86	3.63	0.23		SP13に切られる	
SP	40	II a	5HCs8・t8	—	0.28	0.28	—	円	皿	3.86	3.78	0.08		SP41を切る	
SP	41	II a	5HCt8	—	(0.21)	(0.15)	—	円か	皿	3.86	3.82	0.04		SP40に切られる	
SP	42	II a	5HCs8	—	0.22	(0.21)	—	円	皿	3.87	3.73	0.14		SP43に切られる	
SP	43	II a	5HCs8	—	0.35	0.28	—	楕円	U字	3.85	3.65	0.20		SP42を切る	
SP	44	II a	5HCt9	—	(0.22)	(0.11)	—	円か	皿	3.83	3.76	0.07		—	
SP	45	II a	5HCs9・t9	—	0.36	0.34	—	円	箱	3.85	3.51	0.34		—	
SP	46	II a	5HCs9	—	0.26	0.25	—	円	皿	3.87	3.81	0.06		—	
SP	47	II a	5HCt7・t8	—	(0.37)	(0.12)	—	円か	箱	4.22	3.81	0.41		—	
SP	48	II a	5HCs9・t9	—	0.34	0.32	—	円	箱	3.78	3.51	0.27		—	SA01柱穴
SP	49	II a	5HCs8	—	0.28	0.25	—	楕円	箱	3.85	3.67	0.18		—	
SP	50	II a	5HCs8	—	0.33	0.33	—	円	U字	3.85	3.58	0.27		—	
SP	51	II a	5HCs8	—	0.34	(0.27)	—	円か	皿	3.91	3.85	0.06		—	根石
SP	52	II a	5HCs9	—	0.20	0.17	—	楕円	皿	3.86	3.80	0.06		—	
SP	53	II a	5HCs9	—	(0.32)	(0.13)	—	円か	箱	3.91	3.80	0.11		—	
SP	54	II a	5HCs9	—	(0.34)	(0.16)	—	円か	U字	3.93	3.81	0.12		—	
SP	55	II a	5HCs9	—	0.45	0.43	—	円	U字	3.84	3.38	0.46	獣脚	—	SA01柱穴
SP	56	II a	5HCs9	—	0.55	0.31	—	楕円	V字	3.82	3.57	0.25		—	2基重複の可能性
SP	57	II a	5HCs9	—	(0.29)	0.22	—	楕円	U字	3.86	3.74	0.12		—	
SP	58	II a	5HCs9	—	(0.17)	(0.07)	—	円か	U字	3.93	3.82	0.11		—	
SP	59	II a	5HCs9	—	(0.25)	(0.13)	—	円か	U字	3.92	3.74	0.18		—	
SP	60	II a	5HCs9	—	0.26	(0.19)	—	円か	U字	3.91	3.78	0.13		—	
SP	61	II a	5HCs9	—	(0.31)	0.31	—	楕円	皿	3.84	3.79	0.05		—	
SP	62	II a	5HCs9	—	(0.27)	(0.13)	—	円か	U字	3.83	3.74	0.09		—	
SP	63	II e	5HCo17	—	(0.21)	(0.21)	—	円	U字	3.85	3.80	0.05		—	

Tab.9 II区 遺構一覧表(4)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	64	II e	5HCo17	—	0.32	0.25	—	楕円	V字	3.77	3.32	0.45		SP65を切る	
SP	65	II e	5HCo17	—	0.35	0.29	—	円	V字	3.69	3.37	0.32		SP64に切られる	
SP	66	II e	5HCo17	—	(0.30)	(0.20)	—	円か	U字	3.91	3.80	0.11		SP79を切る	
SP	67	II e	5HCo17	—	(0.33)	(0.17)	—	楕円	V字	3.86	3.50	0.36		—	
SP	68	II e	5HCo17	—	(0.34)	(0.13)	—	円	V字	3.91	3.54	0.37		—	
SP	69	II e	5HCo17	—	0.31	0.26	—	楕円	皿	3.80	3.72	0.08		—	
SP	70	II e	5HCo17	—	(0.32)	(0.10)	—	円	U字	3.81	3.58	0.23		—	
SP	71	II e	5HCo17	—	(0.25)	(0.12)	—	円か	U字	3.82	3.70	0.12		SP72を切る	
SP	72	II e	5HCo17	—	(0.20)	(0.06)	—	円か	U字	3.81	3.68	0.13		SP71に切られる	
SP	73	II e	5HCo17	—	(0.20)	(0.17)	—	楕円	V字	3.85	3.67	0.18		—	
SP	74	II e	5HCo17	—	(0.36)	(0.16)	—	円	V字	3.86	3.28	0.58		—	
SP	75	II e	5HCo17	—	(0.23)	(0.06)	—	円か	U字	3.87	3.78	0.09		—	
SP	76	II e	5HCo17	—	0.21	0.18	—	円	U字	3.78	3.64	0.12		SP77を切る	
SP	77	II e	5HCo17	—	0.22	0.18	—	円	U字	3.76	3.60	0.16		SP76に切られる	
SP	78	II e	5HCo17	—	(0.18)	0.11	—	楕円	U字	3.76	3.70	0.06		—	
SP	79	II e	5HCo17	—	(0.34)	0.32	—	円	U字	3.86	3.75	0.11		SP66に切られる	
SP	80	II e	5HCo17	—	(0.47)	(0.08)	—	円か	V字	4.21	3.78	0.43		—	
SP	81	II e	5HCo17	—	(0.68)	—	江戸時代	円か	U字	4.49	4.28	0.21	軒丸瓦・ 軒平瓦	—	
SP	82	II a	5HCt6	—	(0.19)	(0.13)	—	楕円	U字	3.85	3.70	0.15		SX01を切る	
SP	83	II a	5HCt6	—	0.45	0.28	—	不整円	U字	3.82	3.73	0.09		SP09・SX01を 切る	
SP	84	II a	5HCt8	—	(0.31)	—	—	—	U字	4.14	3.98	0.16		—	
SP	85	II a	5HCt7	—	(0.26)	—	—	—	U字	4.14	4.04	0.10		—	
SP	86	II a	5HCt7	—	(0.18)	—	—	—	U字	3.92	3.75	0.17		—	
SP	87	II a	5HCt8	—	(0.47)	—	—	—	U字	4.32	4.07	0.25		—	
SP	88	II a	5HCs8	—	(0.55)	—	—	—	V字	4.32	4.03	0.29		—	
SP	89	II a	5HCs8	—	(0.50)	—	—	—	V字	4.20	3.88	0.32		—	
SP	90	II a	5HCs8	—	(0.36)	—	—	—	V字	3.91	3.82	0.09		—	
SP	91	II a	5HCt6	—	(0.55)	—	—	—	皿	4.20	3.99	0.21		SP92を切る	
SP	92	II a	5HCt6	—	(0.29)	—	—	—	U字	4.19	3.87	0.32		SP91に切られる	
SP	93	II d	5HCo16	—	(0.36)	(0.28)	—	楕円	皿	3.83	3.77	0.06		SP110・SP111を 切る	
SP	94	II d	5HCo16	—	0.30	0.28	—	楕円	U字	3.81	3.50	0.31		—	
SP	95	II d	5HCo16	—	0.33	0.29	—	円	U字	3.81	3.71	0.10		—	
SP	96	II d	5HCo16	—	0.38	0.27	—	楕円	U字	3.77	3.36	0.41		—	
SP	97	II d	5HCp16	—	(0.26)	(0.20)	—	円	皿	3.78	3.72	0.06		SP103に切られる	
SP	98	II d	5HCp17	—	(0.23)	(0.18)	—	楕円	U字	3.74	3.51	0.23		—	
SP	99	II d	5HCp17	—	0.38	0.24	—	楕円	U字	3.74	3.57	0.17		—	
SP	100	II d	5HCp17	—	0.27	0.26	—	円	U字	3.71	3.35	0.36		—	
SP	101	II d	5HCo16	—	0.31	0.25	—	楕円	U字	3.74	3.51	0.23		—	
SP	102	II d	5HCo16	—	0.32	0.27	—	楕円	U字	3.74	3.55	0.19		SP109を切る	
SP	103	II d	5HCp16	—	0.20	0.12	—	楕円	U字	3.76	3.58	0.18		SP97に切られる	

Tab.10 II区 遺構一覧表（5）

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	104	II d	5HCo16	—	0.32	0.29	—	円	U字	3.75	3.41	0.34		—	
SP	105	II d	5HCo16	—	(0.25)	(0.11)	—	楕円	V字	3.76	3.45	0.31		—	
SP	106	II d	5HCp16	—	0.30	0.28	—	円	U字	3.74	3.47	0.27		—	
SP	107	II d	5HCp16	—	0.17	0.14	—	楕円	U字	3.71	3.42	0.29		—	
SP	108	II d	5HCp16	—	0.24	0.18	—	楕円	U字	3.73	3.57	0.16		—	
SP	109	II d	5HCo16	—	(0.26)	(0.05)	—	円	U字	3.75	3.64	0.11		SP102に切られる	
SP	110	II d	5HCo16	—	0.19	0.14	—	楕円	U字	3.77	3.59	0.18		SP93に切られる	
SP	111	II d	5HCo16	—	0.10	0.09	—	円	U字	3.81	3.68	0.13		SP93に切られる	
SP	112	II b	5HCs9	—	0.30	0.28	—	円	U字	3.87	3.63	0.24	石製品	—	
SP	113	II b	5HCs10	—	0.28	0.24	—	円	U字	3.88	3.73	0.15		SD01を切る	
SP	114	II b	5HCs10	—	0.26	0.26	—	円	U字	3.88	3.58	0.30		SD01を切る	
SP	115	II b	5HCs10	—	0.38	0.37	—	円	U字	3.87	3.68	0.19	山茶碗	SP125を切る	
SP	116	II b	5HCs10	—	0.23	0.21	—	円	V字	3.87	3.74	0.13		SP126を切る	
SP	117	II b	5HCs10	—	0.24	0.24	—	円	U字	3.87	3.70	0.17		SP126を切る	
SP	118	II b	5HCs9	—	0.40	0.28	—	円	箱	3.84	3.66	0.18		SX09を切る	
SP	119	II b	5HCs10	—	0.25	0.22	—	円	U字	3.88	3.73	0.15		SP130を切る	
SP	120	II b	5HCs10	—	0.26	0.23	—	円	V字	3.82	3.63	0.19		SP121を切る	
SP	121	II b	5HCs10	—	(0.25)	(0.06)	—	円	U字	3.81	3.72	0.09		SP120に切られる	
SP	122	II b	5HCs10	—	0.37	0.33	—	楕円	U字	3.83	3.50	0.33		—	
SP	123	II b	5HCs10	—	0.20	0.16	—	円	U字	3.85	3.72	0.13		—	
SP	124	II b	5HCs10	—	0.43	0.43	—	円	V字	3.85	3.49	0.36		—	
SP	125	II b	5HCs10	—	(0.38)	(0.37)	—	楕円	V字	3.80	3.62	0.18		SP115に切られる	
SP	126	II b	5HCs10	—	(0.32)	(0.26)	—	円	U字	3.87	3.57	0.30		SP116・SP1117 に切られる	
SP	127	II d	5HCp14	—	(0.30)	—	—	—	U字	4.20	4.03	0.17		—	
SP	128	II b	5HCs10	—	(0.28)	(0.11)	—	円	U字	3.81	3.71	0.10		—	
SP	129	II b	5HCs9	—	0.70	0.70	—	円	U字	3.79	3.64	0.15		—	
SP	130	II b	5HCs10	—	(0.22)	(0.17)	—	円	U字	3.86	3.62	0.24		SP119に切られる	
SP	131	II b	5HCs9	—	0.22	0.18	—	円	U字	3.74	3.66	0.08		—	
SP	132	II b	5HCs9	—	0.26	0.21	—	円	U字	3.77	3.69	0.08		SX05を切る	
SP	133	II b	5HCs9	—	0.28	0.25	—	円	U字	3.66	3.55	0.11		SK09に切られる	
SP	134	II b	5HCs9	—	(0.23)	(0.20)	—	円	U字	3.74	3.66	0.08		SX05に切られる	
SP	135	II b	5HCs9	—	(0.30)	(0.04)	—	円か	V字	3.83	3.77	0.06		—	
SP	136	II c南	5HCq14	—	0.50	0.41	江戸時代	円	U字	3.89	3.73	0.16	常滑	SD01を切る	
SP	137	II c南	5HCp14・ p15・ q14・q15	—	0.56	0.42	江戸時代	楕円	箱	3.78	3.70	0.08	美濃鉢・天 目碗・肥前 磁器	—	
SP	138	II b	5HCs10	—	(0.23)	—	—	不明	皿	3.90	3.84	0.06		—	
SP	139	II c北	5HCq13	—	0.17	0.14	—	円	U字	3.88	3.79	0.09		—	
SP	140	II c北	5HCq13	—	(0.23)	-	—	円か	U字	4.18	3.84	0.34		—	
SP	141	II c北	5HCq13	—	0.24	0.22	—	円	U字	3.87	3.71	0.16		—	根石（煤が付着）
SP	142	II c北	5HCq12	—	0.34	0.29	—	円	箱	3.85	3.61	0.24		SE01を切る	

Tab.11 II区 遺構一覧表(6)

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	143	IIc北	5HCq12	—	0.30	0.25	—	円	箱	3.85	3.71	0.14		SE01を切る	
SP	144	IIc北	5HCq13	—	(0.33)	(0.16)	—	円か	U字	3.87	3.78	0.09		SD01に切られる	
SP	145	IIc北	5HCq13	—	(0.28)	(0.09)	—	円か	U字	3.85	3.80	0.05		SD01に切られる	
SP	146	IIc北	5HCr13	—	(0.20)	(0.08)	—	円か	U字	3.87	3.70	0.17		SX06に切られる	
SP	147	IIc北	5HCq13	—	(0.43)	(0.21)	—	円か	U字	3.80	3.56	0.24		SK14に切られる	
SP	148	IIc南	5HCp15	—	0.30	0.29	—	円	皿	3.82	3.77	0.05		—	
SP	149	IIc南	5HCp15	—	(0.19)	(0.18)	—	円	U字	3.92	3.75	0.17		SP150を切る	
SP	150	IIc南	5HCp15	—	(0.15)	(0.13)	—	円か	U字	3.95	3.78	0.17		SP149に切られる	
SP	151	IIc南	5HCp15	—	0.30	0.27	—	円	U字	3.85	3.44	0.41		—	
SP	152	IIc南	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	欠番
SP	153	IIc南	5HCq15	—	(0.47)	(0.39)	—	楕円	U字	3.85	3.49	0.36	青磁碗	—	根石を伴う。南に段をもつ
SP	154	IIc南	5HCp15	—	0.38	0.26	—	楕円	U字	3.80	3.55	0.25		SP155を切る	
SP	155	IIc南	5HCp15	—	(0.44)	(0.22)	—	楕円	U字	3.74	3.53	0.21		SP154に切られる	
SP	156	IIc南	5HCp15	—	0.28	0.26	—	円	U字	3.80	3.66	0.14		—	
SP	157	IIc南	5HCp15	—	0.35	0.28	登窯2	円	U字	3.78	3.57	0.21	黄瀬戸鉢・折縁皿・常滑壺	—	黄瀬戸鉢、折縁皿を敷き、その上に常滑壺胴部から底部を置く
SP	158	IIc南	5HCp15	—	0.37	0.31	—	円	U字	3.75	3.49	0.26		—	根石を伴う
SP	159	IIc南	5HCp15	—	0.30	0.23	—	不整円	U字	3.86	3.68	0.18		—	根石を伴う。東に段をもつ
SP	160	IIc南	5HCp15	—	0.33	0.30	—	楕円	U字	3.83	3.66	0.17		—	
SP	161	IIc南	5HCp15	—	0.37	0.35	—	楕円	U字	3.84	3.47	0.37	山茶碗鉢	SP162を切る	
SP	162	IIc南	5HCp15	—	(0.30)	(0.19)	—	楕円	U字	3.81	3.61	0.20		SP161に切られる	
SP	163	IIc南	5HCp15	—	0.37	0.29	—	円	U字	3.81	3.73	0.08		—	
SP	164	IIc南	5HCp15	—	0.48	0.47	—	円	U字	3.84	3.37	0.47		SD02を切る	
SP	165	IIc南	5HCp15	—	0.37	0.24	—	円	U字	3.81	3.30	0.51		SP166・SP169を切る	
SP	166	IIc南	5HCp15	—	(0.33)	(0.13)	—	円	U字	3.82	3.71	0.11		SP165に切られる	
SP	167	IIc南	5HCp14	—	0.26	0.23	—	円	皿	3.81	3.78	0.03		SD02・SP168を切る	
SP	168	IIc南	5HCp14	—	0.27	0.25	—	円	皿	3.85	3.77	0.08		SP167に切られる	
SP	169	IIc南	5HCp15	—	(0.40)	(0.21)	—	円	U字	3.81	3.61	0.20	古瀬戸中期の卸皿	SP165に切られる。SD02を切る	
SP	170	IIc南	5HCp14	—	0.38	0.36	—	円	U字	3.81	3.49	0.32		SD02を切る	
SP	171	IIc南	5HCq15	—	0.21	0.18	—	楕円	U字	3.76	3.69	0.07		SD02を切る	
SP	172	IIc南	5HCp14	—	0.48	0.30	—	円	U字	3.84	3.54	0.30		SD02・SP176を切る	
SP	173	IIc南	5HCp14	—	0.38	0.36	—	円	U字	3.82	3.67	0.15		SD02を切る	
SP	174	IIc南	5HCp15	—	0.34	0.26	—	楕円	U字	3.85	3.66	0.19		SP175を切る	
SP	175	IIc南	5HCp15	—	(0.32)	(0.27)	—	楕円	U字	3.84	3.54	0.30		SP174に切られる	
SP	176	IIc南	5HCp14	—	(0.47)	(0.35)	—	円か	U字	3.80	3.49	0.31	初山天目碗	SP172に切られる。SD02を切る	
SP	177	IIc南	5HCq14	—	0.29	0.24	—	円	U字	3.86	3.57	0.29		SD01を切る	
SP	178	IIc南	5HCq14	—	0.35	0.26	—	楕円	U字	3.82	3.47	0.35	砥石	SP179を切る	空洞
SP	179	IIc南	5HCq14	—	(0.36)	(0.27)	—	楕円	箱	3.84	3.64	0.20		SP178に切られる	

Tab.12 II区 遺構一覧表（7）

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SP	180	II c南	5HCp14	—	0.27	0.26	—	円	U字	3.83	3.55	0.28		—	根石を伴う
SP	181	II c南	5HCp14	—	0.44	0.36	—	円	U字	3.85	3.66	0.19		SD01を切る	柱痕跡、根石を伴う
SP	182	II c南	5HCq14	—	0.30	0.21	—	楕円	U字	3.89	3.62	0.27		SD01を切る	
SP	183	II c南	5HCq14	—	(0.46)	(0.46)	—	方形	U字	3.86	3.46	0.40		SP178に切られる。SD01を切る	空洞
SP	184	II c南	5HCq14	—	0.48	0.42	—	楕円	U字	3.87	3.68	0.19		—	2段になる
SP	185	II c南	5HCq14	—	0.30	0.27	—	楕円	U字	3.85	3.44	0.41	砥石	—	
SP	186	II c南	5HCp14	—	0.21	0.12	—	円	U字	3.86	3.67	0.19		SP187を切る	
SP	187	II c南	5HCp14	—	(0.47)	(0.34)	—	楕円	皿	3.88	3.81	0.07		SP186に切られる	
SP	188	II c南	5HCp14	—	0.40	0.31	—	楕円	U字	3.83	3.35	0.48		—	柱痕跡
SP	189	II c南	5HCq14	—	0.21	0.19	—	円	U字	3.87	3.69	0.18		—	石
SP	190	II c南	5HCp14	—	(0.18)	(0.08)	—	円か	皿	3.92	3.85	0.07		—	東壁
SP	191	II c南	5HCp14	—	0.34	0.30	—	円	皿	3.87	3.78	0.09		SD05を切る	
SP	192	II c南	5HCp14	—	0.31	0.26	—	楕円	U字	3.85	3.47	0.38		SD05を切る	
SP	193	II c南	5HCq14	—	0.16	0.16	—	円	U字	3.83	3.41	0.42		—	
SP	194	II c南	5HCp15	—	0.60	0.48	—	楕円	皿	3.86	3.84	0.02		SP196を切る	
SP	195	II c南	5HCp15	—	(0.31)	(0.09)	—	円か	U字	3.85	—	—		SP174・SP175に切られる	
SP	196	II c南	5HCp15	—	(0.25)	(0.19)	—	円	U字	3.85	3.74	0.11		SP194に切られる	
SP	197	II c南	5HCq14	—	0.19	0.13	—	円	U字	3.68	3.58	0.10		SP184の下で検出	
SP	198	II c南	5HCq14	—	(0.38)	(0.37)	—	円	皿	3.87	3.74	0.13		—	
SP	199	II c南	5HCq14	—	(0.20)	(0.16)	—	円か	皿	3.84	3.78	0.06		SD06・SP184に切られる	
SP	200	II c南	5HCp14	—	0.28	0.24	—	楕円	U字	3.80	3.76	0.04		SD01に切られる	
SP	201	II c南	5HCq15	—	(0.17)	(0.08)	—	円か	U字	3.73	3.67	0.06		SD02に切られるか	
SP	202	II c南	5HCp15	—	(0.33)	(0.28)	—	楕円	U字	3.76	3.37	0.39		SD04に切られる	
SP	203	II c南	5HCp15	—	0.49	0.23	—	楕円	U字	3.79	3.61	0.18		SD04に切られる	
SP	204	II c南	5HCp15	—	(0.40)	—	—	—	U字	4.23	3.84	0.39		—	
SA	01	II a	5HCt8・ s9・t9	N29°E	4.12	0.34	—	—	—	3.85～ 3.86	3.48～ 3.39	—		—	SP35・SP48・SP55
SA	02	II c南	5HCr12・ q12・ q13・r13	N26°E	8.57	(0.22)	—	—	—	3.74～ 3.87	3.53～ 3.68	—		—	SP155・SP161・ SP165・SP183・ SP184
SX	01	II a	5HCt6	N42°E	(1.13)	—	—	不整 長方形	皿	3.99	3.92	0.07		SP91・SK08に切られる	
SX	02	II d	5HCo16・ p17・ p16・p17	N25°E	(2.39)	(2.15)	—	方形か	箱	3.81	3.72	0.09		—	両端にビット (SP98・99・101・ 102・104～109)を伴う
SX	03	II d	5HCp17	—	(1.13)	(0.42)	—	円か	V字	3.76	3.32	0.44		—	
SX	04	II d	5HCp15	—	(1.35)	—	—	—	V字	4.40	3.86	0.54		—	
SX	05	II b	5HCs9	W15°S	(0.68)	(0.22)	—	直線	U字	3.77	3.72	0.05		SP132に切られる。SP134を切る	
SX	06	II c北	5HCr11・ r13	—	(0.51)	-	—	直線	皿	3.92	3.82	0.10		SP146を切る	
SX	07	II c北	5HCq11	N3°E	(1.67)	(0.49)	—	楕円	皿	3.91	3.78	0.13		SK13を切る	

Tab.13 IV区 遺構一覧表

種別	番号	調査区	グリッド名	主軸方位	長軸 (m)	短軸 (m)	帰属時期	平面形	断面形	検出標 高(m)	底部標 高(m)	深さ (m)	出土遺物	切り合い	備考
SD	01	IV	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	自然流路SR01と変更 したため欠番
SD	02	IV	5FDI12・ m12	W16°S	(1.82)	(0.37)	—	直線	皿	4.36	4.31	0.05		SK02に切られる	
SK	01	IV	5FDI11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	SD01埋土の一部と理 解したため欠番
SK	02	IV	5FDI11・ I12	N2°E	1.09	0.75	—	楕円	皿	4.31	4.23	0.08		SK05を切る	
SK	03	IV	5FDI11・ I12・ m11・m12	—	(1.63)	(1.31)	—	不整円	V字	4.29	3.79	0.50		SK05を切る	
SK	04	IV	5FDI11	—	(0.88)	(0.66)	—	不整円	V字	4.22	4.02	0.20		SK03に切られ る。SD01を切 る	
SK	05	IV	5FDI11	—	(0.64)	(0.42)	—	楕円	皿	4.28	4.24	0.04		SK02に切られる	
SP	01	IV	5FDm12	—	(0.15)	(0.12)	—	円	U字	4.44	4.37	0.07		—	
SP	02	IV	5FDm12	—	0.19	(0.17)	—	円	皿	4.38	4.35	0.03		—	
SP	03	IV	5FDm12	—	0.20	(0.15)	—	円	U字	4.40	4.30	0.10		—	
SP	04	IV	5FDI11	—	(0.32)	—	—	—	U字	5.25	4.88	0.37		—	
SP	05	IV	5FDI11・ m11	—	(0.39)	—	—	—	U字	4.94	4.72	0.22	かわらけ・ 瀬戸播鉢	SP06を切る	
SP	06	IV	5FDm11	—	(0.14)	—	—	—	U字	4.93	4.79	0.14		SP05に切られる	
SP	07	IV	5FDI11	—	(0.34)	—	—	—	U字	4.95	4.66	0.29		—	
SP	08	IV	5FDm11	—	(0.13)	—	—	—	U字	4.83	4.40	0.43		—	
SP	09	IV	5FDm11	—	(0.25)	—	—	—	U字	4.58	4.35	0.23		—	
SP	10	IV	5FDI11	—	(0.32)	—	—	—	U字	4.68	4.27	0.41		—	
SP	11	IV	5FDm11	—	(0.31)	—	—	—	V字	5.18	5.07	0.11		—	
SP	12	IV	5FDm11	—	(0.54)	—	—	—	U字	4.70	4.39	0.31	土師器甕	—	
SP	13	IV	5FDI11	—	(0.24)	—	—	—	U字	5.37	5.07	0.30		SP15を切る	
SP	14	IV	5FDI11	—	(0.32)	—	—	—	U字	5.20	4.97	0.23		—	
SP	15	IV	5FDI11	—	(0.49)	—	—	—	U字	5.20	4.71	0.49		SP13に切られ る。SP19を切る	
SP	16	IV	5FDI11	—	(0.48)	—	—	—	U字	4.98	4.61	0.37		SP17に切られる	
SP	17	IV	5FDI11	—	(0.62)	—	—	—	U字	4.92	4.29	0.63		SP18・SP20を切 る	
SP	18	IV	5FDI11	—	(0.34)	—	—	—	U字	4.96	4.61	0.35		SP17に切られる	
SP	19	IV	5FDI11	—	(0.54)	—	—	—	U字	4.87	4.56	0.31		SP15に切られる	
SP	20	IV	5FDI11	—	(0.16)	—	—	—	U字	4.39	4.21	0.18		SP17に切られ る。SK03・ SK04を切る	
SR	01	IV	5FDI11・ m11	W6°N	(4.29)	(1.20)	—	蛇行	V字	4.14	3.89	0.25	かわらけ	SK04に切られる	
SX	01	IV	5FDI11	W51°N	(0.81)	—	江戸時代	不明	皿	5.19	5.15	0.04	内耳鍋・ かわらけ	—	Ⅲ—4層下面

Tab.14 遺物観察表（1）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
27	1	I	SE01 上層	陶器	瀬戸美濃	火鉢		(26.0)	(3.0)	—	—	15%	灰白 にぶい黄(釉)	江戸後期
27	2	I	SE01 上層	陶器	瀬戸美濃	播鉢		—	(7.5)	—	—	10%	灰白 灰褐(釉)	大窯2or3段階
27	3	I	SD01	陶器	渥美	甕		—	(6.8)	—	—	小片	にぶい黄橙	肩部に線刻有
27	4	I	SD02	陶器	渥美	甕		—	(10.5)	—	—	小片	灰白	
27	5	I	SP31	山茶碗		碗	反	—	(2.0)	(8.8)	(6.7)	底部 30%	灰白	
27	6	I	SP31	山茶碗		碗	反	—	(1.5)	(7.7)	(7.0)	底部 15%	灰白	
27	7	I	SK02	山茶碗		碗	反	(15.8)	(4.8)	—	—	10%	にぶい黄橙	
27	8	I	SK02	山茶碗		碗	反	—	(2.2)	(8.2)	(6.8)	20%	灰白	
27	9	I	SK02	山茶碗		碗		—	(1.6)	6.4	6.1	底部 65%	灰白	
27	10	I	SK02	山茶碗		碗		—	(3.2)	7.6	6.6	30%	灰白	底部に線刻有。高 台が剥離する
27	11	I	SK02	山茶碗		小皿		8.0	1.9	4.0	—	完形	灰白	
27	12	I	SK02	須恵器		壺G		—	(8.9)	4.4	—	底部 完存	灰白	
27	13	I	SK02	陶器	渥美	甕		—	(9.9)	—	—	小片	褐	
27	14	I	SK02	陶器	常滑	壺	反	(27.0)	(5.9)	—	—	口縁 5%	褐灰 にぶい黄橙 (釉)	常滑4型式
27	15	I	SK02	石製品		砥石		10.1	12.0	4.2	—	—	灰黄	一部を欠損。重さ 659.5 g
27	16	I	II層	陶器	瀬戸美濃	皿	反	—	(2.0)	(6.8)	(6.2)	底部 45%	灰白 呉須(釉)	見込部に文様。圏 線。江戸後期
27	17	I	II層	磁器	肥前	染付 広東碗		—	(3.3)	5.9	4.8	底部 完存	灰白 透明・呉須 (釉)	見込部に文様。圏 線。体部外面に草 花文
27	18	I	II層	磁器	肥前	染付皿	反	(13.8)	3.8	(9.2)	(7.8)	45%	灰白 透明・呉須 (釉)	体部内外面に文様
27	19	I	II層	陶器	瀬戸美濃	志野 丸皿		11.2	2.3	7.0	6.6	完形	浅黄 灰白(釉)	内外面に煤が付 着。灯明皿か。大 窯2段階後半
27	20	I	II層	陶器	不明	小瓶		—	(8.1)	5.4	5.0	底部 ～頸部 完存	灰白 灰オリーブ (釉)	江戸後期
27	21	I	II層	陶器	美濃	小瓶		2.0	10.9	4.5	4.4	完形	灰白 灰白(釉)	底部裏面に墨書 か。江戸後期
28	22	I	SE02 上層	陶器	初山	内禿皿	反	(10.6)	2.4	(6.6)	(6.6)	25%	褐灰 暗褐(釉) 灰褐(露胎)	大窯3段階
28	23	I	SE02 上層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	—	(2.4)	(7.7)	(6.8)	15%	浅黄 にぶい黄(釉)	大窯4段階前半
28	24	I	SE02 上層	山茶碗		碗	反	—	(2.0)	(7.5)	(7.0)	40%	にぶい黄橙	
28	25	I	SE02 上層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	—	(1.1)	(7.0)	(6.0)	45%	浅黄橙 にぶい黄橙 (釉)	線刻「福」。大窯 4段階前半
28	26	I	SE02 上層	陶器	常滑	甕	反	(44.6)	(5.7)	—	—	5%	黄灰 にぶい黄(釉)	常滑5型式
28	27	I	SE02 上層	土師器		内耳鍋	反	(26.8)	(8.0)	—	—	10%	浅黄橙	
28	28	I	SE02 上層	陶器	初山	播鉢	反	—	(5.6)	(10.4)	—	20%	灰 黒褐(釉)	大窯3段階

Tab.15 遺物観察表（2）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
28	29	I	SE02 上層	瓦		丸瓦		(5.1)	(8.0)	(2.4)	—	不明	灰	布目痕
28	30	I	SE02 中層	陶器	初山	播鉢	反	(26.2)	(3.1)	—	—	口縁 10%	にぶい褐 にぶい赤褐 (釉)	大窯3段階
28	31	I	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	播鉢	反	(31.6)	(6.3)	—	—	20%	灰黄 褐(釉)	大窯4段階後半
28	32	I	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	播鉢		29.5	12.0	9.9	—	60%	暗赤灰 赤灰(釉)	大窯2段階
28	33	I	SE02 中層	陶器	初山or 志戸呂	壺		10.8	(9.5)	—	—	70%	灰 暗赤灰(釉)	江戸前期か
28	34	I	SE02 中層	陶器	志戸呂	大皿	反	—	(4.8)	(11.0)	—	20%	灰褐 黒褐(釉)	大窯4段階
28	35	I	SE02 中層	山茶碗	湖西渥美	碗		—	(2.0)	7.6	7.0	底部 100%	灰白	
29	36	I	SE02 下層	土師器		かわらけ	反	(9.6)	2.3	(5.8)	—	25%	浅黄橙	
29	37	I	SE02 下層	土師器		かわらけ	反	(10.8)	2.4	(6.2)	—	15%	浅黄橙	
29	38	I	SE02 下層	土師器		かわらけ	反	(10.8)	2.3	(5.4)	—	30%	浅黄橙	
29	39	I	SE02 下層	土師器		かわらけ	反	(13.4)	3.4	(4.6)	—	25%	にぶい黄橙	
29	40	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	黄瀬戸碗		—	(2.5)	—	—	小片	淡黄 にぶい黄(釉)	大窯4段階
29	41	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	小天目碗		—	(2.9)	—	—	小片	にぶい黄橙 暗褐(釉)	大窯2段階
29	42	I	SE02 下層	陶器	初山	皿		—	(0.9)	(6.2)	(6.0)	底部 20%	褐灰 黒褐(釉)	大窯3段階
29	43	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	播鉢		—	(4.9)	—	—	小片	明黄褐 黒褐(釉)	大窯3段階
29	44	I	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	徳利	反	—	(4.1)	(8.0)	(8.0)	底部 30%	灰白 暗褐(釉)	江戸前期
29	45	I	SE02 下層	土師器		内耳鍋	反	25.6	11.5	(19.6)	—	50%	にぶい黄橙	足3ヶ所貼り付 け。その内2か所 残存。B類
29	46	I	SE02 下層	土師器		内耳鍋	反	(23.4)	(7.6)	—	—	口縁 35%	浅黄橙	B類
29	47	I	SE02 下層	土師器		内耳鍋	反	(25.0)	(11.8)	—	—	口縁 30%	にぶい橙	B類
29	48	I	SE02 下層	土師器		内耳鍋		23.3	(11.8)	—	—	口縁 100%	にぶい黄橙	B類
29	49	I	SE02 下層	土師器		内耳鍋	反	(24.8)	(10.0)	—	—	35%	にぶい黄橙	B類
29	50	I	SE02 下層	土師器		茶釜	反	(13.8)	(7.2)	—	—	20%	にぶい黄橙	
58	51	II a	IV層	土師器		かわらけ	反	(10.7)	(3.0)	(7.2)	—	20%	浅黄橙	南壁
58	52	II a	IV層	土師器		かわらけ		—	(2.5)	4.7	—	底部 完存	にぶい橙	東壁
58	53	II a	V層上面	土師器		高杯		—	(6.0)	—	—	脚部 80%	橙	
58	54	II a	SP55	土師器		獣脚		2.8	(4.3)	2.3	—	小片	浅黄橙	
58	55	II a	SP07	石製品		砥石		9.3	(9.3)	6.1	—	—	灰白	重さ796.0 g。両 小口を欠損
58	56	II a	SP08	鉄滓		碗形滓		13.2	10.8	4.0	—	完形	明褐	重さ805.0 g

Tab.16 遺物観察表（3）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
58	57	II b	III層	陶器	瀬戸美濃	鉄絵 折縁皿		11.0	2.4	6.8	6.5	85%	灰白 灰オリーブ (釉)	外面と見込部に煤 が付着。灯明皿 か。登窯第1段階 第3小期。南壁
58	58	II b	III層	土師器		かわらけ	反	(9.8)	2.5	(6.7)	—	30%	橙	
58	59	II b	SP115	山茶碗		碗	反	—	(1.9)	(7.7)	(6.4)	底部 20%	灰白	
58	60	II b	SK09	山茶碗		小皿		8.4	2.0	4.5	—	完形	灰白	
58	61	II b	SK09	山茶碗		碗		(14.1)	4.8	8.1	6.6	底部 完存	灰白	
58	62	II b	SK09	陶器	渥美	甕		—	(20.6)	—	—	体部 小片	灰白 褐灰(釉)	
58	63	II b	SP112	石製品		容器		11.7	(9.6)	10.3	—	50%	灰白	重さ1152.5 g。脚 部が2個残存。内 外面に煤が付着。 印籠造。
59	64	II c北	SE01 上層	山茶碗		碗		—	(1.8)	7.2	6.3	底部 完存	灰白	
59	65	II c北	SE01 下層	陶器	瀬戸美濃	瓶子	反	—	(1.1)	(8.2)	—	底部 35%	灰	古瀬戸中期
59	66	II c北	SE01 最下層	山茶碗		片口鉢		—	(3.4)	—	—	5%	灰白	
59	67	II c北	SE01 上層	陶器	渥美	甕		—	(5.1)	—	—	小片	灰黄褐	
59	68	II c北	SE01 上層	石製品		砥石		(4.5)	(8.9)	4.7	—	不明	褐灰	重さ133.1 g
59	69	II c北	SK13	山茶碗		小皿		8.8	1.7	4.6	—	完形	灰白	墨書土器。南壁
59	70	II c北	SK13	土師器	伊勢型	鍋	反	(20.2)	(3.3)	—	—	10%	浅黄橙	外面に煤が付着
59	71	II c北	SE03 上層	陶器	初山	天目碗	反	—	(1.4)	5.5	4.6	底部 80%	にぶい褐 浅黄(釉)	大窯3段階
59	72	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	—	(0.9)	4.4	4.1	底部 完存	灰白 黒褐(釉)	加工円盤に転用。 古瀬戸後期IV期古
59	73	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸美濃	輪禿皿	反	—	(1.3)	(6.4)	(5.8)	底部 25%	淡黄 灰白(釉)	登窯第1段階第2小 期
59	74	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿		11.4	2.5	7.25	6.0	完形	灰白 淡黄(釉)	見込部に胎土目 5ヶ所認められ る。登窯第1段階 第2小期
59	75	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿	反	(12.4)	(2.6)	(7.7)	(7.1)	30%	灰白 灰白(釉)	底部裏面に胎土目 1ヶ所認められ る。登窯第1段階 第2小期
59	76	II c北	SE03 上層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿	反	—	(1.6)	(9.2)	(7.5)	底部 15%	灰白 灰白(釉)	底部裏面に胎土目 1ヶ所認められる
59	77	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸	壺	反	—	(3.9)	(14.2)	—	底部 20%	黄橙 暗褐(釉)	大窯か
59	78	II c北	SE03 最下層	陶器	瀬戸美濃	擂鉢		—	(8.1)	—	—	口縁 10%	淡黄 暗灰(釉)	II類。大窯3段階 後半
59	79	II c北	SE03 最下層	鉄滓		碗形滓		11.2	9.7	5.4	—	完形	明褐	重さ600.5 g
59	80	II c北	III層（焼 土層）	陶器	瀬戸美濃	小皿	反	(8.8)	2.4	4.2	3.3	40%	灰黄褐 黄褐(釉)	内外面に煤が付 着。灯明皿か。底 部完存。江戸中 期。西壁

Tab.17 遺物観察表（4）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
59	81	Ⅱc北	Ⅲ層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿		10.3	2.2	7.1	6.1	完形	不明 灰黄褐(釉)	口縁部の一部と底部に煤が付着。灯明皿か。見込部と底部裏面に胎土目が3ヶ所認められる。登窯第1段階第2小期。西壁
59	82	Ⅱc北	Ⅲ層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.8)	(4.3)	—	—	10%	浅黄橙 褐(釉)	登窯第1段階第2小期。西壁
59	83	Ⅱc北	Ⅲ層	磁器	肥前	染付碗		(8.0)	6.7	4.6	4.1	60%	灰白 呉須・透明 (釉)	底部完存。西壁
59	84	Ⅱc北	Ⅳ層	磁器		青磁碗	反	—	(1.8)	(6.8)	(6.0)	底部 25%	白 明オリブ灰 (釉)	見込部に陰刻。中世。北壁
60	85	Ⅱc南	SD04B	山茶碗		碗	反	—	(1.4)	(7.6)	(7.4)	底部 25%	灰白	
60	86	Ⅱc南	SD04B	陶器	渥美	壺		—	(3.6)	—	—	小片	灰白	文様
60	87	Ⅱc南	SD04B	陶器	不明	甕	反	—	(3.4)	(13.9)	—	底部 20%	灰白	
60	88	Ⅱc南	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.7)	(5.0)	—	—	口縁 15%	浅黄橙 黒(釉)	大窯3段階前半
60	89	Ⅱc南	SE02 下層	陶器	瀬戸美濃	茶入		—	(3.4)	—	—	小片	灰白 白(釉)	近世
60	90	Ⅱc南	SE02 中層	陶器	瀬戸美濃	端反皿 or丸皿	反	—	(1.1)	(6.9)	(6.0)	底部 15%	灰白 オリブ灰 (釉)	底部裏面に付着物あり。大窯1段階or2段階
60	91	Ⅱc南	SE02 下層	陶器	初山	大皿	反	(27.6)	(4.0)	—	—	口縁 15%	灰 淡黄(釉)	大窯3段階
60	92	Ⅱc南	SE02 下層	陶器	志戸呂か	鉢か	反	—	(2.9)	(12.6)	—	底部 30%	灰白 褐灰(釉)	見込部に煤が付着
60	93	Ⅱc南	SE02 下層	土師器		茶釜		13.1	15.6	18.8	—	80%	浅黄橙	口縁部完存。外耳1個欠損。脚3足中2足残存。外面全体に煤が付着
60	94	Ⅱc南	SP137	陶器	美濃	鉢	反	—	(3.1)	(14.1)	(13.7)	底部 30%	淡黄 灰オリブ (釉)	見込部に胎土目。江戸中期
60	95	Ⅱc南	SP137	磁器	肥前	染付碗	反	—	(3.6)	(4.6)	(4.2)	底部 50%	灰白 透明・呉須 (釉)	
60	96	Ⅱc南	SP137	陶器	瀬戸美濃	天目碗		—	(1.1)	4.7	4.2	底部 完存	浅黄橙 黒(釉)	加工円盤に転用。大窯3段階前半
60	97	Ⅱc南	SP157	陶器	瀬戸美濃	黄瀬戸鉢		29.0	8.8	15.8	14.2	70%	淡黄 淡黄・濃緑 (釉)	見込部と底部裏面に4ヶ所ずつ胎土目が認められる。菊花文。登窯第1段階第2小期
60	98	Ⅱc南	SP157	陶器	瀬戸美濃	折縁皿		10.2	2.3	7.2	6.3	75%	淡黄 浅黄(釉)	見込部と底部裏面に3ヶ所ずつ胎土目が認められる。菊花文。登窯第1段階第2小期
60	99	Ⅱc南	SP157	陶器	常滑	壺		—	(11.5)	12.6	—	底部 完存	にぶい赤褐	16世紀
61	100	Ⅱc南	SP176	陶器	初山	小天目碗	反	(9.2)	(2.9)	—	—	口縁 15%	灰 暗赤褐(釉)	大窯3段階
61	101	Ⅱc南	SP153	磁器	龍泉窯系	青磁碗		—	(3.0)	—	—	口縁 5%	灰白 オリブ灰 (釉)	外面に鎬蓮弁文

Tab.18 遺物観察表（5）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
61	102	II c南	SP161	山茶碗		片口鉢か		—	(5.3)	—	—	小片	灰白 オリーブ灰 (釉)	
61	103	II c南	III層	陶器	志戸呂	灯明皿	反	(10.0)	(2.1)	—	—	口縁 20%	灰白 黒褐(釉)	江戸後期。南壁
61	104	II c南	IV層	陶器	瀬戸美濃	皿		8.2	1.8	4.9	—	75%	灰 灰白(釉)	被熱する。江戸後 期
61	105	II c南	IV層	山茶碗		碗	反	—	(3.0)	(9.0)	(8.0)	底部 35%	灰白	
61	106	II c南	V層上面	灰釉陶器 か		壺か	反	—	(3.0)	(7.4)	(7.2)	底部 25%	灰白	
61	107	II c南	SP136	陶器	常滑	壺	反	(13.8)	(8.0)	—	—	口縁 25%	褐灰 暗赤褐(釉)	12型式
61	108	II c南	SP136	陶器	常滑	甕	反	(42.1)	(14.4)	—	—	口縁 20%	明赤褐	12型式
61	109	II c南	SP185	石製品		砥石		10.3	13.4	5.0	—	—	灰白	一部を欠損
61	110	II c南	SP178	石製品		砥石		3.8	8.6	2.8	—	—	灰白	両小口を欠損。重 さ137.6 g
61	111	II c南	SK25	金属製品		銭貨		2.5	2.5	0.2	—	—	—	重さ4 g。西壁
61	112	II c南	SK25	金属製品		銭貨		2.5	2.6	0.2	—	—	—	重さ3 g。西壁
61	113	II c南	SK25	金属製品		銭貨		3.4	2.7	0.6	—	—	—	重さ10 g。西壁
61	114	II c南	II層	金属製品		銭貨		2.4	2.4	0.1	—	—	—	重さ2 g。西壁
62	115	II d	II層	須恵器		甕		—	(5.2)	—	—	小片	灰	
63	116	II e	II層	金属製品		銭貨		2.5	2.5	0.1	—	—	—	重さ3 g。古寛 永。南壁
64	117	II e	III層	陶器	瀬戸美濃	天目碗	反	(11.6)	(5.6)	—	—	口縁 25%	灰白 黒褐(釉)	登窯第2段階第5小 期。北壁
64	118	II e	SP81	土師器		かわらけ	反	(9.7)	2.2	(6.2)	—	30%	橙	灯明皿。南壁
64	119	II e	SP81	土師器		かわらけ	反	(9.9)	2.2	(6.8)	—	20%	にぶい黄橙	底部外面にヘラ状 圧痕が認められ る。南壁
64	120	II e	SP81	土師器		鉢	反	(28.2)	(7.4)	—	—	口縁 15%	橙	南壁
64	121	II e	SP81	瓦		軒丸瓦		(15.2)	(7.6)	—	—	瓦当 60%	暗灰	三巴文。珠文11個 (推定)。南壁
64	122	II e	SP81	瓦		軒平瓦		(15.2)	(16.2)	4.2	—	瓦当 60%	暗灰	南壁
64	123	II e	SP81	瓦		道具瓦		(5.7)	(12.4)	(2.3)	—	40%	灰	玉縁部が認められ る。南壁
64	124	II e	SP81	石製品		砥石		(11.4)	10.7	5.3	—	—	灰オリーブ	重さ660 g。一部 を欠損。南壁
68	125	III	III層	陶器	初山か	播鉢	反	—	(9.2)	(11.9)	—	10%	橙 橙(釉)	内面が平滑
68	126	III	IV層	山茶碗		碗	反	—	(3.5)	(7.4)	(7.0)	底部 50%	灰白	
68	127	III	SX01	磁器	龍泉	青磁碗	反	—	(2.2)	(10.3)	(9.2)	底部 10%	灰白 オリーブ灰 (釉)	
68	128	III	III層	金属製品		煙管吸口	反	0.9	(8.2)	0.9	—	—	—	重さ5 g。吸口に 文様有り。雁首を 欠損する。羅宇の 一部が残存
75	129	IV	SR01 上層	土師器		かわらけ	反	(11.5)	(3.0)	(7.0)	—	10%	にぶい黄橙	調査時はSD01
75	130	IV	SP12	土師器		内耳鍋	反	(22.0)	(5.7)	—	—	20%	にぶい黄橙	A類

Tab.19 遺物観察表（6）

Fig	報告書 番号	調査区	遺構・層位	器種	産地	器形	反転 復元	法量(cm)				残存率	色調	備考1
								口径・幅	器高・長さ	底径・厚さ	高台径			
75	131	IV	SP05	土師器		かわらけ	反	(14.8)	(2.4)	—	—	10%	橙	
75	132	IV	SP05	陶器	瀬戸美濃	播鉢	反	(30.4)	(5.0)	—	—	10%	灰黄 灰褐(釉)	古瀬戸後期IV段階 新
75	133	IV	Ⅲ層	土師器		かわらけ		—	(2.2)	5.7	—	底部 80%	橙	
75	134	IV	Ⅲ層	土師器		かわらけ	反	(10.6)	2.5	(6.2)	—	35%	浅黄橙	
75	135	IV	Ⅲ層	土師器		かわらけ	反	(10.6)	(2.3)	(6.4)	—	10%	橙	
75	136	IV	Ⅲ層	土師器		かわらけ	反	(9.8)	2.3	(5.0)	—	30%	橙	
75	137	IV	Ⅲ層	陶器	渥美	鉢	反	—	(4.9)	(14.0)	—	底部 20%	にぶい黄橙	
75	138	IV	Ⅲ-4層	土師器		かわらけ	反	(9.6)	2.8	(5.0)	—	25%	浅黄橙	
75	139	IV	Ⅲ-4層	土師器		かわらけ	反	(10.0)	(2.2)	(7.8)	—	20%	浅黄橙	
75	140	IV	Ⅲ-4層	土師器		かわらけ		11.7	3.0	6.1	—	50%	浅黄橙	
75	141	IV	Ⅲ-4層	土師器		かわらけ		10.6	2.5	6.9	—	60%	にぶい黄橙	底部完存
75	142	IV	Ⅲ-4層	土師器		てづくね皿		3.8	1.3	—	—	完形	浅黄橙	
75	143	IV	Ⅲ-4層	土師器		内耳鍋	反	(22.3)	(5.1)	—	—	10%	灰黄褐	B類
75	144	IV	Ⅲ-4層	土師器		内耳鍋	反	(23.6)	(6.5)	—	—	口縁 20%	黄灰～浅黄	B類
75	145	IV	Ⅲ-4層	土師器		内耳鍋		(27.6)	(4.5)	—	—	10%	灰	変形or片口。B類
75	146	IV	Ⅲ-4層	土師器		炮烙	反	(21.8)	(4.0)	—	—	口縁 10%	灰白	口縁部外面に剥離 痕。そこに刻み目 が認められる
75	147	IV	Ⅲ-4層	陶器	唐津	碗		—	(4.7)	4.6	4.5	80%	にぶい褐 灰褐(釉)	底部完存。見込部 に草本文、口縁部 に文様が認められ る。土灰。西壁
75	148	IV	Ⅲ-4層	陶器	瀬戸美濃	折縁皿	反	(10.2)	2.6	(6.2)	(5.4)	20%	淡黄 浅黄(釉)	大窯3段階
75	149	IV	Ⅲ層	陶器	瀬戸美濃	志野丸皿	反	—	(1.5)	(8.0)	(6.8)	底部 20%	灰白 灰白(釉)	登窯第1段階第2小 期
75	150	IV	Ⅲ層	磁器		碗	反	(9.0)	(2.2)	—	—	口縁 25%	白 明緑灰(釉)	
75	151	IV	Ⅲ-4層	陶器	常滑	壺	反	(12.2)	(9.6)	—	—	口縁 20%	灰 暗赤褐(釉)	

第3章 総括

1 発掘調査の成果

今回の調査は、浜松城城下町の南部にあたる近世東海道沿いの塩町・旅籠町・伝馬町を対象として行った。本章では、主な調査成果について時代ごとに触れながら、今後の課題や展望を示すことで総括とする。

古代 確認調査（10次調査）も含め、少量ではあるが7～8世紀代の須恵器・土師器が確認された。注目すべき遺物としては、Ⅰ区SK02から出土した壺G（12）が挙げられる。

今回調査地の南西約1kmには、古代敷智郡家に比定される伊場遺跡群が存在しており、古代東海道も今回調査地の1kmほど南を東西方向に通っていたと推定されている。当該期に明確に比定される遺構は確認されていないが、小規模ながらも郡家周辺において集落が営まれていた可能性がうかがえる。

中世前期 各調査区において、13世紀代を中心とする遺構が確認された。これらの遺構は、Ⅴ層（基盤層）上面から掘り込まれており、無遺物でも切り合い関係や埋土の特徴などから推定されるものも含めると、比較的多くの遺構が当該時期に比定される。主な出土遺物は、山茶碗や渥美産・常滑産の陶器であるが、中には貿易陶磁器である青磁碗（11次調査－101・127）など注目すべき遺物も含まれる。なお、山皿（11次調査－69）の底部には不鮮明で判読できないが墨書が認められる。

この時期には、浜松城の北東側にあたる現在の野口町や八幡町周辺に、浜松城下町の前形ともいえる引馬宿が形成され、東海道は本遺跡南側で北上して引馬宿方面へと向かう近世東海道に近いルートを取っていたと推定されている。今回の調査における13世紀代の比較的多くの遺構・遺物の存在は、後の城下町の下地となるような一定規模を有する集落が形成されていたことを示している。

中世末～近世初頭 今回調査地の南部分にあたるⅠ区とⅡ区を中心に、16世紀後半～17世紀初頭の遺構・遺物が確認された。遺構は基本的にⅤ層（基盤層）上面から掘り込まれており、Ⅰ区SE02およびⅡ区SE02は、いずれも底面までの完掘には至らなかったが、主体となる出土遺物の年代から、いずれも16世紀後半頃に位置付けられる。

出土遺物は、瀬戸美濃窯をはじめ初山窯、志戸呂窯の大窯段階の陶器や、かわらけ・内耳鍋・茶釜等の土師質土器が主体となる。Tab.20には、今回の調査（確認調査含む）で出土した大窯段階の陶器の時期別組成を示した。サンプル数が限られてはいるものの、大窯第3～4段階の製品が多く認められ、特に第3段階後半には、当地の窯である初山窯の製品が急激に増加する。過去の調査でも指摘されているように、城下町の形成期が大窯第3段階後半（16世紀後葉）頃であり、当地における陶器需要の拡大があったことがうかがえる（和田ほか2017）。この時期は、元亀元（1570）年に徳川家康が浜松へ入り、天正18（1590）年に豊臣秀吉によって関東へ転封されるまでの期間と符合しており、徳川支配による城下町の整備と陶器生産・流通への関与をうかがうことができる。

また、かわらけ、内耳鍋、茶釜等の土師質土器についても、当地域における当該期の資料は少ないことから、今後の編年や地域性の検討において重要なものと位置づけられる。

Tab.20 大窯段階における陶器の時期別組成

時期 (段階)	1～2	2	2前半	2後半	2～3	3	3前半	3後半	3～4	4	4前半	4後半	4末
瀬戸美濃窯	2	2		1	1	2	2	3	1	1	3	1	
初山窯								11	1				
志戸呂窯										3			

近 世 近世段階の遺構は全調査区で確認されており、その多くがⅣ層上面、またはⅢ層中から掘り込まれている。今回の調査においては、原則的にⅤ層上面で遺構検出を行っているため、調査区壁面土層にて確認した遺構も多いが、Ⅰ区 SE01、Ⅱ区 SE03、SP157 など深い遺構を中心に平面的に確認できた遺構もあった。また、遺物から年代を確定できないものの、Ⅱ区の SX02 や SA02 などのように近世東海道と方向を同一にする遺構も確認された。

Ⅳ区のⅢ-4層では、細片化した内彎形内耳鍋やかかわらを主体とした遺物が多量に出土した。層位的には近世段階に位置付けられ、17世紀後半頃とみられる唐津焼の碗(147)も出土しているが、内彎形内耳鍋やかかわらの年代は、概ね16世紀後葉～17世紀前半頃に位置付けられる。2次的な廃棄による遺物の年代幅も考慮すべきであるが、Ⅳ区は他のⅠ～Ⅲ区と約100～200m離れていることから、層位の解釈について今後のⅣ区周辺の調査を踏まえて再検討する必要がある。

なお、確認調査の調査溝8～10(国道257号線と松尾小路との交差点付近)では河川跡とみられる堆積が確認された。近世の城下町の絵図に描かれている川の位置と一致しており、近代の市街地整備に伴う造成によって埋め立てられた状況が明らかとなった。

遺物については、江戸時代を通じて瀬戸美濃産陶器が出土しており、中期以降の肥前産磁器も確認されている。一方で焙烙など中期以降の土師質土器は比較的出土量が少ない。Ⅰ・Ⅱe区からは、丸瓦・平瓦・道具瓦(29・121～123)が出土しており、周辺に本瓦葺の建物が存在していたと考えられる。また、Ⅱ区では碗形の鉄滓(56・79)が出土しており、小鍛冶が行われていたことがうかがえる。

この時期の浜松城は、近世城郭として三の丸の拡張と城下町の再整備が行われた。城下町を通る東海道も17世紀前半頃には現在の国道257号と同じ道筋となり、絵図などからは、調査地周辺の東海道沿いは町人地として商業的に栄え、本陣や番所が置かれていたことがうかがえる。今回の調査においては、調査範囲が狭小であることから明確な建物跡は確認されていないが、井戸や土坑・小穴などの遺構は、近世城下町の隆盛を示すものとして注目される。

近 代 今回の調査の層位ではⅡ層に該当する。細かな堆積状況から頻繁に整地が行われていたことがうかがえる。また、焼土や炭化物を多く含む層が複数確認されており、火災や太平洋戦争時の空襲によるものとみられる。

なお、Ⅱ区においては、現代の地割を境にⅡ層の堆積状況が異なる箇所が複数確認されており、近代の地割が現代まで踏襲されていることが確認された。

2 今後の課題と展望

今回の調査は、浜松城城下町の南部にあたる近世東海道沿いを対象として行い、城下町形成前である13世紀代、城下町形成段階である16世紀後半～17世紀初頭、城下町成立段階である17世紀前半～19世紀代において、それぞれ遺構・遺物を確認することができた。

今後の課題としては、近世以降の層位が人為的な整地・造成によるものであるため、調査箇所

よってその様相が異なり、層位の把握が難しい点が挙げられる。市街地における調査であることから調査区を小規模に区切らざるを得ない事情もあり、全体像の把握には丁寧で精緻な調査の積み重ねが求められる。

また、一定の出土量を得ることができた 16 世紀後半以降の陶磁器や土師質土器については、当遺跡におけるこれまでの調査成果も踏まえながら、陶磁器については当地の初山窯の動向を踏まえた流通状況の検討、土師質土器については当地域における編年や地域性に関する検討が必要となる。

当遺跡では、従来市街地では遺構がほとんど残存していないと考えられてきたが、近年の調査の蓄積によって、ある程度遺構が残存していることが明らかとなった。今後は、城下町の構造解明に向けて考古学的調査の蓄積も進めながら、文献史学や歴史地理学など多面的なアプローチを交えた調査研究を進めていくことが必要となるであろう。

註)

- 1) 土師器茶釜の編年については、遠江での良好な出土事例が乏しく、既存の編年観に照らすと 17 世紀以降以降に降る。しかしながら本遺構の共伴関係を重視し、大窯第 3 段階～4 段階 16 世紀後半代にまで遡る可能性があることを指摘しておく。
- 2) 浜松城跡の 10 次調査 1 トレンチⅢ層から同様のものが出土している。鈴木一有ほか 2015『浜松城跡 10』浜松市教育委員会

参考文献)

- 愛知県 2007『愛知県史』別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系
愛知県 2012『愛知県史』別編 窯業 3 中世・近世 常滑系
井口智博 2018「浜松城下町遺跡 1・2・4 次調査報告」『平成 28 年度浜松市文化財調査報告』浜松市教育委員会
井口智博ほか 2016『浜松城跡 11』浜松市教育委員会
太田好治 1996『浜松城跡 ―考古学的調査の記録―』浜松市教育委員会
大橋康二 1989『肥前陶磁』(『考古学ライブラリー 55』) ニューサイエンス社
加藤理文 2014「浜松城をめぐる諸問題」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論文集
菊川シンポジウム実行委員会 2005『陶磁器からみる静岡県の中世社会』発表要旨・論考編
向坂鋼二 1976「浜松市動物園内作左山横穴墳」『森町考古』10
静岡県 1930『静岡県史』
鈴木一有ほか 2015『浜松城跡 10』浜松市教育委員会
東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996『鍋と甕 そのデザイン』(『第 4 回 東海考古学フォーラム 1996』)
永原慶二 1995『常滑焼と中世社会』小学館
名古屋博物館 2019『尾張の城と城下町 三英傑の城づくり・町づくり』(特別展『発掘された日本列島 2019』地域展展示ガイドブック)
山崎信二 2008『近世瓦の研究』同成社
和田達也 2016『浜松における中世城館の調査 ―浜松城跡 11 次(引馬城)・伝松屋敷 2 次―』浜松市教育委員会
和田達也ほか 2017『浜松城下町遺跡』浜松市教育委員会

圖 版
PLATE



1 II a 区 完掘全景（南西から）



1 I区 完掘全景（東から）



2 I区 完掘全景（南から）



1 I区 西壁断面（東から）



2 I区 北壁断面（南から）



3 I区 SE01断面（東から）



1 I区 SE02断面（北から）



2 I区 SE02 中層遺物出土状況（北から）



1 I区 SE02 完掘状況（北から）



2 I区 SD01 完掘状況（西から）



1 I 区 SK02 遺物出土状況（北から）



2 I 区 SP15 根石出土状況（南から）



3 I 区 SP09 断面（南から）



4 I 区 SP20 断面（南から）



5 I 区 SP07 断面（南から）



1 II a 区 完掘全景（南から）



2 II a 区 完掘全景（北から）



1 II a 区 完掘全景（北東から）



2 II a 区 柱列 SA01（南から）



1 II a 区 西壁断面（北東から）



2 II a 区 東壁断面（北西から）



1 II a 区 V層上面高杯出土状況（東から）



2 II a 区 SP08 鉄滓出土状況（南から）



3 II a 区 SP39 根石出土状況（西から）



4 II a 区 SP47 断面（西から）



5 II a 区 SP13・SP39 断面（東から）



6 II a 区 SP48 断面（西から）



7 II a 区 SP55 断面（西から）



8 II a 区 SP45 断面（西から）



1 II b 区 完掘全景（北東から）



2 II b 区 南壁断面（北から）



1 II b 区 SK09 検出状況（東から）



2 II b 区 SK09 遺物出土状況（東から）



1 II b 区 SK09 断面（南東から）



2 II b 区 SK09 遺物出土状況（南西から）



3 II b 区 SP112 遺物出土状況（東から）



4 II b 区 SD01 断面（北から）



5 II b 区 SP126 断面（西から）



1 II c 区北部 完掘全景（南から）



2 II c 区北部 東壁断面（西から）



3 II c 区北部 西壁断面（東から）



1 II c 区北部 SE03 2層上面遺物出土状況(西から)



2 II c 区北部 SE03 5層上面礫層検出状況(北から)



1 II c 区北部 SE01 完掘状況（南から）



2 II c 区北部 SE01 断面（南から）



3 II c 区北部 SE01 底面遺物出土状況（西から）



4 II c 区北部 SE03 上層断面（北から）



5 II c 区北部 SE03 下層断面（北から）



1 II c 区南部 完掘全景（北から）



2 II c 区南部 完掘全景（北西から）



1 II c区南部 完掘全景（南から）



2 II c区南部 南壁断面（北から）



3 II c区（南） 西壁断面（北東から）



1 II c 区南部 SD04・SD07・SD08 完掘状況（西から）



2 II c 区南部 SD02 完掘状況（西から）



1 II c 区南部 SD04A・SD04B・SD07 断面（西から）



2 II c 区南部 SD02 断面（西から）



3 II c 区南部 SE02 完掘状況（北から）



1 II c 区南部 SE02 上層断面 (南から)



2 II c 区南部 SE02 下層断面 (北から)



3 II c 区南部 SE02 底面遺物出土状況 (北から)



4 II c 区南部 SP157 遺物出土状況 (東から)



5 II c 区南部 SP157 遺物出土状況 (北東から)



1 II c 区南部 SP137 遺物出土状況（南から）



2 II c 区南部 SP136 遺物出土状況（南から）



3 II c 区南部 SP153 根石出土状況（北西から）



4 II c 区南部 SP180 根石出土状況（東から）



5 II c 区南部 SP158 根石出土状況（北から）



6 II c 区南部 SP159 断面（東から）



7 II c 区南部 SP188 断面（南から）



8 II c 区南部 SP181 断面（南から）



1 II d 区 完掘全景（東から）



2 II d 区 南壁断面（北西から）



1 II d 区 SX02 断面 (南から)



2 II d 区 SX02 完掘状況 (北から)



1 II d 区 SX03 断面（西から）



2 II d 区 SP98 断面（北から）



3 II d 区 SP105 断面（北から）



4 II d 区 SP106 断面（西から）



5 II d 区 SP102・SP109 断面（東から）



1 II e 区 完掘全景（東から）



2 II e 区 南壁断面（北東から）



1 III区 完掘全景（東から）



2 III区 東壁断面（西から）



3 III区 南壁断面（北から）



1 IV区 完掘全景（西から）



2 IV区 西壁断面（東から）



1 IV区 III - 4 層遺物出土状況（東から）



2 IV区 SK03・SK04 完掘状況（東から）



3 IV区 SK03・SK04 断面（東から）



4 IV区 SR01 完掘状況（東から）



5 IV区 SR01 断面（西から）



1 城下町形成期の出土遺物



2 近世城下町の出土遺物



I 区 出土遺物 (1)



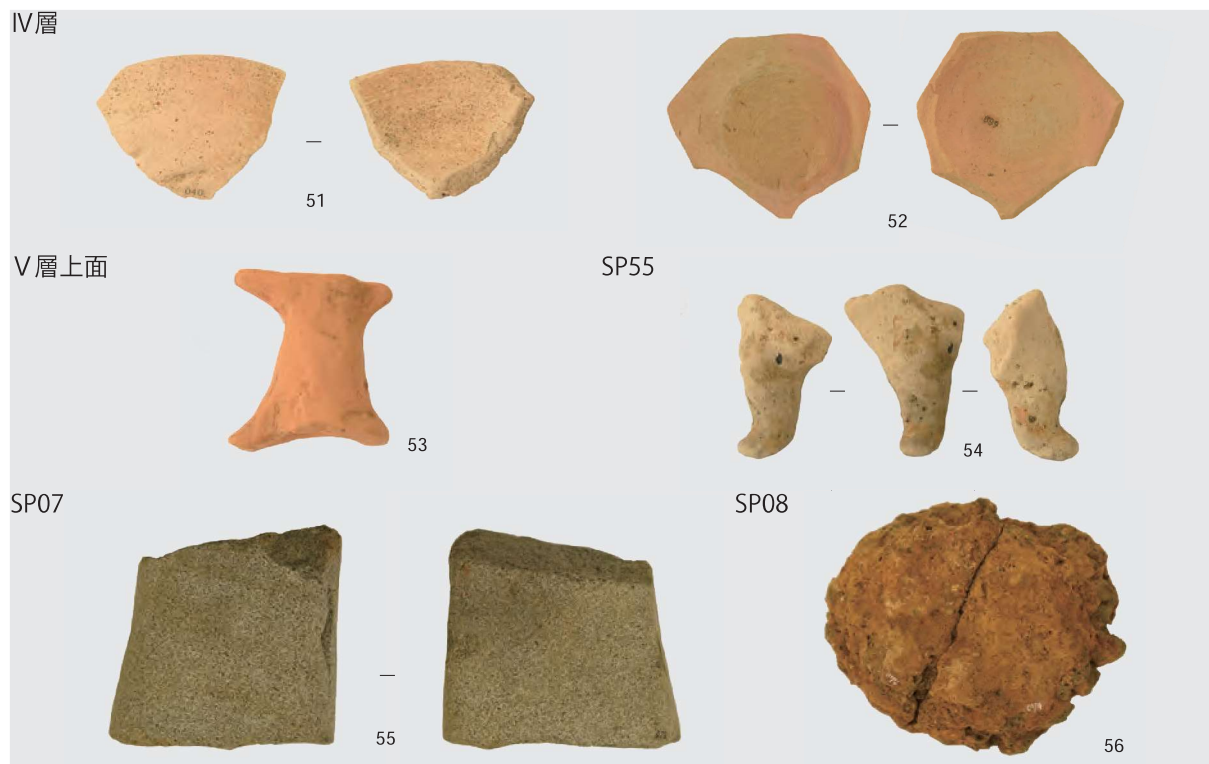
SE02 下層



I 区 出土遺物 (3)

PL.34

IV層



1 II a 区 出土遺物

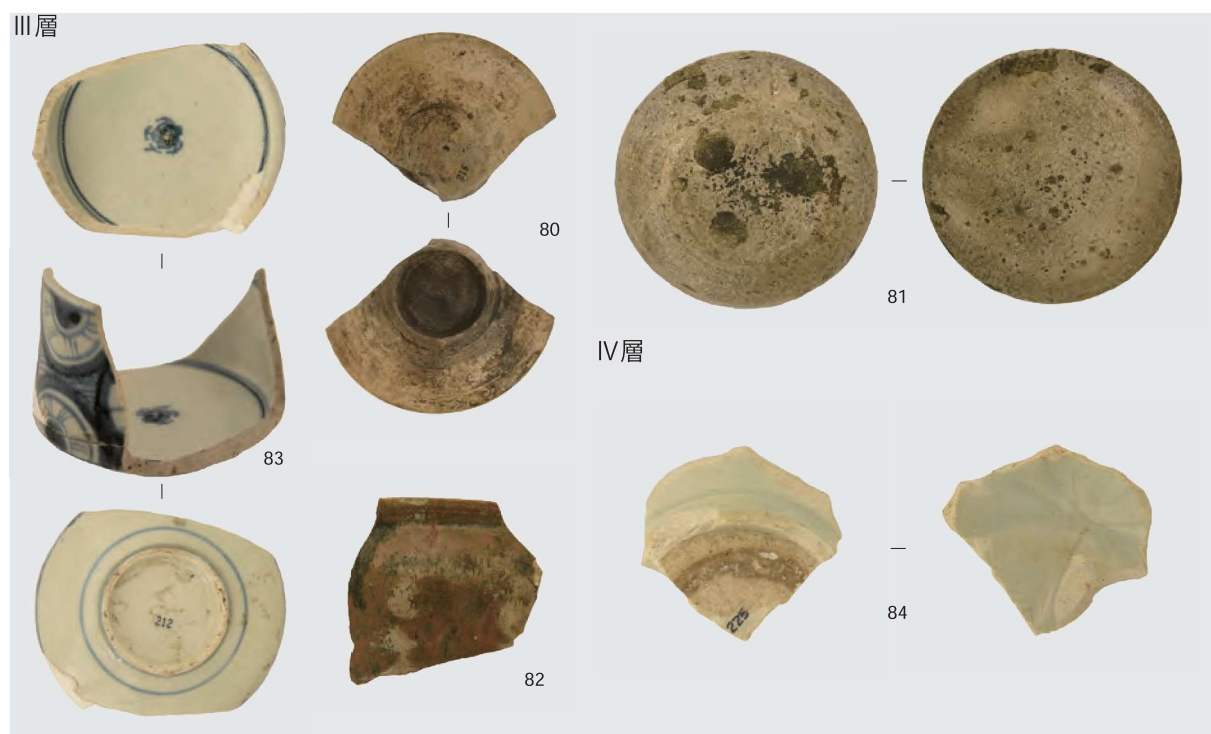
III層



2 II b 区 出土遺物



Ⅱ c 区北部 出土遺物 (1)



1 II c 区北部 出土遺物 (2)



2 II c 区南部 出土遺物 (1)



II c 区南部 出土遺物 (2)



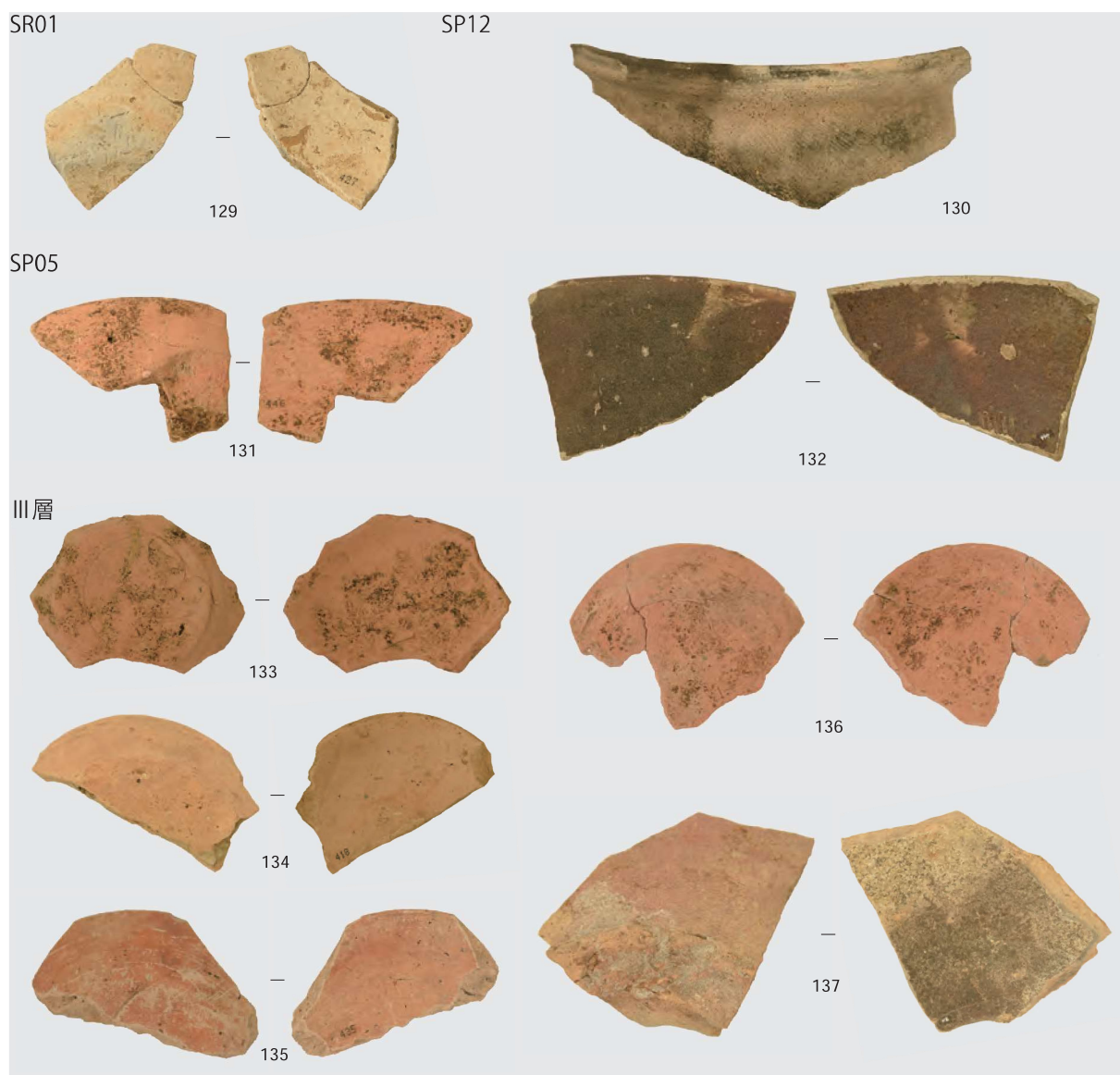
II c 区南部 出土遺物 (3)・II d 区 出土遺物



II e 区 出土遺物



1 III区 出土遺物



2 IV区 出土遺物 (1)

III-4層



III層

IV区 出土遺物(2)

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	浜松城下町遺跡 2（はまつじょうかまちいせき 2）							
編著者名	鈴木京太郎、和田 達也、西村匡広（編）							
編集機関	浜松市教育委員会 〒430-0929 浜松市中区中央 1-2-1 イーステージ浜松オフィス棟 浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466 FAX（050）3730-1391							
編集機関	浜松市教育委員会							
発行年月日	2020 年 3 月 10 日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はまつじょうかまち 浜松城下町遺跡	静岡県 浜松市中区 塩町・旅籠町・ 伝馬町	22131	01- 04- 18	34 度 42 分 07 秒	137 度 43 分 41 秒	2019 年 7 月 2 日 ～ 2019 年 11 月 7 日	380.7 m ²	国道 257 号 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
浜松城下町遺跡	城下町	鎌倉時代 戦国時代 江戸時代		溝 井戸 土坑 小穴 自然流路		陶器 磁器 土師器		

浜松城下町遺跡 2

2020 年 3 月 10 日

編集機関 浜松市教育委員会
 （浜松市市民部文化財課が補助執行）
 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2

発行機関 浜松市教育委員会

印 刷 株式会社明新社

Hamamatsu Castle Town Site

The 11th excavation Report

A Report of Archaeological Investigation on 16th -19th
Century Castle Town in Western Shizuoka, Japan



March, 2020

Hamamatsu Municipal Board of Education